た。中の一本が痩せてはゐるが相當の古木で、昨年も今年も實によく咲いてくれた。何ともいへない清淨な花のすがたであつた。そしてこの木に澤山の實がなつた。小さな〳〵まんまろい黑紫の實である。この實をとることをば父親があまりやかましく言はないので子供たちはこの木によく寄つて行つた。そして屑からエプロンなどまで黑紫の色に染めては母親に叱られた。

櫻桃と林檎。ともに北國の木で、この沼津の海岸には一寸思ひがけぬものである。然し林檎も花だけはきれいに咲くさうである。實も或る程度まで大きくなつて落ちるといふ。櫻桃は意外にも今年立派な實をつけた。山形秋田あたりのものに比べて、さして見劣りのせぬ實をつけたのは意外であつた。來年は十分に肥料をやらうとおもふ。

茱萸。これは茱萸としては先づ見ごとな木である。苗代茱萸でも秋茱萸でもない所謂西洋茱萸であるが、根もとから幾本かに分れて枝の茂つてゐる大きな木である。地味にふさふのだか、一度だけ肥料をやつたに葉も枝も艶々しく茂つて、それこそ無數の實を結んだ。今が丁度まつさかりの熟れどきである。親指のさきほどの圓い眞紅なのが、枝といふ枝のさきからさきにかけてぎつしりとなり枝垂れてゐる。昨日今日の雨で、枝の二三本はおも〳〵と地についてしまつた。裏返つた葉の白みに雨のかゝつてゐるのも美しい。

ゆすらうめ。木も花も實も、可憐なものである。これにも深い思ひ出がある。部屋の掃除をすると

かで、涼しい緣側に暫らく母の床の移されてゐた間に不用意に私は生れたのであつたさうだ。緣さきに見ごとなゆすらうめの木があり、ぎつしりなつた實の色づいてゐるのを見てゐるうちに不意にお前は生れたのだ、と母はよくその緣さきの美しい木の實の熟れるのを見ては私に語つた。子供心に私はそのゆすらうめが自分の友だちでゝもある樣な氣がしてならなかつた。一昨年、十何年振かで歸つてみると故鄕のこの木は枯れてゐた。それこれで、特に氣を使つて植ゑつけたゆすらうめである。眼にもたたぬ、まだほんの小さい木で、それでも五つぶ六つぶの實がなつて、いま少しづつ色づくところである。この木をばもう二三本集めるつもりである。（五月三十一日、早曉擱筆）

鴉と正覺坊

正覺坊

いつもより少し時間は遲かつたが、晩酌前の散歩をして來ようと庭つゞきの濱の松原へ出かけて行つた。其處には松原を縱に貫いて通じてゐる靜かな小徑があり、朝夕私の散歩徑となつてゐる。一二町も歩いたところで、濱から上つてその小徑を切る小徑がある。其處で三人連の漁師の子供に出會つた。いづれも十歲ばかりの見知らぬ子供たちであつたが、なかの一人が行きちがひさまに矢庭に私に向つて兩手をひろげて、

『龜があがつたよ、斯んなにでつけえ龜が……』

と言つた。

するとあとの二人も振返つて同じ樣に兩手を押しひろげながら、

『龜があがつたよ、でつけえ龜が……』

村に知らせにでも行くか、息をはずませてゐる。

『さうか、それはよかつた、其處の濱だけで……』

彼等のうなづいて飛んで行くのを見ながら私は濱徑へ折れた。

濱はまだ明るかつた。そして網の曳きあげられた浪打際から十四五人の人が何やら大きなものを擔いでこの松原つゞきの濱の高みに登つて來るところであつた。

なるほど大きな龜である。二本の棒で、四人の若者に擔がれたこの怪物はやがて漁師小屋の前におろされた。まさしく二抱への胴のまはりと、それに相應した背丈とを持つてゐた。淡色をした首は厚ぼつたく幾重かに皺ばんで、ずつと縮めた時は直徑一尺もあるかに見えた。

あふ向けになつたまゝ置かれてゐるので彼は動く事は出來なかつた。そして時々その不恰好な、身體に合せては小さい四肢をかたみがはりに動かして自分の腹部の甲良を打つてゐた。打つごとにがちやりがちやりと音がした。網で痛めたか、眼は双方ともに血走り、蠟涙の樣なものが斷えず流れて、その末は白くねばりついてゐた。腹の甲良は龜甲形の斑を帶びながらいかにも滑らかで、そして赤みを帶びて黃いろく、美しかつた。

『玳瑁（たいまい）といふでねエかナ』

漁師の一人がその甲良を撫でながら言つた。

『さァ、玳瑁ならたえしたもんだが、たゞの龜づら』

なぜ此處に來たらうといふのがまた問題になつた。どうせ八丈か小笠原島から來たであらうが、卵を產みに來たでは遠すぎるし、何に浮れて出て來たか、『酒でも御馳走になりに來たづらよ』などと、半裸體の漁師たちも子供の樣になつて浮れてゐた。

龜の首を伸ばすのを待つては子供たちはその口へ木片などを押し込んだ。かなりの大きいものも、ぽきぽきと嚙み折られた。中には石ころを嚙ませる者もあつた。廿歲にも近からう大きな惡童は腹にとび乘り、右左に踏み動かして、誰だかに叱られた。

見物人が追々と集つた。逃がすか逃がさないかの相談が持ち出されたのでその結果が聞きたく私も暫らくその中に立つてゐたが、そんな姿をいつまでも見てゐるのが不愉快で、聞き殘して立ち去つた。そして浪打際の網の方へ行つてみた。

みな龜に集つて、網の跡始末をしてゐるのはほんの二三の老人たちであつた。濡れた砂の上には網からあけられたしらすが笊に四五杯置き並べてあつた。生絹のきれはしの樣なこの小さな透明な魚たちはまだ生きてゐて、かすかにぴしよぴしよと笊の中で跳ねてゐた。

その翌日の夕飯の時である。濱から歸つて來たといふ三人の子供たちが、がやがやとお膳に押し並んでゐた。そして私が自分の膳につくのを見るや否や、

『阿父さん、僕また龜を見て來た』

と末の子が言つた。

『ふうちやん、違ひますよ…』

と次の姉は一寸考へてゐたが、今度は私に向つて、

『阿父さん、あれは正覺坊ですつて、龜ぢや無いんですつて』

『ほゝウ、正覺坊か』

と何か知ら驚いた樣な氣持で私は返事したが、やがてわれともなく、

『ふゝうん』

と附け足した。

『正覺坊だつて?』

それを聞いたか濡手をふきふき子供たちの母が勝手から出て來た。

『丁度いゝや、阿父さんのお友達だから』

『なぜ、なぜ、なぜ正覺坊が阿父さんのお友達なの?』

幼い姉弟はむきになつて母に問ひ寄つた。

『はゝア、解つた、お酒飲だろ、正覺坊は』

一番上の中學一年生の兄が言つた。

『ア、さうだ、お酒を飲まして海んなかへ逃がしてやつたよ、いま』

先刻の姉と今一人の姉とは競爭して言つた。

『さうか、逃がしてやつたか、それはよかつた』

父も苦笑しながら話の中に入つてゐた。

『どうして正覺坊はお酒飲なの、母さん』

『阿父さんに訊いてごらん』

『どうして正覺坊はお酒飲なの、阿父さん』

『さアテ、なア、……』

『どうして正覺坊を、折角とつたのに』

『さアテ、……』

漸く一段落ついた所で私は妻に言つた。

『いゝ香具師もつかなかつたと見えるな』

『さうでせうとも、……、早く逃がしてやればいゝのに、慾張たちが』

逃がす、といふ言葉がなぜだかふつと私に例の姿を想ひ出させた、何處か其處らの海の中をせつせといま泳いでゐるであらうその姿を。

鴉

松原の幅が約二百間、西の海に面したそのはづれからかなり急な傾斜で五六十間あまりもなだれて行つてゐるのが濱である。千本濱といひ千本松原といふと優しく聞えるが、なか〳〵大きな松原であり、荒い濱である。

この正月ころからめつきり身體に出て來た酒精中毒のために旅行はおろか、町までへの外出をもようしなくなつた私にとつてこの松原と濱とは實にありがたい散歩場所であるのである。それも少し遠くまで歩くと動悸が打つので、自分の家に近いほんの僅かの部分を毎日飽くことなく一二度づつ歩いてゐるのである。從つて歩く徑も――松原の中には漁師のつけた徑が無數にある――きまつてをれば、腰をおろして休む場所も自づときまつてゐる。

しげ〳〵と立ち竝んだ松原のはづれ、其處から眞白い小石原の傾斜になつてゐるところに休み場の一つがある。腰をおろすに恰好な形を持つた場所に芝草が茂り、腰をおろして海に向つた頭の上には老松が程よく枝をひろげて居る。漁師小屋とも遠く、普通の徑とも離れてゐるので、人に向つて挨拶を交す事さへもない。そして、濱の全部、駿河灣の全部を居ながらに眺め渡すことが出來る。

多く一人でぶら〳〵するのであるが、時には子供を連れて出かける。子供といつても上の三人は學

校に行つてゐるので、大抵いつも末つ子の六歳になる男の子にきまつてゐる。そして休むべき場所には一緒に休む。子供も心得てゐて、自分から先に行つて休んでゐることもある。中で一番多く休むのは右に云つた濱の高み、松の木の蔭である。ぼんやりと海を見、海を越しての伊豆の山の此頃青み渡つたのを見るにはまつたく其處は申分のない位置にある。

このごろ其處で面白いことに氣がついた。我等父子が休んでゐると、何處から飛んで來るか二羽の鴉が飛んで來て、頭の上の松にとまる。一羽の時もあるが、多くは二羽だ。そして高い枝から次第に低く、ともすれば私の手のとゞく所までもおりて來て頻りに、

『カァオ、カァオ』

と啼く。或る時は松の皮を嘴で突き剝いで我等の上に落す。

それだけならばまだしも、我等が其處を立つて家の方に歸らうとすると、あとになりさきになり、松から松の枝を傳つてあとを追つて來る。そして、いよ〳〵家の側の松まで來て、そこでやめる。一度や二度ならば氣もつかなかつたらうが、自づと解る程にまでそれを繰返してゐるのである。そしてそれは多く子供を連れて行つてゐる時で、私一人の時にはあまりやつて來ない。

『ふうちやん、あの鴉は屹度君と遊びたいんだよ、それであんなに君のあとを追つて來るのだよ』

『さうか知ら、あの鴉、僕と遊びたいのかなァ、さうかなァ』

この生意氣先生、甚だ得意であつた。そして早速そのことを母親に報告した。初めは相手にしなかつたが、やがて母親もそれを承知せざるを得なくなつた。

『ほんとだ、ふうちやんと仲好しになりたくつてしやうがないんだよ、遊んでおやりなさいよ』

『うむ、僕、遊んでやらァ』

或る日、また滑稽な場面を見出した。矢張り子供を連れて松原の中を歩いてゐた。すると夥しい音をさせながら松原の小石を蹴立てゝ走り廻つてゐるものがある、私の家に飼つてゐる犬である。瘦身な身體を地に磨りつける樣にして右往左往に走り狂つてゐる。其處は松のやゝまばらなところで、廣い石ころの原である。見れば二羽の鴉が犬とすれ〳〵の低さにまで下つて、あつちに飛びこつちに飛びして、がァ〳〵と啼き騒いでゐる。一羽の鴉が松の枝からフラッとまひおりて來て犬の背を蹴る如くにして向うにゆく、犬が追ふ、反對の側からまたの一羽がフラッとおりて來る、追ふといふ騒ぎである。

『はゝァ、彼奴等だナ』

と私はその鴉を見た。我等父子の姿を見て犬は一層元氣が出たらしかつた。そしてその爭鬪だか遊戯だかは我等の歩むにつれて、松原をはづれて濱に出た。今度は松の木の代りに鴉のとまり場は其處に置き竝べてある漁舟の舳となり艫となつた。追ひつめた犬は勢ひこんで前脚を舷までは打ちかける

が、ほんの一二尺の距りで鴉に及ばない。鴉は嘴をつん〳〵と突き出しながら、『がア、がア』と啼く、其處へ他の一羽が犬の横からつういとやつて來る。

子供も浮かれて犬と共に走つた。そして犬と一緒に舟に縋つて舳へ手をあげる。もう少しで鴉にとどくのである。下手をして、眼でも突つかれては大變だと頻りに氣を揉んだが、そんなこともなかつた。

今日である。少し考へごとをしながら私は一人濱に出た。そして例の松の蔭の休み場に休んでゐた。松の皮が頻りと落ちて來る。ぢいつと眼を擧げると、これも今日は一羽、例の鴉が其處に來てゐる。啼きもしない。

『此奴、親爺まで犬と一緒にしてゐる。』

と苦笑されたが、われ知らず何か言ひかけたい氣にもなつた。

沼津千本松原

一二年靜養のつもりでやつて來た沼津にいつか七年の月日を過ごした。「暫らく」のつもりがいつとなく「永住」の氣持に變り、今では市の片ほとりに一軒の住家を建て、すつかり沼津市民の一人となり切つてしまうた。

わたしの家にはよく客が來る。西から東から、遠くから近くからいろ〳〵の人がやつて來る。それらの人々に沼津の者としてわたしの自慢して紹介するたつた一つのものがある。富士か、否、富士を見るにはお隣の三島からするよりもまづい。ましてや鈴川附近田子の浦一帶からうち仰ぐには遙に及ばない。千本濱公園か、否、公園としては未成品であり、海濱としても一向に異色がない。僅に前面に伊豆半島の横たはるあつて、やゝ平凡を破るがこれとて大したものではない。何處でも見らるゝ海岸風景の一である。

然らば、何處を指して沼津の自慢とするか、曰く千本松原これである。千本松原こそは沼津の自慢であるばかりでなく、ともすると日本としての自慢に値するものであるかも知れぬ。かも知れぬでは

ない、わたしはさうであると信じてゐる。

試みに松原として日本國内に聞えてゐるところを擧げて見給へ。先づ胸に浮ぶは須磨明石であらう。須磨は全然問題でない。小さな、平凡な箱庭に過ぎぬ。松の數だとて一二三と數へ得る程度である。明石の松はなる程綺麗だ。城のあたりから人丸神社にかけ、如何にも綺麗だが綺麗すぎる。繪にある松である。人間のこさへた松である。大自然に根ざした所謂松柏亭々の趣きを持つてゐない。全體の規模から云つてもさう廣く大きくない。次は何處であらう。筑前の千代の松原か、これもかなり長い距離にかけ、みつちりと繁つてはゐる。が、惜いかな松がみな小松だ、而もその小松が全體に渉つて片靡きに靡き伏してゐる。汽車で見て通る時など、松原といふより茅萱の原といふ感じがするのである。殊に箱崎神宮から大學前の公園にかけては、不幸にもなんとかいふ病氣で松がなかば枯死せむとしてゐる。附記するが、この病氣のことに、氣のついたとき、福岡全市は驚愕してその救濟に狂奔した。否、現に努力しつゝある。九州にいま一つ、一寸名を思ひ出せぬが薩摩の西海岸に大きな松原がある。これは支那海から吹きつくる強風のために海濱の砂がまひたつて田畑や人家を襲ふ、それを防ぐために作られた松原だといふ。時によると一日のうちにその松原の松の半ばが砂のために埋められるさうだ。要するに必要物としての松原で自然さに缺けてゐる。サテ、次は何處であらう。さうだ、お隣に三保の松原がある。これは私が書き立つるまでもなく諸君が自由に鑑賞し、また自由に千本松

原と比較せらるゝがよいが、畢竟彼處は傳説の松原であり白砂(?)青松式の松原に過ぎぬであらう。

其他、松原として聞えた所をいま思ひ出さぬが、わたしの知つてゐる所では羽後の酒田の海濱に大きな松原があつた。松の大きさは千本のに相ひとしい。たゞ憾むらくはこれもまた白砂青松で、松は松のみ立つてゐる。其處に深みがない。次に下總の犬吠崎と銚子の河口との間に在る君が濱の松原の松が大きかつた、茂つてもゐた。が、此處も松ばかりで、而も規模もさほど大きくない。此處は或宮家の御持であつたのをツイ先頃拂下になつたさうだ。その拂下を聞いて其處の番人の某といふのが憤死した報道はまだ諸君の記憶にあらうと思ふ、ツイ廿日程前の事である。

千本松原の他に勝れてゐるのは先づその松樹の大きなことである、老木の揃つてゐることである。而もその大きな幹が所謂磯馴松の曲りくねつたものでなく、亭々として聳え矗々として直立してゐることである。第二に松が大きいばかりでなく、松原そのものが廣大である。幅から見ても、狩野川々口に起り富士川川口に及んで居る長さから見ても、恐らく天下無比の廣大さを持つて居るであらう。千本濱の浪打際に立つて遠く田子の浦に及ぶこの偉大にして秀麗なる松原を望む時、誰一人未だ曾て感嘆の聲を發しなかつた客はないのである。いはんや、その松原の上には千古の雪を含んで富士山が聳えてゐるのである。何といふ自然の偉大にして微妙なる配合であらう。

今一つ、他の凡百の松原に比しわが千本松原のすぐれてゐる一事はこの松原が單なる松樹の並立に

あらずしてその下草に無數の雜木を茂らしてゐる事である。ことにそれは沼津寄りの、首塚から西、甲州街道を境にした北側に著しい。雜木の種類は諸君の知悉せらるる所であらう。たぶ(玉樟)の木、いぬゆづりはの木、櫨其他思ひがけぬ木まではえてゐる。ある所に入り込んで行けば其處はもう「松原」ではない、「森林」である。鬱蒼たる樹木の根には羊齒が密生してゐる。篠が茂つてゐる。そして更にその茂つた樹木の枝葉の蔭になりしだれた果實に寄りつどふさま〳〵の小鳥の啼聲を諸君は知り給ふか。この澤山の小鳥の啼聲こそは、千本濱公園に更に五十の池が掘られ百の噴水塔が立てられ一萬二萬の電球が吊りさげられるよりかも難有い天與のたまものであらうと思ふのだ。更にまた諸君は秋澌く深む頃、この繁茂した森林の其處彼處に自づと染出さるる櫨の紅葉を知り給ふか。紅葉は元來寒國のものである。かの「霜葉は二月の花よりも紅なり」の趣きを知らうには先づ信州か上州邊まで出かけねば本當の紅葉は見られない。唯僅に櫨の木のみ暖國におつてもよく紅葉する。櫨の木が思ひがけなくこの千本松原に多いのである。季節から云へば、秋よく冬よく春よく、夏やゝ劣る。雨によく、晴れてよい。

初めわたしが東京から移住するにこの沼津を選んだのは、その少し前、伊豆の土肥に行かうとして沼津に一泊し、端なくこの松原を見出してその偉大さに驚いたのがもとであつた。移つて來た當座は上香貫に住んでゐたが、折あれば香貫からこの千本に通うた。一昨年香貫より千本濱に移り、昨年、

終にその松原の蔭に一軒家の庵を結んでしまうた。而して朝に夕にこの松原の中を散歩し、興湧けば歌に詠じた。松原を歌うたもの、既に少からぬ數に及んで居るであらう。

然るにわたしは近來このわが一生の好伴侶である松原の中に、驚くべく悲しむべき一現象を發見した。そはわが親愛なる松の木の幹の皮を剝ぎ「一三五」とか「一五八」とかいふ番號の書きつけられてあることであつた。而もそれはこの松原の最も深邃なる部分、例の首塚から西、甲州街道を中にして北側、謂はゞこの松原の目貫の場所に限られてゐるのである。

わたしはまつたく慄然とした。それを發見した後數日間はわたしは其處を散歩することをすらようしなかつた。

流石に濱の松全體を伐らうといふのではないさうだ。然し、いま番號をつけてある部分だけでも伐つてしまへばもう日本の千本松原ではあり得ないのである。普通の平凡な松原になり終るのである。

なるほどこの見ごとな松の木のことである。伐れば相當の金にはなるであらう。この美しく茂つた雜木も薪としては役だつであらう。然しその金は新にこれだけの松原を作るとしての費用の何十分何百分の一に當るであらうか。況んやこれを伐つてしまうのは五日か十日で濟むであらう。これだけに仕立てるとしたら果して何十年何百年のタイムを要してかく成就するであらうか。

噫、悲しむべき風説よ、どうかたゞの風説として速かに通り過ぎて呉れ。痛ましい計畫よ、どうか

夢みられた計畫としてきよらかに流れ去つて呉れ。わたしは此處に誰にとはなく、何處にとはなく、たゞ親愛なる沼津千本松原のために合掌してその無事を祈るのみである。合掌。（八月十四日早曉稿）

沼津千本松原

私が沼津に越して來ていつか七年經つた。或はこのまゝ此處に居据わることになるかも知れない。沼津に何の取柄があるではないが、唯だ一つ私の自慢するものがある。千本松原である。

千本松原位ゐ見事な松が揃つてまたこの位ゐの大きさ豐さを持つた松原は恐らく他に無いと思ふ。狩野川の川口に起つて、千本濱、片濱、原、田子の浦の海岸に沿ひ徐に彎曲しながら遠く西、富士川の川口に及んでゐる。長さにして四里に近く、幅は百間以上の廣さを保つて續いてをる。この全體を千本松原といふは或は當らないかも知れないが、而も寸分の斷え間なく茂り合つて續き渡つてゐるのである。而して普通いふ千本松原、卽ち沼津千本濱を中心とした邊が最もよく茂つて居る。松は多く古松、二抱へ三抱へのものが眼の及ぶ限りみつちりと相並んで聳え立つてゐるのである。ことに珍しいのはすべて此處の松には所謂磯馴松の曲りくねつた姿態がなく、杉や欅に見る眞直な幹を伸ばして蠢々と聳えて居ることである。

今一つ二つ松原の特色として擧げたいのは、單に松ばかりが砂の上に並んでゐる所謂白砂青松式で

ないことである。白砂青松は明るくて綺麗ではあるが、見た感じが淺い、飽き易い。此處には聳え立つた松の下草に見ごとな雜木が繁茂してゐるのである。下草だの雜木だのと云つても一握りの小さな枝幹を想像してはいけない。いづれも一抱へ前後、或はそれを越えてゐるものがある。

その種類がまたいろ〳〵である。最も多いのはたぶ、犬ゆづり葉の二種類で、一は犬樟とも玉樟ともいふ樟科の木であり、一は本當のゆづり葉の木のやゝ葉の小さいものである。そして共にかゞやかしい葉を持つた常綠樹である。その他冬青木、椿、楢、櫨、楝、椋、とべら、胡頽子、臭木等多く、椶などの思ひがけないものも立ち混つてゐる。而して此等の木々の根がたには篠や虎杖が生え、まんりやう藪柑子が群がり、所によつては羊齒が密生してをる。さういふ所に入つてゆくと、もう濱の松原の感じではない。森林の中を歩く氣持である。

順序として此れ等の木の茂み、またはその木の實に集まつて來るいろ〳〵の鳥の事を語らねばならぬ。が、不幸にして私はたゞ徒にその微妙な啼き聲を聽き、愛らしい姿を見るだけで、その名を知らぬ。僅に其處に常住する鴉——これもこの大きな松の梢の茂みの中に見る時おもひの外の美しい姿となるものである、ことに雨にいゝ——季節によつて往來する山雀、四十雀、松雀、鵯、椋鳥、鶫、百舌鳥、鶯、眼白、頰白等を數ふるに過ぎぬ。有明月の影もまだ明らかな曉に其處に入つてゆけば折々啄木鳥の鋭い姿と聲とに出會ふ。

夜はまた遠く近く梟の聲が起る。見ごとなのは椋鳥の群るゝ時で數百羽のこの鳥が中空に聳えた老松の梢から梢を群れながら渡つてゆくのは壯觀である。

秋の紅葉は寒國のもので、暖かい國だとよく紅葉しない。楓など寧ろきたない黃褐色に染つて永い間枝頭にくつ着いてゐる。僅に櫨のみ暖國でもよく紅葉する。どうしたものかその櫨がこの松原の中に多い。なか〳〵大きいものもある。老松の間に在つてこの木の漸く染まる頃からこの松原はよくなつて來る。茅萱が美しい色に枯れ、萬兩や藪柑子の實の熟れて來る冬もいゝ。冬は朝にゆふべに、淡い靄が必ずこの松原の松の根がたに漂うて居る。十二月には椿が咲いて——その頃まで撫子も咲いてゐるが——やがて春になる。春もいゝ。小鳥の聲の次第に多くなる初夏、この時もいゝ。たゞ眞夏だけは感心しない。

この廣く且つ長い松原の中央に縱に一筋の小徑が通じてゐる。狩野川の川口から原町の停車場に到る間二里あまりは紛れなく通じて居るが、それから西は判然してゐない。この小徑はもと甲州街道ともいひ、甲駿街道とも呼ばれたもので、その出來た初めは現在の東海道よりずつと舊いものださうだ。想ふに今の東海道の通じてゐる邊は昔は現在の浮島村附近の如く一帶に深い沼澤地であつて道路など造れなかつたものであらう。而してこの海岸沿ひの砂丘の上に一筋の道をつけて通行してゐたであらう。それはとまれ、私はこの松原の中の甲州街道を歩くことを非常に好む。何とも云へぬ靜けさ、何ともいへ

ぬ明るさ、何ともいへぬうるほひがこの松原の、といふより長い〳〵森の中の小徑に漂ふてゐるのである。たま〳〵出會ふのは漁師たちで、たゞ松風とやゝ遠い浪の音と小鳥の聲とがあるのみである。芝居でやる伊賀越の沼津の平作が腹を切つたは東海道でなく、この甲州街道を使つてあるさうだ。

沼津から千本濱へ出やうとする濱道の右手に千本山乘運寺といふ寺がある。當代よりは廿六世以前、山城國延曆寺乘運公の實弟、增譽上人といふ人がこの沼津の地に來り、以前鬱蒼として茂つてゐたと傳へらるゝ松原が相模の北條と甲斐の武田との戰ひの戰略から一本殘らず伐り拂はれ、見る影もない荆棘の曠原となつてゐたのを嘆き自ら植樹に着手した。然し、今もさうだが此處の濱は砂地でなく荒い石の原である。植ゑてもなかなか根づかない。ために上人は一本を植うるごとに阿彌陀經を誦し、植ゑ且つ讀經しながら辛うじて先づ一千本を植ゑつけた。而して時の政府に建言し、枝一本腕一本といふきびしい法度を設けて苗木を愛護し、數代の苦心によつて現在の壯大な松原が出來上つたものださうだ。元來この東駿河地方は秋口から春にかけて吹きつくる沖の西風の極めて烈しい所で今でも大の男がまともに歩きかぬる風に出會ふことが屢々ある。松原の絕えてゐた時代、その西風が海から汐煙を吹きあげて遠く四周に撒き散らし、農作物は出來なくなつてしまつた。增譽上人は單に松の眺めの絕えたを惜しんだばかりでなく、斯うした濟世救民の志もあつたのである。この大きな松原に遮られて汐煙はおろか、風そのものすらも遠く數町の間には落ちて來ぬのである。

初め私がほんの一二年間休養するゝもりでの轉地先をこの沼津に選んだのは、その前年伊豆の土肥溫泉に渡らうとして沼津に一泊し端なくこの松原の一端を見出し、それに心を惹かれてのことであつた。で、沼津に移つて來てからは折あればこの松原にわけ入つて逍遙した。そして終に昨年、その松原の松の蔭の土地を選み、自分の住家を建てた。それこそ松原の直の蔭で、隣接する家とてもなく、いまだに門に人力車を乘りつくる事も出來ぬといふ不便の地點の一軒家である。無論松に親しむ心が先立つたのであつたが、一つはこの冬の西風を避けたいためでもあつた。そしてこの二つの願ひは願ひどほりに叶うたのである。此處で私は今まで何といふことなしに始終追はれ通しに追はれて來た樣な慌しい生活を棄て、心靜かに自分の思ふまゝの歩みを歩むといふ樣な朝夕に入らうとしたのであつた。

ところが、昨今、聞くに耐へぬ忌まはしい風說を聞くことになつた。曰く靜岡縣は何とかの財源を獲むがために沼津千本松原の一部を伐採すべしといふのである。

元來この千本松原は帝室御料林に屬してゐた。それを永年運動の效があつて靜岡縣は今年これを自分の手に納めた。納むるや否や、百年の風雨に耐へて來たこの老樹の幹の皮を剝いで黑々と番號を書き込んだのである。松ばかりか、茂り合うて枝葉を輝かしてゐるたぶの木にも犬ゆづり葉の木にもみなそれが記された。薪に賣らむがためである。

無論、松原全帶を伐らうといふのではない。右云うた甲州街道から北寄りの沼津市内に屬する部分

を伐らうといふのである。然り而うして其處は實に東西四里にわたる松原のうち最も老松に富み、最も雜木が茂り、最も幅廣く、千本松原の眼目とも謂ふべき位置に當るのである。此處を伐られてはもう千本松原は日本一の松原ではなくなる、普通の平凡な一松原となり終るのである。

流石に沼津も騷ぎ始めた。沼津として此處を伐り拂はるゝ事は全く眉を落し頭を剃りこぼたるゝに等しい形になるのである。また、靜岡縣としても此處を伐つて幾らの錢を獲むとしてゐるのであらうか。幾らの錢のために增譽上人以來幾百歳の歳月の結晶ともいふべきこの老樹たちを犧牲にしようといふのであらうか。

私は無論その松原の蔭に住む一私人としてこの事を嘆き悲しむ。が、そればかりではない。比類なき自然のこの一つの美しさを眺め樂しむ一公人として、またその美しさを歌ひ讃へて世人と共に樂しまうとする一詩人として、限りなく嘆き悲しむのである。まつたく此處が伐られたらば日本にはもう斯の松原は見られないのである。豈其處の蔭に住む一私人の嘆きのみならむやである。

靜岡縣にも、縣廳にも、また沼津市にも、具眼の士のある事を信ずる。而して眼前の些事に囚はれず徐に百年の計を建てゝ欲しいことを請ひ祈るものである。(九月六日、徐ろに搖るゝ老松の梢を仰ぎつゝ)

酒と歌

今まで自分のして來たことで多少とも眼だつものは矢張り歌を作つて來た事だけの樣である。いま一つ、出鱈目に酒を飲んで來た事。

歌を作つて來たとはいふものゝ、いつか知ら作つて來たとでもいふべきで、どうも作る氣になつて作つて來たといふ氣がしない。全力を擧げて作つて來たといふ氣がしない。たゞ、作れるから作つた、作らすから作つたといふ風の氣持である。寢食を忘れてゐる樣な苦心ぶりを見聞きするごとにいつもうしろめたい氣がしたものである。

わたしは世にいふ大厄の今年が四十二歳であつた。それまでよく體が保てたものだと他もいひ自分でも考へる位ゐ無茶な酒の飲みかたをやつて來た。この頃ではさすがにその飲みぶりがいやになつた。いやになつたといつても、あの美味い、いひ難い微妙な力を持つ液體に對する愛着は寸毫も變らないが、此頃はその難有い液體の德をけがす樣な飲み方をして居る樣に思はれてならないのである。湯水の樣に飲むとかまたはくすりの代りに飲むとかいふ傾向を帶びて來てゐる。さういふ風に飲めばこの

靈妙不可思議な液體はまた直にそれに應ずる態度でこちらに向つて來る樣である。これは酒に對しても自分自身に對しても實に相濟まぬ事とおもふ。

そこで無事に四十二歳まで生きて來た感謝としてわたしはこの昭和二年からもつと歌に對して熱心になりたいと思ふ。作ること、讀むこと、共に懸命にならうと思ふ。一身を捧じて進んで行けばまだわたしの世界は極く新鮮で、また、幽邃である樣に思はれる。それと共に酒をも本來の酒として飲むことに心がけようと思ふ。さうすればこの廿年來の親友は必ず本氣になつてわたしのこの懸命の爲事を助けてくれるに相違ない。

金比羅參り

少年世界愛讀者諸君。これはわたしの小さかつた時の思ひ出話で、小說ではありませぬ。地名人名等、すべて本名を用ゐてあります。

わたしの十二歳の春、丁度高等の二年から三年に移らうとしてゐた時の、今から三十三年以前の話です。その頃は小學校の學級の制度が現在とは違つてをり、尋常科高等科ともに四年づつになつてゐました。ですから高等二年といふと、現在の尋常六學年級に當ります。

日向の國延岡町といひますと、今は相當開けてゐるさうですが、その頃は極くひつそりした田舍町でありました。でも、內藤豐後守といふ御譜代の殿樣のお城のあつた城下町だけに、寂しいけれど上品なところのある町でした。

五個瀨川と大瀨川といふ二つの河が、丁度、島のやうにその町やその隣村をかこんで流れてゐました。——今でも流れてゐますが。

町の西寄りのはづれに、城山といふ小さいけれど嶮しい山が孤立してゐました。名の示すごとくお

城の跡の山で、千人殺などいふ高い石垣などもその一部に殘つてゐます。今は公園になつたとかでたいへん綺麗になつてゐるさうですが、わたしどもの少年の頃には草木の茂るにまかせた、荒れ廢れた舊城趾の山でした。

たゞ、頂上に鐘つき堂と堂守の小屋とがあり、一時間ごとに鐘をついて、町や村の人たちに時間を知らせてをりました。今でも多分殘つてをりませう。

三月のなかばすぎのよく晴れた日でありました。

わたしは村井の武ちやんといふ、同じ級の仲好しの友だちと二人で、この城山に登つて遊んでをりました。丁度、學年試驗が昨日から始つたといふ日曜日のことでした。昨日濟んだ試驗は算術と圖畫とであつたことを不思議によく覺えてゐます。試驗最中に山に登つて遊ぶなどといふと、ひどく怠惰者のやうに聞えますが、たしかに二人ともの、んき者ではありました。いや、現在でもひと一倍のの、んきものなのです。武ちやんはいま東京驛前の大きなビルヂングに事務所をおいて、立派な建築技師になつてゐます。

ほんたうによく晴れた春の日で、日向はごぞんじのとほり暖い國ですから、三月の中旬といふと。もう多分櫻の花なども咲きかけてゐたでありませう。雲雀も囀つてゐたに相違ありません。

西南戰爭で有名な可愛嶽は東に、北から西にかけては行騰山速日峰といふ大きな山々が屏風のやう

に延岡平野をとりかこみ、平野のなかをば大瀨五個瀨の大きな河が流るゝともなく流れてをり、やがてその二つの河が相合して流れ落つる南のかたには、縹渺として限りのない日向洋が、太平洋がうち開けてゐるのです。

そして、すべてが霞んでゐました。野も霞み、河も霞み、山も霞み、海もまたよく風いで夢のやうに霞んでをりました。眼下の延岡町も麗らかな日光を受けながらも、ほのかに霞んでをりました。

どんなことを二人して話してゐましたか、多分試驗のこと、試驗休みに歸つてゆく鄕里のことなどを話してゐたでありませう。武ちやんもわたしも、その延岡町から十里ほど引つ込んだ山奥の村からでてきて延岡高等小學校に遊學してゐたのです。武ちやんの村も、わたしの村も寂しい村で尋常小學校ばかりしか無かつたのです。いろ〳〵の話にも倦んだころ、ふつと武ちやんがいひました。

『繁ちやん〳〵。ありう見ね。汽船が通つちよるよ』

今では若山牧水などとむづかしい名をつけてゐますが、その頃は若山の繁ちやんであつたのです。なるほど、眞向うの海の片つ方の岬の端から、一艘の汽船が煙をあげてでてきました。

『ウム、大けな汽船ぢやごたるネ』

その頃の日向は、ほんたうにまだ開けてゐなかつたものですから、汽車は全然通じてゐず、港から港へ寄る汽船の數も、極く少なかつたのです。で、汽船を見ることがまだ珍しうございました。

その汽船を眺めてゐるうちに、ふと、ある一つの聯想がわたしの頭に浮びました。そして、そのことを武ちやんに話しました。

話とはかうなのです。ツイ一兩日前に、鄕里の母親からわたしに手紙が來て、今度急に思ひたつて都農の義兄と一緒に讃岐の金比羅さまにお參りする。そして、そのついでに大阪見物をもして來る。歸りには何かお土產を買つて來るがお前は何がほしいか。こちらあてに返事を出したのではもう間に合はぬから、何日までに細島港の船問屋日高屋に宛てゝ、手紙を出せばそれを受取つて汽船に乘る。と、いつて來てあつたのです。やれ嬉しやとあれを考へこれを考へ、土產物の種類を三つも四つも書きたてゝ、ツイ昨日細島港あてに手紙を出したところだつたのです。

得意氣に、わたしがその土產物の名を竝べたてゝゐると、武ちやんは默つてそれを聞いてゐましたが、やがて考へ深さうな顏をしてわたしに言ひました。

『繁ちやん、それァお前も一緒に從いち行きね。行た方がいゝが、……土產物どん貰ちよつたちつまらん。それァ行たほがよつぽづいゝが……』

これを聞くと、わたしは愕然としました。まつたく喫驚しました。今まで全然氣のつかなかつた一大事を、いま突然敎へられたやうな驚きであつたのです。忽ち胸はどきどきとしだしましたが、それもすぐ納りました。

『でも、試驗があるぢァねェけ』

『試驗どま、どうでむいゝが、お前はゆう（能くの意）出來なるとぢァかに、先生が落第やさせならんが』

これを聞くと、わたしの胸はまたどき〳〵とし始めました。

汽船は今は全く岬を離れて、丁度眞向ひの沖の深い〳〵霞のなかに、その煙を靡かせてゐました。沖あひ遙かに通つてゐるこの汽船の姿は未知の世界に對する子供の憧憬心をそゝるに全く適當してゐました。が、わたしはその時のことを思ひ出すと、どうしたものか汽船そのものより、汽船を包んでゐた霞のことが先づ頭に浮びます。

前もうしろも、上も下もまつたくとろりとしたやうなうすむらさきの霞が、深々と垂れ籠めてゐましたが、十歲や十一歲の身そらで、だいそれた謀叛をたくらんだといふのも一つはたしかに、その霞の誘惑だつたとわたしはいま思ひます。

それからどのくらゐの間、二人してその城跡の山の上の枯草原で密議を凝らしましたか、二人とも非常な昂奮を抱いて山を降りる頃は、日はもうとつぷりと暮れてをりました。汽船はとつくの前に沖合を通り過ぎ、一方の方に突き出てゐる岬の蔭に姿をかくしてゐたのです。

密議の結果はかうです。武ちやんは明日學校で、繁ちやんは鄕里の阿母さんが急病で迎ひが來て歸

りました、と先生に屆けること。わたしは今夜書置の手紙を書いて、明日の朝それを机の上において、いつも學校にゆくやうな風をして宿を出ること。そして、郷里には歸らず、一直線に細島港に向つて走ること、その他でありました。當時わたしの預けられてゐましたのは評判のやかまし屋の士族の家でありましたので、正直に打ちあけて願つた所で、とても許される筈はない。許されるどころか、拳固の二つ三つは當然覺悟しなくてはならない。書置に詳しく書いておいて、逃げ出すが一番安全の策だといふことに、決つたのです。

事はすべて計畫どほりに運ばれました。延岡から細島港まで六里あります。その間をわたしは殆んど走りづめに走りました。さう急ぐことはないのだが、脚がひとりでに走つてゐるのです。しかも、細島に近づいた所では大膽にも山越の近道をやりました。山に入つて近所に人のゐなくなつたのを知るや否や、わたしは泣きながら走りました。初めはしく〳〵と泣き、後には大聲をあげて泣きました。何故、泣いたか、わたしにもよく解りません。諸君の御推察にまかせます。

細島港の日高屋は、船問屋に旅館業其他を兼ねた大きな家でありました。わたしのその家に行つたのは初めてゞしたが、わたしの家とは舊くからの知合で、この家の人でわたしを知つてゐるのが二三人ありました。で、たいへん都合よく、十一歳の少年は一人前の旅客として、ある一室に通されました。そして、胸を躍らせつゞけに、その日の夕方を待つことになりました。

その日の夕方、豫定どほりに母と都農の義兄とは馬車でその宿にやつて來ました。都農の義兄といふのは都農といふ町で肥料雜穀商を營んでをり、その處へわたしの一番上の姉が嫁いでゐました。

思ひもかけぬわたしの顏をその宿屋で見出した母の驚きは、これはもう言葉の外でありました。驚き、怒り、且つ嘆き、これからすぐ夜道をして延岡へ歸れ、自分も送つて行くといふのです。流石に、わたしも迷ひが覺めて、それではこれから夜道を踏んでまた六里を走らうと思ひ出しました。ところが都農の兄といふのが田舍者としては、割に手廣く商賣をしてゐますだけに度胸も大きく、わたしの今度の企てた亂暴にひどく興味を覺えたと見えて、わたしに味方し、しきりに母にとりなして呉れました。

また折々商用でわたしの村に來て、わたしの家に泊つたりしてわたしを可愛がつて呉れてゐた日高屋の番頭の庄さんといふのも、わたしに代つて詫びつ賴みつして呉れましたので、終には母の怒も解け、愈々金比羅參り大阪見物のお伴が許されることになりました。

その道中記が素晴らしく面白いのだが、それはまたの時にゆづります。なにしろ三十三年前のことで、日向から大阪にゆくといふのはたいしたことであつたのです。汽船も百噸か二百噸の小さなもので、細島から大阪までまる三日かゝつて到着するのは極くいゝ方で、風雨の都合荷物の都合では、四日も五日もかゝつたものなのです。

學校の先生は日吉昇先生といふかたでした。たいへんいい先生で、無論わたしのやつたことの眞相をば推察されたでせうが、知らぬ振をして叱りもせず落第もさせず、今まで一番であつた席次を四番だかに下げて、及第さしてありました。書置をして來た宿の立腹はたいしたもので、早速下宿を斷る旨の手紙がわたしの鄕里坪谷村の父の許に飛び、驚き狼狽へた父が、早速延岡まで出かけて行つて、これもどうやらもと通りに納りました。

話はずつと飛んで一昨年、大正十四年のことになります。わたしがこの駿河の沼津に自分の住宅を建てようとする企てのある事が、或る新聞の文藝消息欄に出ました。すると一通の手紙がわたしの許に屆きました。若山、君は家を造るさうだが、その設計は乃公がしてやるから一切任せろ、といふ文面です。いふまでもなく村井建築技師から來たもので、わたしも大いに嬉しくなり、それまでの腹案をば捨てて、難有い、一切賴むと返事しました。彼とはその後、中學をも同級で過し、東京の學校に來る時も一緒でした。

そして、彼は建築學の方の學校を卒業し、わたしは文學の方を出ました。お互ひにのんき者のことで、學校を出るなり音信不通の有樣で、右の手紙など恐らく十五六年目に見た彼の手蹟であつたのです。

彼は早速東京からやつて來ました。そして敷地を見、大體の設計をし、愈々工事にかゝつてからも

忙しい中を、一週間に一度位ゐづつこの沼津へ通つて來ては、大工たちに種々と注意してゐました。そして家ができ上つた祝ひの席にも來てくれました。その時わたしが、

『村井君、せめて汽車賃位ゐ出さないと僕もきまりが惡いが……』といひますと、彼はぐるりと眼玉を剝いて、

『馬鹿んこつ言ふな』

と、久しぶりの日向辯でいつて、わたしを睨みました。

夢

眼覺むれば寢汗しどろにおのが生の寂しき事
をゆめみたるかな（舊詠）
うつつにも夢にもあれや眞寂しき苦しき夢を
いま見たりけり
おのが生の心細さをかき集めひそかに夢は見
えて來にけむ

身體の弱つてゐるせゐか此ごろ實によく夢を見る。たて通しに見てゐる樣な夜も少くない。そしてその大半は不愉快な夢か、もしくは餘りにも出鱈目な夢である。それでも極めて稀に面白いのを見、且つそれをはつきりと覺えてゐる事がある。今朝がた見たものなどその一つである。一年に幾つも見る夢でないと思ふので、起きてこゝにかきつけて置く。

豐かな大河のほとりである。その大きな土堤をわたしが歩いてゐる。樹の數は多くないが揃つた老

木の櫻が咲きも揃はず散りも始めずといふ花ざかりを見せて土堤に竝んでゐる。上野だ飛鳥山だとばかり騷ぎ廻つて東京の近くにこんな櫻のいゝ所のあるのを誰も知らぬ、しやうのない奴等だとわたしは憤慨しながらその土堤の上、花の下を逍遙うてゐた。前にうしろに誰一人ひとの影はない。月はたしか無かつたが、うす蒼い樣な夕暮であつた。

とある所に腰をおろして（多分そこで一杯やつたのだとおもふ）うつとりと河を見てゐるとツイ眞下に苫船が十艘ばかり竝んでゐる。舟にも人のけはひは無い。その中の一つにわたしは土堤を下りて入つて行つた。

氣がつくと舟は頻りに流れを下つてゐる。舳は竿、艫は櫓で、二人の男が漕いでゐる。これは困つたとおもうたが、いづれそこらに着けるであらう、いま驚かすでもあるまいとわたしはその儘ぢつとしてゐた。

なか〳〵着けない。隨分と永い間漕いだ末に漸く何處ぞの岸に着いた。のこ〳〵と這ひ出して行くと、果して彼等は驚いた。が、それほど怒つてもゐない。見れば六十ぐらゐの親爺と二十歳ぐらゐの息子とである。四邊は葦の樣なもの、茂つた沼地で、しつとりした夜だ。サテ困つた、小石川の方へ歸つて行くにはどう行つたらいゝでせうと尋ぬると、二人ともけゞんさうな顏をしてそんな所は知らぬといふ。小石川といつても本當は巢鴨で、癈兵院の森があるでせう、そこまで歸るんですが（註、

これは十年ほど前にわたしの住んでゐた所で通稱天神山と呼んでゐた、と重ねていつてもなほ知らぬといふ。小石川を知らないはずはないが、一體こゝはどこですと訊くと、××といふところだといふ。(註、その××をどうしても思ひ出さぬ。)さういふ所は今度はこつちが知らなかつた。

まア兎に角俺が家まで來るがいゝといふのでその船頭親子に連れられてその家へ行つた。電燈が明るく點いてゝ、小さな店だが、駄菓子や鼻紙類や玩具やが竝べてある。見ると店の隅にゴム風船が幾つか下を繋がれてふわ〳〵上つてゐる。オヤ〳〵、こんな所に風船があつたものをとわたしは思つた。(註、風船はこの數日來、末の子供の頻りにほしがつたもので自轉車でまで探させたがこの沼津でようみつけなかつたものである。)

近所の人も二三人來て談合したが、矢張り小石川は解らなかつた。スルトそこの主婦がふと氣のついた樣に息子に向つて、ソレ〳〵此間筆屋さんで置いて行つたセンヨウといふ筆の出來る所がたしか小石川といひはしなかつたか、といつた。さう〳〵センヨウセンヨウ、と答へながら息子は立つて奥の間に入つて小さな抽出の樣なものを持つて來た。見ると五六本の萬年筆が入つてゐた。なるほど、萬年筆だから泉洋か、これはうまく名附けたものだとわたしは感心した。(註、十年前に住んでゐたといふ家の附近にパイロットといふ萬年筆を造る工場があつた、その聯想ならむ。)

そのうちそこに泊めて貰ふことにでもなつたのであらう、わたしはその家の濡縁の樣な縁側に立つ

てゐた。前も横も背後も堀割の水で圍まれた家で、水には藻草が浮き、素晴しく大きな無花果の木が何本となくそこ等の水邊に茂つてゐた。これは面白いところだと思ひながら(註、曾遊の地の行德とか利根川べりとか手賀沼あたりの聯想らしい)ふとうしろを見ると、主婦さんがせつせと座敷を掃いてゐる。ハテ、この主婦さんをば何處かで見たが、何處で見たのであらうとわたしは熱心にその頰冠りをした顏を見てゐた。背の高い、小ざつぱりした、色の淺黑い主婦であつた。

そのうちどうした拍子か壁にかけてあつたわたしの中折帽が箒にでも障つたか、ぱたりと落ちた。落ちて、中から一枚の名刺がとび出た。主婦さんはそれを拾ひ上げて、息子を呼んで、これは何かと問ふた。

息子は手にとつて暫らく見てゐたが

『若山牧水か』

吃くと共に、

『これか、これはナ、帽子の名だよ、ソラ、海軍に行つた××ちやんがこれを一寸かぶつてゐたことがあつたぢやアねエか』

以上でわたしの今朝の夢は終つてゐる。なんと愉快な夢ではなかつたか。おしまひの帽子の件は同じく巢鴨の天神山時代の散歩區域に向鳥印日之出帽子製造工場とかいふのがあつた。それからでも出

た聯想と見るよりほか何も他に考へつかぬ。どうしてまたかう巣鴨時代の記憶ばかりが集つて一つの夢となつたか、おもふに十年も前のその邊の櫻の咲かうとする今ごろの氣分は確かに忘れがたいものではあつた。(三月十五日朝)

湯槽の朝

三月廿八日、午前五時ころ、伊豆湯ヶ島溫泉湯本館の湯槽にわたしはひとりして浸つてゐた。溫まるにつれて、昨夜少し過した酒の醉がまたほのかに身體に出て來るのを覺えた。わたしは立つて窓のガラスをあけた。手を延ばせば屆きさうな所に溪川の水がちよろ〳〵と白い波を見せて流れてゐた。ツイ其處だけは見ゆるが、向う岸は無論のこと、だう〳〵とひどい音をたてゝゐる溪の中流すらも見えぬ位ゐ深い霧であつた。

流石に溪間の風は冷たい。わたしはまた湯に入つて後頭部を湯槽の緣に載せ、いまあけたガラス戸の方に向つて、出て行く湯氣、入つて來る霧の惶しい姿を見るともなく仰いでゐた。

何しろ深い霧である。そして頻りとそれの動いてゐるのが見えて來た。くるり〳〵と大きな渦を卷きながら流れ走つてゐるらしい。

三分か五分かゞ過ぎた。わたしはまた立つて其處の低い窓に腰かけた。今度は溪の流が見えて來た。天城山の雪解のため常より水の增してゐる激流は大きな岩と岩との間をたゞ眞白になつて泡だち渦卷

きながら流れてゐる。その雪白な荒瀬のなかのところ〴〵にうすらかな青みの宿つてゐるのをすらわたしは認めた。夜はいよ〳〵明けて來たのである。

また湯槽に歸つた。溪に見入つてゐた間に霧はよほど薄らいでゐた。と共にしゆつ〳〵と流れ走る速度の速さはよく見えた。そして終にその流の斷間々々に向う岸の、切りそいだ樣に聳えてゐる崖山の杉の木の青いのが見えて來た。

宿醉はいよ〳〵出て來た。霧を見るのをやめ、眼を瞑ぢてをると、だう〳〵と流れ下つてゐる瀨の音が、何となく自身の身體の中にでも起つてゐる樣に思ひなされて來た。

三度び窓に腰かけた。其儘その窓を乘り越えて溪端の岩の上にでも立ちたいほどの身體のほてりである。然し、流石に雪解の風は冷たい。

『一體、今日の天氣はどうなのだらう』

わたしは杉の森の茂つて居る崖山の端に空を求めた。が、其處はまだ霧が深くつて何ものも見えなかつた。

もう一度湯の中に入つた。

のぼせたせゐか、暫しの間わたしは瀨の音も霧も忘れてゐた。

サテもう出ようと湯槽の緣に眼を開くと、丁度さうして仰ぐにいゝ具合になつてゐる向う岸の崖山

の端のところを相變らず霧は走つてゐた。が、もう其處の霧も薄らいでゐた。そして薄らいだ霧のなかゝら何とも言へぬ鮮かなみづみづしい空の色が見えて來た。それこそ滴るやうな水色の空であつた。わたしはふら〳〵と先刻眞白な荒瀨の渦の中に見た水の深みのうすみどりを思ひ浮べてしみ〴〵といかにも早春らしいその空の色に見入つた。

庭さきの森の春

濱へ出る漁師たちの徑に沿うたわたしの庭の垣根は、もと此處が桃畑であつた當時に用ゐられてゐた儘のを使つてゐる。杭も朽ち横に渡した竹も大方は朽ちはてゝゐるのであるが、其處に生えた篠竹やその間に匐うてゐる蔓草のために辛うじて倒壞を免れてゐる。蔓草も幾種類か匐うてゐる樣であるが、通蔓草（あけび）が最も多い。そしていまその若葉と、若葉の間に垂れて咲いてゐる花とが、まことに美しい。花は初め袋なりにつぼんでゐるが、やがて小さく開く。色は淡い紫である。

門を出てこの垣根に沿ひ十間も行くと、徑は森の間に入る。森の木深いところにもこの通蔓草は茂つてゐる。此處は樹木の背が高いだけ、あけびも高く伸び上つて、とりどりの木の梢からその蔓の先を垂らしてゐる。

森の木はおほかた常盤木である。中でも犬ゆづり葉の木とたぶの木とが多い。たぶの木は玉樟とも犬樟ともいふので樟科の、その葉の匂なども樟に似た木である。犬ゆづり葉は同じくゆづり葉の木そつくりの木で、葉柄の紅いところまで同じである。たゞ葉が本當のゆづり葉より小さい。そのほかに

は椿、鼠冬青木（ねずみもち）、とべらなどの常盤木が混り、落葉樹には櫨、楢、楝、其他名を知らぬ幾多の雜木がある。

元來此處は潮風を防ぐために昔から設けられた大きな松原で、年を經た黑松が亭々として茂つて居り、その松の下草に右云うた樣ないろ〳〵の木が森を成してゐるのであるが、ともするとわたしは此處の松原である事を忘れ、此等雜木の密生してゐる森林とのみ思ふ事が多いのである。松も多いが、雜木は更に茂つて居る。

此等の雜木を松の下草とするならば、雜木のための下草がまたあるのである。森の深い所ならば虎杖齒朶、少し木の薄い所には茅や芒である。それからこれはわたしは名を知らぬが面白い木がある。幹は眞書（しんがき）の筆の軸ほどで、せい〳〵伸びて二尺か二尺五寸、繁々と幾本となく枝を張り、枝には細い刺（とげ）を持つて居る。小さいなりにみな相當の樹齡を持つて居るらしく、枝ぶりがいかにも寂びてゐる。花は春の末に開き、こまかく白い。實は秋の頃より眞赤く熟れ、次の年の花が咲いてもなほ半は枝に殘つてゐる。南天の實の粒よりも更に小さくまんまるで、こまかい枝のあちこちにいつぱいに熟れてゐるところは誠に綺麗である。今、隨所の木の根がたに見られる。

齒朶はたいへん森を深く見せる。まつたくこの海ばたの森にこれを見出した時はわたしは驚いた。これの茂みに入つて行つて立つてゐるとツィ其處に自分の住居があらうなどとは一寸考へにくい。

今は虎杖の芽の萠ゆるさかりである。無論山の溪間などにあるやうな大きなのは見られないが、それでも親指位ゐのはある。これはこのまゝ、喰べるもうまく、一二時間うすい鹽で漬けておくと珍重すべき漬物となる。たべものゝ話のついでゝあるが、わたしは昨日の夕方、一寸森に入つてたらの芽を摘んで來た。味噌あへにして、獨りの晩酌のさかなには恰好であつた。

虎杖を取らうとして森の木蔭に這ひ込んで驚くのは落椿である。椿は花期が永く、いつもなら十二月の末からぽつ〳〵咲き出して三月末まで續くのだが、今年は寒さのため咲くのが遲れ、今がまだ盛りといつてよい。この森の或る一部などはいまこの木の落花がそれからそれへと殆んどいちめんに散り敷いてゐる。元來椿の木はその木だけあらはに立つてゐるか、若しくは木立をなしてゐるものである。それが此處の森では他の常盤木に混つて數限りなく立ち續いてゐるのである。他の木を拔いて伸び出でて日向に咲いてゐるもあり、しつとりと木蔭に濕つて咲いてゐるのもある。

椿のほかにいまこの森で目につく花は木苺である。漸う萠え出た柔かな葉のかげに純白色に咲いてゐる。幹がほそくしなやかで、風にゆれながら咲いて居る。

楢の花、これは葉の芽生えより先に咲かうとするので、時には間違ひ易い。氣をつけて見れば野趣のある花である。

が、何と云つてもこの森には常盤木が多く目につく花をつける木は少い。もう少したてば楝の花の

むらさきが見られるが、まだ早い。そして、今は雜木の芽の美しい盛りである。

殘念にもわたしはそれら雜木の名を知らない。知らないなりに三種五種とそれ〴〵に美しいのを數へることは出來る。野葡萄の蔓の節々についた珠のやうな芽の美しさなどはまつたく言葉には現はせない。

これらの芽は二日三日のうちに忽ち伸び開いて、謂はゞ若葉となる。いやもう既にさうなつてゐる。春、春と思うたのもほんの數日間のことで、昨日今日ではもうそゞろに初夏の感じである。木々の深みに啼いてゐる鶯の聲も漸くこのごろ調つて來たばかりであるに早やもう珍しくなくなつた。（四月六日）

野蒜の花

その四

庭の隅、藪の蔭にむらさき深い野蒜の花を見るころとなつた。二年あまりも捨てゝおいた『野蒜の花』をまた書きつぐことにする。

雨降れば上枝しだれて濡縁にその葉とどかす
布袋竹の竹

その書齋の前の布袋竹の竹叢に來てみそさゞいの鳥が二三日前から啼き始めた。今年はいつもより少し早い樣に思ふ。

障子を細目にあけて見てゐると、根がたから一尺ほどの低い所にとまつて、ちよつ〳〵、ちよつ〳〵と啼きながら、こまかい枝から枝に頻りに何かをあさつてゐる。

この鳥の啼くころにはよく茶の花をおもひ出すが、その茶の花も書齋の廊下の前、柚子の木の根に大きな株が咲いてゐる。わたしはこの花が好きで、數へればまだ庭には五六本も植ゑてあるわけだ。

柚子にも實がなつた。この實のまだ青い頃から妻は頻りに取つて酢にしようと言つてゐたが、わたしは取らせず、今では黄いろく葉がくれに熟れて來た。移し植ゑて年がたゝないので實もまだ小さい。それでもよく、なつて呉れたものだ。

この柚子の根には植ゑ込む時からその根の土に附いてゐたものであらう、かなり蔓の大きい山芋がからみついてゐる。そして柚子の梢に零餘子が少し見えてゐる。

柚子の根の茶の木に隣つて、いま美しく山茶花が咲いてゐる。若木だが、蕾をたくさんつけてゐる。

山茶花と一緒におもひ出されるのは木犀だが、これもこの間まで咲いてゐた。矢張りまだ木が弱つてゐるせゐか、惶しく咲き、惶しく散つて行つた。でも、いつぱい始めようとしてゐる夕暮など、部屋の中まで匂つて來た。

柚子の根には山茶花と反對に寒竹も茂つてゐる。そして丁度いま可愛い、筍をぞく〳〵とその根に出してゐる。十月も末、筍が生えてゐるなどと言つても大抵の人はほんとにしまい。この竹は幹細く丈低く、廊下とすれ〳〵の高さで、こんもりと茂つてゐる。

わたしは竹が好きで、このほかにまだ孟宗、眞竹、縞竹、角竹など云ふのがあちこちと植ゑてある。角竹は珍しい竹で幹が四角になつてゐるのだ。つきにくい竹と見え、五六本植ゑたのが一度はみなその幹を枯らしてしまひ、いま根の方から小さい幼いのが生えて來てゐる。その葉が極めて長い。

幹を枯らした憾みはまだ他にもある。ビランジュと云ふ木ださうだが珍しい木で、長倉汀峰君の宅に唯だ二本あつた中の一本を強ひてねだり落して持つて來たのだが幹をもう少し短く伐つて持つて來なかつたせゐか、枯らしてしまつた。悉く落膽してゐると難有くもその根から新しく芽を吹いて來たが、この芽が母木の樣になるには何十年の後であらう。母木は大きさ一抱へ、高さ五六間はあつたであらう。大きな葉を瑞々しく茂らした常綠樹で、もとは南洋あたりのものであらうとおもふ。沼津でも他處では見ない木である。

椎の木をも枯らした。これは七八本も山から引いて來たがいまは僅かに極くの稚木ばかりを二三本殘してゐる。今のまゝではこの木の梢から實の落つる靜けさを味はうことをば諦めねばならぬ。

實と云へば柿をも相當集めたのだが、今年梢にその赤いのを見せてゐるのはたゞ一本である。それも山柿の至極小さい實である。が、いゝものだ。

柘榴には四つか五つ、なつた。見ごとなものであつた。一つ落ち、二つ落ちして、いままだ一つだけ口を開いて枝に殘つてゐる。

この柘榴の實では子供たちと大分爭はねばならなかつた。そして結局わたしは町の果物屋から凡そ三十の柘榴を買はせられたであらう。

蜜柑をも枯らし、無花果をも枯らした。元來、土地が砂地のことで餘程氣をつけないと危いのである。

枯らした愚痴はまだある。信州の大澤茂樹君にねだつて落葉松の苗を取り寄せた。この木が元來寒

國の木であることをば知つてゐたが、それでも沼津公園に何本かのこれのあるのを見て、これを企てたのであつた。先づ二年ほど假植ゑにしておき、大丈夫と見て庭に移した。最初はつくと見えてゐた。が、この夏朝鮮から歸つてみれば大半以上枯れてゐた。自分が側に見てゐれば斯うもしなかつたらうにと、木に詫びた。

この落葉松と一緒には楢の苗をも澤山送つて貰つた。これは無事に育つて、いま庭の一部に可愛い楢林を作つてゐる。これが大きくなつた頃の冬がおもはれてならぬ。

千本松原の春

その松原の蔭にわたしはいま住んでゐるのだが、この沼津の千本松原の老松の下草には實に種々雜多な樹木が茂つてをる。或る植物學者の調べたところによると二百種類からに上るさうだ。最も多く眼につくのが、犬ゆづり葉、たぶの木、鼠冬青木、とべらの木その他で、椿も亦た少くない。これらはすべて暖國性の常磐樹であるが、なかに僅かに楢、たらの木等の落葉樹も混つて居る。その常磐樹の下にはまた羊齒の類が茂つてゐるので、林の中に入つて行くと、とても普通の海岸の松林などには見られない奥深さが感ぜらるゝ。

第一、松が他所のと違ふ。所謂磯馴松の曲りくねつた枝ぶりでなく、すべてが杉の木に見る樣な眞直ぐな幹をゆつたりと中空に聳やかしてゐるのである。百年以上の老樹が多い。松原の幅二三町、長さ三四里にも及ぶであらう。中でも沼津寄りのところが最も松が揃つて居り、森も深い。恐らく松原として日本一の見ごとなものであらうと思ふ。

その松原のなかの椿がいま花ざかりだ。一抱へほどの大きな木もないではないが、葉のみづ〳〵し

い若木が多い。他の常磐樹と押し合つて茂つてゐるので、氣をつけないと見落す事がないと限らぬ。たゞ、昨今はその紅ゐの花をつけてゐるので、ひと目見て椿とわかる。一本を見出して立ちどまつて見てゐると、次ぎから次ぎ、五本十本のこの木が、いづれも葉がくれに鮮かな花を見せて立ち並んでゐる。

もう少したつとこの木が花を落す。いはゆる落椿が、荒い小石原の上に一團々々と到る所に散り溜つてゐるのを見る。

薄みどりの羽根の小さな繡眼兒（めじろ）の鳥が群をなして花から花へ遊んでゐるのもこの木には付きものである。

いまこの松原のなかで紅いものといふと椿の花のほかにあを木の實がある。これは眞みどりな廣やかな葉の蔭に——この木は枝も幹も眞みどりであるが——同じくみづ〳〵しい紅ゐを見せてゐる。日もあまりあたらないやうな木深いところにこの美しい木の實を見出してはいつも輕い驚きと微笑とを覺える。

もう一つ、これは名を知らないが、極めて小さい灌木で、高さ一尺からせい〴〵二尺四五寸どまりの、幹も枝も細くて枝垂れてゐる木がある。この枝垂れた枝の葉のかげに大きさ大豆粒ほどの眞紅の實が幾つとなく輝いてゐる。細みのやゝたけ高い鉢にでも移して見たら嘸似合ふだらうと思ふ。ところによると足の入れ場のないまでにこの小さな木が簇生してゐる。葉にも枝にも細かなとげがある。

ねずみざしといふのではないかと言つた人があつたが、本當のことは知らない。同じく小さく立ち並んでゐる藪柑子の實もいま美しい。たま〳〵萬兩をも見る。

落葉し果てたさるとりいばらの蔓の樣な枝のさきにも眞赤な實が枯れ乾いて付いてゐる。この實をばちひさい時にはよくとつて喰べたものである。今でも赤く乾いた皮を剝いで口に入れてみると、うすあまい味がする。その肉もうすい赤みを含んでゐて美しい。

野無花果の實もまだ枝さきに殘つてゐる。これはいま黑いといひたい紫である。喰べてたべられぬことはないが、要するにそれも子供の頃の思ひ出の一つに留まるものであらう。

胡頽子の實が既に實の形をして枝のさきにくつ付いてゐる。所謂なはしろぐみといふので、苗代の頃になつて初めて赤くうれるのである。これにもたゞの苗代胡頽子と、蔓胡頽子との別があり、後者の方がずつと粒が大きい。枝が蔓のやうに細く撓えて伸びてゐるのでこの名があるのであらう。あらはな小枝に椋もちひさな實をつけてゐる。

斯うした小さい木の實の話をすれば、木苺のことも添へておきたい。これは今は僅に葉の芽が出やうとしてゐる位ゐのところだが、ほどなく眞白な、實に淸らかな花をつける。實は黃いろで、うまい。たべられる實ではないが、いま眼につくものに先づ櫨がある。不思議とこの木がこの松原に多く、

秋のころは紅葉が綺麗であつた。今は枝から枝にいつぱいに房なりになりさがつた實をつけてゐる。寂しいとも明るいとも云へる感じである。

次に多いのが普通せんだんと呼んでをる棟の木の實である。櫨の實よりやゝ大きく、色は黄いろで、明るい。これをば小鳥が啄むらしい。

小鳥の好んで集まつてゐるのにたぶの木の實があり、犬ゆづり葉の木の實がある。ともにありとも見えず葉の蔭に密着してゐる。

これらの木の實があるせゐであらう、この千本松原には小鳥が非常に多い。鵯、椋鳥を初め、あかじ、あをじ、めじろ、四十雀、まつめ、鶸、その他まだわたしたちの氣のつかぬ鳥がたくさんゐるであらう。このごろ、雨のあがつたあとなど、ことに早朝、森のなかの小みちを歩いてゐると、これらの小鳥がいつせいに啼きたてゝゐるのを聞く。

悲しいことに、この靜かな森によく鐵砲うちが入り込み始めた。とつたところでろくに喰べられさうもない鳥ばかりなのだが、唯だ面白半分のなぐさみに射ち殺すものであらう。そのそれ彈丸がをりをりわたしの家の屋根へ落ちて來る。警察にも幾度も注意してあるのだが、いまだに毎日打ち歩いてゐるのを見る。なさけないことに思ふ。

いま一つ、それよりも更に悲しい事は、この千本松原の統治者である靜岡縣の縣廳側が、この唯一

無二ともいふべき松原を伐り拂はう〳〵としてゐるといふ噂を聞く事である。萬が一この噂が實現されたならば、斯うした松原はもう永劫に見ることは出來なくなるものと見ねばならぬ。日本の名所が一つなくなるものとしてわたしはそれを悲しみ嘆くのである。（三月二日沼津市千本松原の蔭の家にて）

河口

山の間や平野のなかを流れて來た河が海に注ぐ、その河口には一種の面白味のあるものである。わたしの宅から十町ほど離れたところに狩野川の河口がある。をりをりわたしの出かけてゆく所であるが、ツィ二三日前も其處に行つて一時間近く坐つて來た。その前夜北海道から訪ねて來てわたしの宅に一泊した進藤君と一緒であつた。

狩野川は天城山から出て伊豆の田方平野を流れ、この沼津で海に注ぐ。短い河であるが、割に水量の豐な、また、度々氾濫するので知られて居る河である。河口は東側は砂濱のまゝであり、西側に極めて簡單な防波堤が設けてある。來年あたり、大改修工事を施すといふので、現在のまゝの河口を見るのはこゝ僅かの間であらう。

無雜作に石を積み重ね、その間を僅かにセメントで塗りつぶしたといふ風の防波堤が、五六十間、海のなかに突き出てゐる。その根つこの岩の上に我等は下駄を敷いて坐つてゐた。丁度潮の引くところであつたが、暫く見てゐるうちに、すつかり引き切つてしまつた。附近には上から流れて來た木や

竹のきれ、古下駄、ぼろぎれ、猫の屍などが、半ば壞れかけた岩の間に引つかゝつてゐるのが見えた。そしてそれらの間に、岩から岩の間をうねり廻つてゐる小さな波がぱしやん〳〵とうねりめぐつてゐた。

江の浦靜浦の入江を圍む低い山脈、伊豆地の達磨山から眞城山または遠くの天城山まで、淡く霞んだまゝで見えてゐたが、肝心の富士山は雲にかくれて見えなかつた。實は河口から見る富士はいゝから見に行かうとて此處まで出て來たのであつた。然し、深い雲ではない。今にも晴れさうな空なので暫く待ちませうと其處に腰をおろしたのであつた。

土堤の上には我等のほかに黑鯛釣らしい大人が三四人、流木を拾ふか、蟹を捕へるらしい子供が二三人、遊んでゐた。黑鯛は一向に釣れず、蟹をもなか〳〵よう捕へなかつた。而して富士も容易に晴れやうとしなかつた。

『惜しいことをした、一本提げて來るのでしたネ』

わたしは進藤君を顧みて苦笑しながら、不圖思ひついたことがあつて、立ち上つてうしろの松原の蔭を見廻した。其處には一軒の小さな小屋があり、『釣り餌あり』の看板が出てゐた。

『なァ、ヤ、彼處の店では酒は賣つてなかつたかナ、ヤ、』

わたしは一人の子供に訊いてみた。

『賣つてるヅラ』

『さうか、ぢやァお前走つて行つて四合壜を一本買つて來てくんないか、ナ、ヤ、お前に五錢やるぞ』

子供は大急ぎで走つて行つて來た。壜にはちやんとコップが附いてゐた。

北海道の話が、それからそれと我等の間にとりかはされてゐた。進藤君は十勝の國帶廣町の人で、三年前の秋、わたしが夫婦づれで其處へ行つた時、初めて逢つたのであつた。同君自身はやらないがその細君が歌をやつて我等の社中の同志の一人となつてゐた。もう五人の子供の阿母さんであるには驚いたが、その歌はいかにも若々しい明るいものであつた。帶廣に着いた時、運わるくわたしは病氣になつた。神經衰弱の急性な樣なものであつた。更に運わるく、その時帶廣町を中心に旭川師團の演習が行はれ、わたしの泊つてゐた宿屋が師團司令部となつた。もう四五日も靜かに寢てゐると直るのに困つたものだ、何處ぞ近くに溫泉でもあるまいかと訊いて、進藤君に連れて行つて貰つたのが其處から四五里離れた途別溫泉といふのであつた。

實は同君もどんなところだか知らずに案内してくれたのであつたが、行つてみて驚いた。我等の通された離室は八疊づつ四室三十二疊敷の眞四角な一軒立てゞあつたが、家全體が歪み傾いてゐるので

間の襖が役に立たず、謂はゞ三十二疊敷の部屋の一隅に連れ込まれた樣な形であつた。これは土地が一二尺も凍み氷るために普通の建方ではみな斯うなるのださうである。その上、溫泉とは云つても沸し湯で、その湯を數日間は換へないらしいので、とても不潔で、臭くて、入るに耐へなかつた。ただ其處の内儀――四國の生れで帶廣町の商人の妾となつてその溫泉をやつてゐるといふ風の人らしかつた――が一生懸命になつて大事にして呉れるので不平も言へず、夫婦ともその三十二疊の一角に床を敷きつぱなしで、唯もう眠ること專念に努めてゐた。その寂しい數日間を、進藤君は自分の町が演習その他で忙しい盛りにも係はらず、毎日汽車か自轉車かで訪ねて來て呉れた。同君の聲を聞くとわたしは急に元氣が出て、床から這ひ出すのであつた。

實に寂しい宿であつたが、その湯と部屋を除いたほかのことはみな難有かつた。宿の裏庭の庭さきから急に嶮しい傾斜の岡となつてゐたが、その岡のその邊だけ、原始林そのまゝに殘つてゐた。いづれも一抱へ二抱への楢の木、せんの木、やち榛の木、桂の木、いたや楓、朴の木、あかだもの木、落葉松その他名も知らぬめづらしい老木が、折も折とて今を盛りと紅葉してゐた。その森のなかをまた樫鳥、啄木鳥の群があちこちと啼きめぐつてゐるのであつた。仕合せと、日もよく晴れて呉れた。食後など、宿の門前に出てみると、十勝平野を距て、石狩國境の十勝岳、石狩岳、三國山等の連山が見渡された。その山々の峰には鮮かな秋の雪が輝いてゐた。

さうした話をしてゐると、わたしの心は一種の醉を覺えた。そして進藤君に言つた。

『もう一度、北海道へ行きますよ。今度は眞冬がいゝなァ、流氷が盛んに其處等の海岸に流れて來る頃行きますよ。』

いつか、潮がさしそめてゐた。防波堤の石の間にぴちや〳〵と音してゐたのがいつかぽた〳〵と聞える樣になつてゐた。その時を待つてゐたのか、俄にその河口を出てゆく船の數が多くなつた。すべて發動機船で、遠く新嶋利嶋あたりまでも行くであらう輕船も二三艘あつたし、この入江の浦々を廻つてゆく乘客用の小形なのもあつた。それには着飾つた女學生の一團など乘つてゐた。

『ァ、今日は天長節でしたネ、偶然此處で天長節を祝つたわけだ』

冷酒に醉つた進藤君はふら〳〵として立ち上つた。そして、

『アッ！』

と叫んだ。

なるほど、難有いことに富士が晴れて呉れた。水分豐な雲のうへに、やゝ蒼白く見ゆる雪を輝かせながら、常よりも高く見ゆる氣持にそのいたゞきを見せてくれた。

鮎釣に過した夏休み

わたしは、日向うまれである。むづかしくいふと宮崎縣東臼杵郡東郷村大字坪谷村小字石原一番戸に生れた。明治十八年八月廿四日のことであつたさうだ。村は尾鈴山の北麓に當る。そこの溪間だ。この溪は山陰（やまけ）村にて耳川に注ぎ、やがて美々津にて海に入る。山陰村より美々津港までの溪谷美（といつても立派な河であるが）は素晴らしいものであるが、邊鄙のことゝて誰も知るまい。同地方特産の木炭の俵の上に乘せられてこの急瀨相次ぐ耳川を下ることは非常に愉快である。下り終ると美々津の港の河口に日向洋の白浪の立つてゐるのがそこの砂濱の上に見える。小さい時山奥から出て來てこの浪といふものを見た時はほんとに驚喜したものであつた。

さうした、山あひの村のことゝて、わたしの七歳八歳のころには普通の小學校はまだできてゐなかつた。在るにはあつたがいはば昔の寺小屋の少し變つたやうなものであつた。うやむやのうちに尋常小學を過し、十歳のとき、村から十里あまり離れた城下町である延岡に出て高等小學校に入つた。そして、やがてその土地に創立された延岡中學校の第一回入學生として入學した。

だから、わたしは小學生の時から(大抵は中學か專門學校になつてゞあるが)『歸省』の味を味はつた。冬と夏との休暇、それを待ち受けて行く喜び樂しみの、なんと深いものであつたか。十歳や十一二の身でわたしはその十里の道を終始殆んど小走りに走つて家に歸つた。延岡から富高まではそのころでも馬車があつたが、日に幾度だか、或はまた出るか出ないか解らない狀態であつたので、少年の氣短にはそんなものに賴つてゐる餘裕がなかつた。ひとりで走つた方が氣持がよかつた。

冬の休みは短かつた。一週間か十日ぐらゐのものであつたらう。その間にお正月があつたりして、何か知らわけもわからずに過ごしてしまふのが常であつた。だが、夏休みは永かつた、ひと月であつた。このひと月の間をば殆んど毎日釣をして過ごした。

父も釣が好きで、よく一緒に出かけて行つた。たゞ、父の釣はあゆつり(鄕里ではあゆかけといつてゐた)だけであつたが好きな割には下手で、却つて子供のわたしの方がいつも多く釣つてゐた。この父は愉快なる人で、性質は善良無比、そして酒ばかりを嗜んだ。

また夏休みの話だが、夏休みに歸つてわたしはいつも二階に寢てゐた。そして朝寢をしてゐると、父はそうつと幾度も階下から覗きに來た。そしていよ〳〵となると

『繁、起けんか。今朝、いゝぶえんが來たど』

といつた。ぶえんとは多分無鹽とでも書くのであらう、氷も自動車もなかつた當時にあつては、普

通の肴屋の持つて來る魚といへば鹽物か干物に限られてゐた。中に一人か二人の勇ましいのがあつて涼しい夜間を選んで細島あたりからほんとうの生魚を擔いで走つて來る。彼らはもう仕入れをする時からどこには何をどれだけ置いとくときめてやつて來るのだ。だから走りつく早々臺所口にかねてきめておいた分を投げ込んで置いてまた次へ走る。亂暴な話で、こちらではもう買ふも買はないもないのである。

父は飲酒家の癖で、朝が早かつた。誰よりも先に起きて園爐裡に火など焚きつけてゐた。そこへその無鹽賣りが來る。彼はそれを待ち受けてゐて、やがて自身で料理にかゝる。刺身庖丁の使ひぶりは彼の自慢の一つであつた。そして綺麗に料理しあげて、膳をこしらへて、臺所の山に面した緣端へそれを持ち出し、サテ、わたしの起きて來るのを待つのである。澁々私が起きてゆく、父はちやんと用意してあつた膳の上から一つの盃をとつて

『マ、一ぱいどま、よかろ』

といつてさす。年齒僅に十幾歳の悴を相手に彼はいかにも滿足げに朝の一時間だか二時間だかを過したのである。

その父逝いて十五年、悴もいつか父にならぬノミスケとなり、朝晩、ふら〳〵しながらかうしてたま〳〵遙に故鄕のことなど思ひだすとおのづから眼瞼の熱くなるのを覺ゆるのである。

流るる水

その一

此處の松原の好き季節となつた。櫨がいま紅葉して美しい。不思議とこの木が松の、而かも老松の、たちこんでゐる木立のなかに多く、それら老松の幹、枝、黑い樣な葉の茂みの間にあつて、ほんとに眼ざむるばかりに美しい。この地方には楓を初め、紅葉らしい紅葉が見られないのに、櫨ばかりはみづ〳〵しい色に染つてをるのである。

松のまばらになつた所の下草に茅だの芒だの茂つてをる。芒の若かつたころはわたしの部屋から廊下から一面に見渡せて、照つてよく降つてよかつたが、今は早やすがれてしまつた。茅その他、斯うした細長い草の茂みも、いまうす紅く染つてゐて美しい。その上に坐つて、煙草を吸へば、ほんとに靜かだ。

◇

松のいゝことがだん〳〵解つて來る。

初めわたしは此所等一帶の松の黑松であることがさびしかつたが、今では寧ろ赤松の美しくしなやかなのより好きになつた。見るからに强く固く、且つやはらかく、その間に言ひがたい寂びを含んでゐる。烈風、和風、それらを宿して亭々と聳えてゐる時も、雨に煙る時、ほのかな靄を宿す時、月の光に濡るゝ時、とりわけ麗かな日光に照らされて枝さきひとつ動かさずにゐる姿は、實に靜かである。

一本々々と見上ぐるもよく、連り立つて居る大きな木立を眺むるもよい。而かもこの木立として森としての此處の松原を見るのはわたしの二階からが蓋し一等いゝであらう。

◇

掘抜井戸を掘つた。これは家の出來た時早速掘りたかつたのだが、果して水が出るかどうか受合へないといふので、見合せたのであつた。ところが、近頃近所に一二軒家が出來、それらの掘つたのがみな勢ひよく出るのを見た。我慢しきれずに掘らしてみた。五十二間の深さに掘つて、實にいゝ清水がたう〳〵として溢れ出て來た。一間二三尺の高さにまで噴き上げ得る勢ひである。

水好きのわたしは大滿悅である。いま、せつせとこれを飲み、家族たちにも强ひてゐる。

◇

そのたう〳〵たる水を見す〳〵捨つるのが勿體なく、庭に池を掘つてこれに湛ふることにした。こ

の砂地ではセメントを用ゐなくてはならなかつた。それがいやであつたが、ひと月もたゝないうちに水垢でセメントの地は見えなくなるであらうとのことである。いま、せつせと工事中だ。

これに水の落つる音を聽くのがたのしみでならない。

また、池のへりには何を植ゑたものか。これもいま考へ中だ。龍のひげ、藪柑子、芭蕉、など。

池の捨水をばわたしの部屋の濡縁のさきに引いて來ようとおもふ。ちよろ〳〵、ちよろ〳〵と小石を走る水の音がまた其處にも出て來るわけだ。

水底に動くもの、鮠が一番望ましいが急にはどうにもなりさうにない。幸ひ鮒のかなり揃つた數が買へさうなのでいま話をつけてゐる。鯉ならば直ぐ手に入るのだが、どうもあまり好きでない。但し、寒いみぞれの夕方など、釣りあげて味噌汁にする位ゐは泳いでゐてもいゝ。

◇

三苫守西君の歌がどうも評判がよくないといふ。わたしには不思議である。

もつとも、まだ手でばかり泳いで、兩脚、五體で泳ぐことを知らないと謂つたところが無いではない。

然し、それにしてもそれは自づと時の問題で、この人にはこの人の特色が立派に備つてゐるとおもふ。我等は其處を尊重したい。

◇

さうなれば自然三橋隆臣君などの歌もまだ認められてゐまいとおもふ。間違つたらば赦して下さいであるが、この人は恐らく小學校を出たか出ぬかの教育しか受けぬ人であらうとおもふ。そしてそのまゝ、土に親しむ農夫となつてゐる人であるらしく想像せらるゝ。

その人の歌にあの自由と、あの清新とのあるのは道理の樣で、實は稀有なことゝわたしは思うてゐる。ひねくりこねくりしてでつちあげられた概念歌が幅を利かしてゐる世の中に斯うした作はまつたく貴重なものと謂はねばならぬ。

大根を間引く女の唄さへも身にしみ秋は深みけるかな

いつしかも柑子の黄ばむ日となりぬ男の心抑へかねつも

梅雨めきし秋の長雨晴れ渡り柑子色づく日となりにけり

いつしかに尾花も艶を失ひていよいよ秋は老けにけるかな

萩の枝たわまずなりていつしかも秋は乏しくなりにけるかな

麥まくと耕す畑に鵠鴿の人を怖れず遊ぶ十月

今しわが鋤きし畑の黑土に陽炎のごとく光るくもの巣

冑々と茂る大根の畑に降る雨かぐはしく匂ふ十月

ま裸となりて畑うつ男あり蜘蛛の巣光る小春日和を（以上本誌前號より）

どうだ、新感覺派も何もあつたものではないではないか。ことに終りからの三四首がいゝ。

だが、三橋君個人としては、いつまでも此處に停住すべきでない。君は君で、ひと一倍、不斷の努力がいるわけだ。

その二

池が出來あがつた。出來て見ればセメントもさう目立たない。早いものでもう水あかも着きかけた。べらぼうに大きいものを掘りますネと言はれたものであつたが、水が滿ちてみれば矢張りこの位るはあつてよかつた。

鮒が百疋か二百疋、泳いでゐる。或る古びた溝を乾して取つて來たので、來た時は色が黑かつたが、此處の水の澄んでゐるせゐか少しうす靑く見える樣になつたやうであはれである。餌のやり手は次男坊の富士人君であるが、この子供にもまだ馴染まない。鯉が一疋、これは狩野川で釣つたものだと云つて耕文社の番頭さんが持つて來て放して呉れた。緋鯉のちひさいのも二疋混つてゐる。こまかな雨の降る夕方など、かすかに跳ねてとぶ音が聞える。

◇

池の尻には豫定の如く小さなみぞを掘つた。幅二尺ほど、底が砂であるため、ちよろ〳〵と流るゝ、

姿がきれいである。これには早速蜆を放つた。いつになつたら殖えるものかと早やそんなことの待たるゝ氣持である。

此處には芹を植ゑたい。水が淸いのだからともすると山葵なども育ちはしまいかと考へらるゝ。

今は落葉が直ぐ溜つて流れを堰く。そのちひさな姿なども斯うした所に住んでゐるのではなつかしい。

◇

ろくにまだ足もきかない癖に、いや却つてそのためか、其處か此處か草鞋を履いて出歩きたい所が空想せられていけない。ぽかんとした頭のなかには幾枚かの地圖がひろげられてあるのだ。

先づ手近では足柄山の道了さまに詣つた足で明神嶽を越え箱根の芦の湖に出る。其處より十國峠を越えて湯ヶ原溫泉に出る。それからは右折して伊豆の下田の方へ出、更に西海岸に沿うて沼津まで歩くか(これはや、事が大きくなる)、湯ヶ原からおとなしく小田原を經て沼津に歸るかだ。伊豆の山地の昨今はまことに靜かで、そして氣持のいゝ、明るさを持つてをる。海岸には所によつてもうぼつ〳〵梅が咲いてゐるであらう。

もう一つ、相模の大山さまに詣り、其處から路を拾つて所謂相模野のうちの多摩川べりに出て八王子に行くか、若し出られたら山越をして相模川の上流に出、甲州街道を引返して八王子に出る、そし

て多摩御陵に參拜する。この後者が出來ると相當面白い路になるとおもふが、よし行けるにしてもかなりの難所であらう。淺川から石和あたりまで、甲州街道を歩いてみたいとは曾て東京にゐた頃からもくろんでゐたのであつたが、山間だけにまだ多少昔風の所が殘つてゐるかも知れない。

八王子からは武藏野だ。五日市（と云つたとおもふ）といふ風な野の中の宿場にも面白い所がある ものだ。其處等を經て川越に出る。川越の在の或る村にはわが若山家の祖先の出た所がある。若山姓もまだ殘つてゐる。其處を訪ねたり、所澤の飛行場を見たり、東村山の貯水池を見物したり、またはもう一足延して野火止の方へ出て荒川の岸まで行くか。すべて其處等は武藏野だ。今は悉く黑い畑と落葉林と木枯との世界だ。もう何年かわたしの行かずに居るなつかしい野原の國だ。

もう一つ、これはやゝ大きくなる。天龍川の岸に沿うててく〳〵と歩く。信州地伊那のたひらに入り、諏訪湖の岸に出、登れたら蓼科か八ヶ嶽かに登り、佐久のたひらに越えて森の中に在ると聞く稻子の湯にも入り松原湖に出る。其處からおとなしく碓氷を越えて東京の方に出るか、千曲川に沿うて長野の方へ下り、更に犀川に沿うて溯り、桔梗が原から木曾川について名古屋に出るか、道は多い。

もう一つ、一月か二月のころ越後に雪を見にゆくか。

もう一つ、關が原あたりをぼつ〳〵と東海道の舊宿を歩いて琵琶湖の岸に出る。更に延ばし得ればそのまゝ京都を經て遠く山陰道のはてまでゆく。

あれ、これ、考へてゐると身體がぞく〳〵して來る。どうかこのわが兩脚よ、せめてもう少しよくなつて呉れ。さうすれば乃公はもうこの編輯の終り次第、明日にも草鞋をはいて御殿場からゆつくりと長尾峠を登つて箱根一帶の冬草山の寂びと美しさを眺め、併せて富士の冬晴をその峠路から仰いで來るものを。

あしなえのゐろり火おこす上手なる

◇

然し、ぜいたくは申すまい。

わが庭さきの松原はいよ〳〵冬に入つた。

草はみな枯れ伏してそして犬ゆづり葉の密林のいよ〳〵美しい時となつた。

道ばたに遊んでゐるのは、めじろ、みそさゞい、あをじ、松の梢から梢に風に吹かれてゐるのは大きな鴉。

椋鳥の群も折々老松の梢の上に渦を卷く。

吹きとほす凄じい風を我慢してその松原を越えて見給へ。

駿河灣の浪は時こそとばかりに毎日灣いつぱいになつて荒れ狂うてゐる。眞白な浪、浪を包む眞青な陰影。冬の此處の西風は有名なものなのだ。

晴れた日には濱から遠く信州伊那の赤石山脈一帶の雪が望まるゝ。よし、よし、この夏あたり其處の山にも登つてゆき峰から峰の雪の上を這ひずり廻つて來ませうぞよ。

その三

福島縣三春町の天野多津雄君より手紙が來て、今年こそは瀧櫻を見にいらつしやい、蕾が綻びそめたら毎日電報を打ちますよと云つて來た。

瀧櫻は三春町から二里ほどの郊外に在る櫻である。植物學者三好博士の見らるゝところでは樹齡七百年を經てゐるであらうとのことである。

わたしの初めてこの木を見たのは一昨年十二月の一日か二日、丁度冬枯のころであつた。實に見ごとな老木で、而かも今なほその枝の先など極めてみづ〳〵しく、その寒空に——實に寒い日で雪もちらついてゐた——早や薄い茜色を宿しながら靜かに四方に垂れてゐた。

實は昨年の春行つて見るつもりであつたのだが、何かの都合で行けなかつた。今年こそ、ほんとに行つて見たい。この木などはまさしく國寶ものである。

◇

遠州御前崎のとつぱなに近い池新田村といふには梅が非常に多いさうである。おそらく岬の山の蔭

の白茶けた砂濱の村であらう其處に群り咲いてゐるこの花のことを想像すると一種の微笑が湧くが、とにかく此處にも行つて見度い。實は(また出たが)此處には昨年行きかけて途中で歸つて來たのであつた。考へるとその頃からわたしは身體を傷めてゐた。謂はゞその身體をためすために、靜岡まで汽車でゆき、それからわざと歩いて先づ鞠子の宿で名物の名殘をとゞめてゐるとろゝ汁をすゝり次いで東海道屈指の難所宇都の谷峠にかゝつた。いかにも國道とは思はれぬ嶮しい峠を越えてやがて岡部の宿に到り、身體の疲勞から早目に一泊した。聞けば近々この宇都の谷峠にも大改修が加へらるゝといふ。多分薩埵峠の樣に廢道となり終るのであらう。岡部の宿もすつかり置き忘れられた樣な古驛で、宿屋の宿料がたしかに一圓であつたとおもふ。

翌日、輕便鐵道でその池新田の方へ行かうとしたのであつたが昨日一日四里近い歩行にすつかり草臥れ、氣も重く、藤枝まで行くとその輕鐵を捨て、省線に乘換へて歸らうとした。すると藤枝の宿が大變な賑はひである。どうした事と訊くと其處から一里半ほどの在にある清水觀音の祭日だといふ。まつたく驛の前から眼の及ぶかぎり道いつぱいの人である。ツイ引かれてわたしもその行列の中に入つた。半道ほど田圃の中をゆくとやがて輕い登りになる。左右は多く茶畑であつた。登るにつれて眼界も開け、茶畑の中には俄か作りのおでん燗酒屋其他が軒を並べてゐた。參詣の人の七八分は女、而かもまだ娘ざかりの人が多い。嫁入前に一度參つておかねばならぬ樣な近鄕の習はしになつてゐるの

ださうだ。

觀音樣は山の中腹の、やゝ窪みになつた所にあつた。まつたく大變な人である。わたしも其處で猿芝居などを見て、やがてまた人に採まれて藤枝に引返し、汽車を待つて沼津に歸つたのであつた。梅をば見そこなつたが思ひもかけぬ珍しい所を知つて嬉しかつた。日記を見ると、二月十七日、八兩日の事である。

月ヶ瀨をもまだ知らない。此處も一度は見ておきたい。溪間だといふことがひどくわたしの心を惹く。

埼玉縣の山田子之吉、榎本螢水君等の近くに梅園村といふがあり、梅が多いさうだ。招かれてゐて、まだよう行かない。

梅は櫻と違つて元來が孤獨な花である。滿開よりも二三輪咲き始めた時がよく、林をなして咲くよりも一本ひよつこり咲いてる所がよい。が、所謂梅林といふ風のものにも一種の趣きがないではない。そのつもりで見れば、靜かで寂びたものである。

同じく花の話だが、近江國蒲生郡鎌掛山といふのが石楠花の名所ださうだ。毎年同國日野町の鑓星美君から呼ばれてゐるのだが、出來るならこれも今年あたり出掛けて見度い。

吉野の櫻もまだ知らぬ。

◇

いま、緣先の小流にせきれいが來て水を浴びてゐる。この鳥のは水音が烈しい。あをじも折々來て浴びる。

みそさざいもひたきもよく其處の布袋竹に來てあそぶ。

障子ごしに彼等と遊んでゐることはわたしの今の一番のたのしみかも知れない。身體のせゐか、此頃、無闇に淋しい。

その四

前號に相馬三春の瀧櫻のことを書いておいた所、一月卅一日の福岡日々新聞に村川正敏といふ人の執筆で次の樣な記事のあるのが目についた。

千八百年の神代櫻　長壽の點から云つたなら、生きとし生けるものゝうちで、樹木が第一でせう。或るものは千年、二千年、三千年、或るものはその上にもなつてゐます、

我國で、櫻の巨木について申しますと、第一が山梨縣北巨摩郡新富村の『神代櫻』で目通りの周圍が四丈五尺、樹の高さ十三間餘、凡そ千八百年の樹齡を重ねて、今でもなほ、來る春ごとに爛漫と淡紅色の花を咲かせて居ります。次ぎが岐阜縣本巢郡根尾村の『薄墨櫻』で、目通りの周圍三丈八尺、樹の高さ十二間、千二百年

の樹齢。次が山形縣東置賜郡伊佐澤村の久保の櫻で、目通りが三丈五尺、高さ八間で一千餘年、同じく一千餘年が長野縣上水内郡芋井村の『神代櫻』で目通りが三丈六尺、高さ十間ぐらゐ、同じく一千年が岩手縣膽澤町の『不動の大櫻』目通りが二丈五尺で高さ五間との事であります。その他九百年八百年といふのは、あちらこちらに澤山あります。

何となく脆げに見ゆる櫻に斯うした老木の多いといふことは意外でもあり、櫻好きの身にとつて甚だ喜ばしいことでもある。(二月三日)

◇

長女みさき子、今春尋常科卒業、そのお別れの意味ででもあらう、近々江の島鎌倉へ學校から遠足があるといふ。お友達の誰々にはつきそひがつくといふので、では久しくあの邊を見ないしするからおとうさんがついて行つてあげようといへば、駄目だ、おとうさんはどうせみち〳〵おさけばかり飲んでるからお友達にはづかしい。(二月六日)

◇

選をしをへてその淸書を賴んだ『萬朝報』の歌を利雄さんが持つて來て、一等の歌はい、歌ですね、と言つた。いかにも佳い歌であつた。

風つよく雨をふくみて吹き居ればこの雜木山に啼く鳥もなし

といふのである。悠々と、しかもしつかりしてゐていゝ。「吹きをれば」などもなか〳〵言へない所だ。昨日選んだ『婦人世界』にも佳いのがあつた。

ふるさとの山の井に汲む若水を今年かぎりとおもひてぞ汲む

何處がいゝといひ難いよき所のある歌である。(二月十二日)

◇

前號大橋松平君の『夢に亡兒二人を見て悲しめる歌』は心惹かるゝ歌であつた。斯ういふ境地を歌ふにはありがちの取り亂した所がなく、さればとてこの作者の癖の妙に遊んだ詠みぶりもしてなかつた。中でも、

旅にあればたゞさへわれはさみしきに夢に亡き兒等が出でてもの言ふ

この兒等は世になし悲しとなげきつゝその兒等が手をとりて歩めり

死にうせし兒等と知りつゝ夢のなかにその兒等が手をとりて歩めり

などは目立つてゐた。

なほ、このほかにも佳いのがあつた。

わが越ゆる山坂ながく寂しければ啼きたつ鳥に驚きにけり

ほと〳〵に勞れてをれば峠路の向うより牛が下り來にけり

暮ちかく峠を下る牛はみな牝の牛にして仔牛つれたる

冬の日の暮れむとすれば丘のみちを歸るめうとの歩みいそげる

だゞ、

川口にもやひし舟のみち潮におされてゆるゝ初冬の朝

の初冬の朝は幼く、「或る時の心」一聯は松平臭のやゝ出過ぎたものであらうか。(二月十三日)

◇

昨日、日曜なのを思ひ出し、近くの社友田中要吉君かたへ遊びに行つた。生憎留守で、兄さんが獨り爲事をしてゐた。兄さんは洋服裁縫師である。内々その氣でもあつたので、これ幸ひとマントの註文をしてしまうた。草鞋ばきの、和服の身には普通の外套では具合がわるい。マントが欲しい〳〵と思ひながら、もう何年か我慢して來てゐたのであつた。

サテ、それが出來て來たらば先づ何處へ草鞋を穿くとするか。(二月十三日)

似た話を思ひ出した。

創作社の設計その他の世話をやいてくれた鄕里の友村井武君は淺草藏前の高等工業建築課の出身である。彼の卒業する年、わたしも早稻田を出たのであつた。卒業前にこの二人の貧乏學生が出遇うた

時の話、僕は錢をとるやうになつたら先づ電車の回數券を買ふね、と彼が樂しげに言つた。机に置く小さな鏡が欲しいよ、とわたしは言つた。

彼は果して回數券を買つて來てわたしにぴら〳〵させて見せた。わたしの鏡はその後二十年を經た今日まだ机の上に載つてゐない。(同日)

もう一つ似た話。

ねがはくはわが居る部屋に水引きて手のよごれなばつねに洗はむ

この歌はたしか『白梅集』あたりにあるとおもふので、これも十四五年前に於ける我がねがひ、といふうちにも先づ空想の一つであつた。

幸ひにこれは叶うた。室内ではないが盛んな噴井の水をツイ縁先に引いて出しつ放しにしてあるのでそれこそ日に五度も十度も洗つてゐるのである。

濤聲屋を撼す、といふ句を覺えてをる。千本濱の冬濤はまつたく屋をうごかす位ゐに荒るゝ事がある。それとは別の話だが、いまわたしの家の中には洗面所二ヶ所湯殿臺所等の水を悉く出しつぱなし

にしてある。夜、出口の金具の氷る事があるからである。夜なかに眼が覺めると此等の水の音がそれぞれに澄んで響いてゐるのを聽く。(同じ日)

◇

藤枝に人を訪ねた歸りに靜岡へ下車して潮みどりさんのお墓に參つて來ましたよと云つて昨日の夕方佐野の鈴木秋灯君が寄つて呉れた。寺に行つて寺男に『長谷川きり子さんのお墓は』と訊いたがなか〳〵解らない。其處に坊さんが出て來て、『あゝそれは潮みどりさんのことだ』と自ら案内して呉れたさうだ。

寺は靜岡市寺町、感應寺といふ。(二月十五日)

鈴木君と夕飯をたべてゐる所へ突然凄じい風雨が起つた。ごう〳〵どう〳〵といふ響をたてゝやつて來た。

土地には珍しい東南風(いなさ)であつた。天井には雨漏の音が起り電燈が消えたり點つたりした。

これで今年の寒もゆるみますね、とこの年若い農夫は酒も飲まない赫ら顔に聞き耳を立てた。(おなじ日)

◇

歌を選みつつその作者に逢つてゐる樣な氣のしてならぬ歌がある。聲も聞え顔も見ゆる。と、その反對に、唯だ原稿紙に書かれたものを採つたり捨てたりしてゐるのにすぎぬ樣な歌がある。(二月廿日)

◇

さかな屋が白魚の初物を持つて來た。

八百屋に田螺とあさつきを賴んであるが、まだ出ないやうだ。(おなじ日)

◇

『今朝きれいな翡翠がお池に來てゐましたよ、其處の柘榴の枝に。』

妻が言つた。

綺麗なのはいゝが、水に垂れた柘榴の枯枝もこの鳥にふさひさうだが、サテ、鮒の子が氣になつて來た。(廿二日)

◇

石川啄木の全傳を編むために、といふ用事で東京から吉田孤羊君といふ人が訪ねて見えた。いかにもこの事業に全身を打ち込んでゐるといふ風で、同じ用事のため先頃まで幾月とか北海道に滯在してゐたのださうだ。そして今日はこれから濱松にゆき、次いで神戸、長崎、高松と巡つて來るといふ事であつた。全て縷の樣な緣故を辿つて故人に關する一切の事を集むるためであるさうだ。盛岡澁民村

附近、北海道の釧路から函館附近、その他で集めたといふ材料が既に携帶の鞄の中には一杯であつた、土地、人、物、故人に多少とも緣故のあるものが實に驚くべく豐富に集めてあつた。單に寫眞だけでもその親近の人々はいふに及ばず、

しらしらと氷かゞやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

の氷にとざされた其處の海、

小奴といひし女の
やはらかき
耳朶なども忘れがたかり

の小奴の今と當時（この小奴といふのはいま釧路一の宿屋の女將となつてゐる相だ。獨歩の戀人も長崎か何處かで宿屋の女將となつてゐるといふのが思ひ合はされた）。小學校に同時に奉職してゐた（これも歌に出てゐる筈だ）といふ女教師の今昔の寫眞、驚いたのは

宗次郎に
おかねが泣きて口說きをり

大根の花白き夕暮

の、宗次郎おかねに二人の中の子供まで添へて撮られたもの、更に、

潮かをる北の濱邊の
砂山のかの濱薔薇（はまなす）よ
今年も咲けるや

のはまなすの花までが寫しとられてゐた。

その本は改造社から出る事になつてゐるさうだ。斯うまでして貰ふ傳記は歌人としては先づ稀有であらう。石川君が羨しかつた。（二十三日）

その五

この三月にお茶の水の女子高等師範を卒業する三人の社友たちが訪ねて見えた。昨日の事である。女ばかりのお客さまなのでわたしよりも妻や娘たちが喜んで、朝から皆しておはぎやおむすびなどを作つて大騒ぎをして待つてゐた。十一時ごろ、見えた。うちではざつと挨拶を交はしたゞけで、直ぐ濱へ出た。

引上げられてある舟の蔭に席を作り、あたりから流木などを拾ひ集めて來て火を焚いた。そしてそ

れを圍んで、食事をとつた。幸に富士もよく晴れ、遠く信州の赤石連山の白雪も眺められた。鰯の群が渚近くまで泳いで來て、ばちや〳〵と白い小波をたてゝ見せたりした。やがて今度は松原の林の奥を散歩して、うちに歸つた。夕方まで談笑、早い夕飯をたべて、五時だかの汽車で見送つた。まことに樂しい一日、半日であつた。

三人のうち、一人は奥州白河へ、一人は横濱へ、一人は九州佐賀へ、それ〴〵先生として赴任するのだといふ。さうすると斯うしてお逢ひするなどといふ事はなかなか出來ませんねと言ふと、それどころでない、われ〳〵三人が顔を合せるといふこともう困難でせうとの事であつた。卒業前の忙しい一日を割いて訪ねて見えたのも、一面お別れの樣なものでもあつた。

をんなの人たちとの會合は誠にむつかしい。その意味に於てわたしは例の揮毫會といふ樣なことをやりながらも、割に遠國の婦人社友たちと逢つて來たのは難有いことであつた。彼所此所と思ひ出して來ると、それ〴〵の人たちの面影がその土地を背景にしてはつきりと思ひ浮べらるゝ。(三月十九日)

◇

この月の四日から十一日まで、八日間、東伊豆の方を歩いて來た。脚だめしのつもりであつたが、意外にも達者で、平均四五里の道を歩いた。多少意地で歩いた傾向もあり、歸つて來てまた脚が痛み出してゐる。

一人で出かくる勇氣は流石になく、佐野の鈴木秋灯君を引つ張り出して一緒に行つて貰つた。萬一途中でつぶれてもこの人なら三里や四里は引つ擔いで行つて呉れるし、第一、この人は少しも飲まない。卽ち相手にならないといふ難有い所がある。

第一の難所と見ておいた初日の長尾峠をも見事に越えた。その夜木賀溫泉泊り。起きてみて驚いた、眼先も見えぬ大雪降りである。その吹雪の中を歩いて——木賀あたりは脛を沒する程に積つてゐた、あとで新聞を見ると箱根山中積雪三尺と出てゐた——湯本の福住で晝食、其處に泊り度かつたが今なほ降り頻つてゐる雪の中を歩いて見度い幼い興味があつて小田原まで歩いた。そして其處の竹添履信君を訪うて驚かした。夕方でもあつたし頻りに止めらるゝのを我が儘して早川驛に出、電車で湯河原まで行つた。國木田獨歩を通して永年なつかしい湯河原溫泉であつたが、やゝ幻滅であつた。翌日は熱海まで。其處でやゝ我が儘が出て來た。相手にならないのは難有いには難有いが、唯だぼそ〳〵として膳の物をつゝいてゐるのみなる鈴木君を眼の前に見てゐると、酒が淋しくてしやうがない。熟慮數遍の後、終に相手の出來る人といふ條件つきで二人の藝者を呼んだ。何の因果か、その二人が「若山牧水」を知つてゐた。そしてやれ三味線に書け扇子に書けとせがみ始めた。よし〳〵、君たちが明朝早く身上りをしてやつて來るなら書いてあげると辛くもその場はごまかした。翌曉、水を飲むとて眼を覺すと、何事ぞ、枕許の床の間にちやんと三味線が置いてある。やれ〳〵と鈴木君を搖り起し、

朝飯も喰ふや喰はずで、その宿を立ち出でた。

二里ほど歩いた所に多賀といふ漁村があり、中ほどに多賀神社といふ社があつた。大きいお宮ではなかつたが、實に見ごとな樹木が茂つてゐた。竹柏、楠、眞樫、白樫、山桃、等。竹柏ですら二抱へからあつた。其處で鈴木君と別れて、一人になつた。元氣よく歩いて、伊東泊り。次の日が、弱つた。數日前に受け渡しの濟んだばかりだといふ新道路で、ぞいぞいと尖つた割石が一面に敷きつらねてある。草鞋は忽ち破れ足裏の皮も危くなつた。僅かに三里ほどを歩いて、富戸(ふと)といふ漁村に小さな宿屋のあるのを見附け、泊つてしまうた。翌日、足、痛む。幸ひ、朝、其處に下田行の汽船が寄るといふので、それに乘る事にした。

船中に東京邊の安會社員らしい四人連で、この一二晩の間に經驗して來たらしい猥談をこれ聞けがしに喋舌つてゐる一行があつた。その態度の醜陋、何としても見てゐるに忍びず室を出て甲板に立つたが、其處はまた風が寒かつた。苦笑しながら下田行を諦めて稲取で下船した。浪高く、艀が危い樣であつた。

とある酒屋での立飲で身體を溫ため、びつこを引き〳〵歩き始めた。痛いが、い、氣持であつた。最初の豫定通り、全部を歩行によらずして、何故汽船などに乘つたのであらうと唾を吐き〳〵ゆつくりと歩む。

然し、要するに足は痛かつた。下河津溫泉泊り。翌日、湯ケ野まで歩いて、殘念ながら自動車に乘り天城を越え、湯ケ島溫泉を訪うた。二三日滯在したいと思うたが、心落ちつかず、翌日沼津に歸つた。

小さな旅ではあつたが、病み上りにしては面白い旅であつた。(同、廿三日)

その六

春眠不覺曉　處々聞啼鳥
夜來風雨聲　花落知多少

實にこのごろよく眠る。夜早いので、せめて三時か四時には起きて机に向ひたいと思ふのだが、なか〳〵起きられぬ。ツイ寢過して時計を見ながら、毎朝オヤ〳〵と思ふのもあまり愉快ではないが、サテ、眠られぬのはそれにもまして苦しいものである。數年前まではこの夜半の寢覺なども何やら樂しみの一つであつたが、今では苦しい一方である。まじ〳〵と眼をあいてゐて、ろくなことは考へない。

昨年のころ、頭のひどく惡かつた時、この不眠が續いた。ひとに聞いてこまかい砂でこしらへた枕を用ゐたりした。い、にはよかつたが、二重の布で包んでも砂が漏つて困つた。其處へ小豆の枕を作

つて見よと敎ふる人があつた。早速、こしらへた。小豆を五升だか用ゐたのであつた。これはすべてによかつた。頭に熱が上らず、冷え〴〵として實に氣持がいい。いま、熟睡の出來るのは季節の關係もあらうが一つはこの小豆の枕のおかげだと思うてゐる。眠れぬ癖の人は早速試みて見ないか。

妙な話になりさうだが、先づ續ける。

わたしは痔をわるくしてもう十四五年にもなる。脫肛とかいふのである。醫者にかゝらうと幾度も思うたが、なか〳〵根治せぬものだし。中にはそのため却つてわるくしたといふ話などを一再ならず聞いたので、いまだに醫者の手をわづらはさない。それにはよき賣藥を知つてゐるからである。ミツワの痔の坐藥がそれである。他の坐藥をも使うたが、ミツワに限る。わるい時には每朝用便の際、これを一つ挿入しておくのである。十四五年、わたしはこれを常用して、幸ひに大事にもならずにゐる。旅行の時には携帶してゆく。歩く事、汽車に乘る事、飲む事、これらは痔には最もいけないのだが、幸にそれらを續け得て居るのはこの藥のおかげであると思ふ。(問合せあらば用法など手紙にて詳說せむ)。

同じく廿年來常用してゐるものに守田の寶丹、及び寶丹錠がある。頭や腹の具合のすぐれぬ時、それがひどければ寶丹を用ゐ、輕ければ寶丹錠を用ゐる。わたしにとつては誠に妙藥である。東京池之端、守田治兵衞製のものである。

◇

孟宗の筍が實によく出た。子供たちの數へたところによると七十本とか八十本とかあるといふ。今なほ土を冠つて出かけてゐるのがあるのでかれこれ百本になるであらう。來年までは一本も掘つて喰べない事にした。手ごろの藪が出來る。惜しいことに、筍がまだ小さいが、年ごとに大きくなるといふからたのしみである。

眞竹にも幾らか出るであらう。布袋竹には可愛いゝのが二三本昨日今日見えて來た。これには今年は相當出るであらうと思ふ。早くこの緣の、机の暗くなるまで茂つて呉れ。

◇

松原の若葉がいま眞盛りである。犬樟の若葉は燃ゆる樣で楢のそれは雨に濡れた樣である。その間にくろつがが頻りに啼いてゐる。くろつがとは愛鷹の北麓で小學校の兒童に敎はつた名であるが、どうも黑鶫のことらしい。明るいなかに憂ひ、鋭どさをふくんでゐて、まさしく晩春初夏の聲である。これを聞けば深山の駒鳥がおもはれてならぬ。今ごろは栂や落葉松の森の中で嘸ぞ啼いてゐることであらう。

鳥のことをいへば、せきせいいんこを二羽とも逃してしまつた。これは永い間の願ひでツィ先頃細君が買つて來たのであつたが、巣箱の掃除をするとて先づ雌の方をとり逃した。それを慕うて啼く雄鳥の聲を聞くに忍びぬとてこれはわざわざ戸を開いて逃してやつた。

ところが雌の方はこれ幸ひと一路邁進して何處かへ逃げ去つたが、雄はなか〳〵に逃げようとせず、久しい間家のめぐりの木立を啼きめぐつてゐた。細君、嘆じて曰く、矢つ張り雌の方が薄情ですね、あれが初め雄だつたら屹度雌のゐるこの籠にまひ戻つて來ましたよ。

雌の逃げたあと一二日、細君は病氣の様になつてゐた。そして我等の止むるを聞かず、強ひて雄を逃してしまつた。

生きものを飼ふのは考へものだとおもふ。わたしは犬が好きで、沼津に來て三度飼ひかへた。最初の一疋は村の（當時楊原村にゐた）村長さんに食ひつき、事がめんどうになつたのでひとに頼んで殺して貰つた。二度目のは、近所の者に連れ出されて、寄合酒のさかなになつた。三度目のは可愛い、犬であつたが、ひどい神經質で、たいした怪我にもならぬ程度ではあるが三度ひとに食ひついた。警察では殺せといふ。殺しかねて三四里離れた村まで連れて行つて捨てさせたが、直ぐ歸つて來た。止

むなく今度は汽船に乘せて、伊豆の土肥まで連れて行つて捨てさせた。流石に歸つて來なかつた。が、今でもをり〳〵この犬のことが思ひ出されてならぬ。つないで置いてもよかつたに、なぜ捨てたらうなどと考へてゐる。

その七

このごろ頻りに朝鮮のことが思ひ出されてならぬ。考へてみると昨年の丁度いまごろ其處へ行つたのであつた。

鵲の聲が聞ゆる。

この鳥を初めて聞いたのは、釜山のさきの東萊溫泉であつた。花のまだ幾らか殘つてゐる葉櫻の枝にゐて、あの烈しい然し何處かいたづら氣を含んだ様な聲で頻りに啼き立てゝゐた。儒城溫泉にもゐた。珍島の福島勉君の宅の軒先にも來て啼いた。光州の武田全君かたの廢屋じみた朝鮮家の裏の木にも騒いでゐた。京城の河野松乃さんの庭の何やらの大きな木の梢には巣がかけてあつた。さし出したら掌の上にも來てとまりさうな、きたないが愛らしい鳥である。思ひ出すと、當時に覺えなかつた可愛らしさが感ぜらるゝ。

雉子のまふ姿、鶴のまふ姿をば矢張り珍島の寂しい海岸で見た。曉方早くから啼きたてゝゐた雉子の聲もなつかしい。

朝鮮で見た花のうちでは何といつても金剛山の山木蓮であつた。純白で、まる〳〵しくて、小さくて、そして香氣の高い、何ともいへぬ高貴な花であつた。さういへば同じく金剛山の山々の間に在る古寺の庭に咲いてゐた芍藥の花のむらさきも目に浮んで來る。何とか寺の、八十幾つだとかの、手内職の造花の朱の色を汗ばんだ顏になすりつけてわたしをして鮮血だと喫驚せしめた六尺ゆたかの和尚さまも見えて來る。なほ、金剛山の麓の金剛山ホテルの食堂のテーブルごとに飾つてあつた名も知らぬ山草のいろ〳〵の花の色も眼に浮ぶ。其處のボーイに氣の利いたのがゐて、我等を案内するテーブルには特に澤山の花が活けてあつた。もう一つ、内金剛から外金剛へ走る自動車の中で見た路ばたの野茨の花、これはそれこそ鮮かな血の様な赤であつた。野茨といつても子供の拳位ゐの大きさであつた。それがずうつと川縁に續いてゐた。

初め自動車で金剛山に入つた時、鐵原驛から二十四里だかを自動車で走つたのであつたが、一つの長い峠を越えておりついた所に二三十軒ほどの小さな部落があつた。土饅頭式の小さな其處の家々に

みなかすかな煙が上つてゐた。丁度夕方でその煙にすべて夕日がさしてゐた。それが何とも云へず寂しく見えた。わたしは溢れて來る涙をかくさうために、携へてゐた一升壜の喇叭呑をやつた。酒はこぼれて着物の襟からふところまで入つて來た。

京城の市山盛雄君の宅に泊つてゐた時、毎日各所を案内されて大抵夜更けて歸つて來た。さうすると同君方の門前には鮮人がぎつちりところがり合つて睡つてゐた。他に恰好な平地がないため、一寸街路から引つ込んだ平地の其處を選んで彼等は集つて來るのださうだ。それこそ足の踏み場のないまでぎつちりと詰めてゐる。途方に暮れてゐると、構ひませんよ、どん〳〵その上を踏んでお通りなさいと笑ひながら市山君は言つた。

同じく同君宅の二階から見える向うの岡に殆んど毎日、少し位ゐ雨が降らうとも二三人の老鮮人(とわたしは見た、が彼等の年齢は實のところ見當がつかなかつた)が朝から晩まで長い煙管をくはへて何をするでもなくゆつたりとしやがんでゐた。その白衣の姿が眼に浮ぶ。

京城の、畫家で古陶器研究家である淺川伯敎氏に伴はれて行つた或る王宮趾の廢園もなつかしい。因果とその名を忘れたが、何でも博物館の裏手に當つてゐたとおもふ。普通ひとの行かぬ所ださうで、

場所は隨分と廣かつた。その廣い到る所が、林は荒るゝがまゝに荒れ、池には雜草が茂り藻や水苔が浮んでゐた。さうした間にとび〳〵に殘つてゐる小さな建物——多分役人のそれ〴〵の詰所ででもあつたらう——の柱や軒を塗りたてた朱や綠青の色はまだ殘つてゐたが、瓦などは早や幾らか落ちてゐた。丁度初夏の日光がそれらの景物を一層陰鬱なものに見せた。その廢園を通りぬけた所に一つの樓門が殘つてゐた。四方にあつたあとの三つは夙うにとりこぼたれたのださうだ。それへ下駄ばきのままがた〳〵と登つて行つた。其處からは京城をとり圍んで居る丘陵が見えた。昔はその丘陵の峰にも此處と同じい城砦が設けられ、此處と同じい樓門が建つてゐたのださうだ。

何故酒を持つて來なかつた事であらうとわたしはくやんだ。四邊の風物は悉くわたしを息苦しくし、あとではまともに物を見得ぬまでに胸がつまつてゐた。

苦しかつたといへば金剛山から出て長箭港といふに行き、其處で船を待つてゐる間であつた。殆んど鮮人家屋ばかりの寂しい港であつた。小さな宿屋に寄つて夫婦向ひあひに坐つたが、二人とも殆んど泣かむばかりであつた。わたしは酸いゝ樣な酒をとりよせて、がぶ〳〵と飲んで時間を消した。

長箭から元山までの汽船も寂しいものであつた。元山に着いたは夜であつた。おもひもかけず出迎

へてゐて呉れた『眞人』（京城發行）の同人諸君の顏を見、聲を聞いた時、まつたく生き返つたおもひであつた。

元山では其處の富豪の別莊で、岡の上に建てられた鮮人家屋で二三日を過した。溫突の上に初めて寢たのであつた。

おもひでは盡きない。さうしてもう一度其處のあちこちを廻つて見度いものと思うてをる。今度は朝鮮ばかりでなく、滿洲の方までも行つて見度い。さうして其處の曠野の夕日が眺めたい。

それにしてもわたしの健康よ、早くよくなれ！

◇

神原君の歌集『棚雲』が今度ぬはり社から出ることになつたさうだ。よろこばしいことである。左に掲ぐるのはそれに書いたわたしの序文である。

神原君の歌の感じは極めて明るい。而してまた硬い。明るい歌といへば普通柔かな感じを持つものなのに反しかなり骨ばつた硬さが感ぜらるゝ。この明るさと硬さとは相伴うてその歌を甚だ明瞭なものとしてゐる。一首一首がすべてくつきりとしてゐる。この點は同君の歌の特色として常に我等に好感を抱かしめたものである。

これらの歌が一册の歌集に纒つて出ると聞いてわたしは直ちに眼前に一種の明るさを感じたのであつた。

たゞ、取材の範圍の廣くないといふ樣なところからか、ともすると單調になる傾向があつた樣におもふ。この單調が生きた單調か、唯の單調か、またこの歌集が示してくれる所とおもふ。

取材の範圍が狹いと云つたが、同君が北海道の北端網走に居住した際の歌は、この言葉の當らぬ所である。あらしを歌ひ、流氷を歌つた所に、並ならぬ力と光とを示したものであつた。恐らくこの北海をうたつた歌はこの歌集の中にあつても異色ある部分として輝くことであらう。

とにかく同君の歌には同君獨特の色がある。その意味に於てもこの歌集の出版を喜ぶものである。

なほ、斯うした歌集の出るのを見ると早く我々の社からも出したいものだとおもひ、非常に心苦しい。ことに既に出さねばならなかつた一二册もあるのである。それを出し得ない社の無力を悲しまざるを得ぬ。然し、他の社から出てゐる歌集は大抵自費出版の樣である。自費とすると、錢のある人から〳〵と出すことになり、それも好ましからぬ。

何とか考へて見度い。そして早く實行の期に入りたいものである。

その八

昨日の夕方ちやんと坐つて待つてゐるわたしの前にお膳を持つて來た女中が、くすくすと笑つて立ち去つた。

なるほど、賑かな膳の上である。念のためわたしは其處に竝べられた種目を書きとつてみた。曰く、なま胡瓜、煮豆、トマト、桃、燒茄子、煮茄子、胡瓜もみ（これには蓼と青紫蘇とが入つてゐる）白瓜（これは香の物）の八種類である。なま胡瓜には味噌を、トマトには鹽を、桃はナイフでそぎながら同じく鹽を、つけてたべるのである。女中更に笑ひながら曰く、一昨日でしたかもう二品、矢張り青物ばかりで丁度十品でしたよと。

然し、何も大喰ひといふのではない。わたしの膳は朝鮮から買つて來たその土地特有のもので、幅九寸五分、長さ一尺二寸五分（これも念のため計つてみた）の脚つきの小さなものであるからその上に右の品々を載せやうとするには容器に極めて小さいのを選ばねばならぬ。稀に二の膳附となる事もないではないが、それらをつゝつきながらかれこれ二時間にわたつて夕餉をとる。一日中最も樂しい時間である。そしてそのあとが飯であるが、これは當年八歳の若山富士人君の一食分が優にその親爺の一日分に餘る程度である。（七月一日）

◇

いろ〳〵の新聞雜誌の選歌をしてゐると、折々痛快な奴に出會ふ。今日も某新聞の『燕』といふ題で次の樣なのが出て來た。

五月雨やしとしとと降り來るもやと戰ふて害蟲驅除の親燕かな

が、第一首で、第二首は、

五月雨やしとしとと降り來るもやと戰ふて子養ふの念力で嫁ぎとびまふ親燕かな

といふのだ。

（第二首をひと息に讀み下してごらんなさい、妙一層。）

◇

小さいながらに、いま、わが花園の美しさよ。

ダリヤ、カンナ、百合、向日葵、グラヂオラス。

先づそれだけだが、それ〴〵がいま力いつぱいに咲き盛つてゐる。ダリヤにも百合にもそれ〴〵二三種類あるので、相當賑かでもあるのだ。

蜂がゆく、黃金蟲の小さい樣なのがゆく。そしてわたしもまさに白晝の幽靈の如くに煙草をくはへては日に幾度となく其處に出かけてゆく。（廿一日）

その九

萩の葉の美しさよ。

わたしはこの花が好きで、庭に糸萩、白萩、野萩といろ〳〵植ゑてゐるが、この葉の美しさには、今度初めて氣がついた。木一本としてはさうでもないが、ひと葉〳〵に眼をとめて見ると、實に美しい。柔かさ、强さ、こまかさ、明るさがその小さななかに宿つてゐる。

竹柏（なぎ）の實の美しさよ。

葡萄の粒よりやゝ小さい位ゐのまんまるの實の、眞みどりの珠に白い粉がふいてゐるのである。そしてそれが同じく眞みどりの葉のかげにちよこなんとなつてゐる。

庭に一本の葡萄がある。殆んど捨て植ゑの形で、棚もこはれたなり、平常は氣をつける者もなかつた。それが今年どうしたことか、ゐる〳〵と實をつけた。オヤ〳〵と思ひながら何やら濟まぬ氣もしながら朝に夕にとつてたべた。

芙蓉が咲いた。植ゑてから初めて咲いたのである。

梅の木の蔭、池の縁に植ゑてあるので、淡紅の大輪の花の影は水にも映つてゐる。

たゞ一日咲いてゐて、散つて行つた。そして次の蕾が二つ三つ大きくふくらんでゐる。

◇

今年は蟬が非常に多い。元來この沼津地方には蟬が少く、何となく物足らず思うてゐたのであつた。多いと云つても殆んど例のワシワシ蟬といふ種類ばかりで、他にどうかしてツクツショを聞く位ゐのものである。いや、春の末の頃、松蟬とかいふ小さいのが松原に鳴いてゐた。

蜩の聲など思ひ出すと、思ふだけでも靜かな、おちついた秋の初めの氣持を身に感ずる。

カネタタキ（鉦叩蟲）が頻りに鳴く。ほのかな寂しい聲である。夕方など、あちこちにこれの鳴くのを聽いてゐると、ツィ手にした盃を忘れることがある。

◇

某雜誌社からの依頼だと云つて東京の千疋屋から果物を一籠送つて來た。みな外國產だとかいふメロン、梨、林檎、オレンヂなど入つてゐた。

このごろ、野菜と果物としかようたべないわたしは實に喜んだ。競ひ寄る子供を叱り退けほんの少

しづつ膳の上に置いてそれを第一のさかなにしたものである。

これだけあれば暫くたのしめるとおもうてゐたら、いつのまにやら大きな鼠たちが引いて行つてしまつた。

『先生まだ一つ殘つてましたよ』

と云つて利雄さんが桃を一つ持つて來た。取り盡したと思うてゐた畑の木から取つて來たのである。

すると、その翌日、まだありましたよと云つて女中が一つ持つて來た。とにかく今年は桃をよくたべた。

西瓜をもよくたべた。

利雄さんが自分で畑に作つたものである。不思議とよくなつて、十幾つとかとれたさうである。

その最初のころ、もう少し〳〵と熟れるのを待つてゐたら三つか四つ泥棒にやられてしまつた。あとでそれを知つた時の利雄さんの悲壯な顏にはわれ〳〵身ぶるひをした。

◇

野菜と果物しかようたべないと言つたが、まつたく可笑しい位ゐ魚類などがいやになつた。肉類は初めからさう好きでなかつたが、魚は好きであつた。夕方は必ず刺身をとつた。それがいまはひとの

たべるのを見るのもいやだ。

だが、見るのは好きだ。毎日肴屋の持つて來るごとにわたしは見に立つ。それ〴〵に實に微妙な形と色とを持つてをる。安藝の嚴島で一泊し、翌日立たうとすると丁度朝市がたつてゐた。流石に内海だけに魚の種類が多いと見え、何ともいへぬ見ごとなものであつた。北海道の網走で見た鮭の山も壯觀であつた。

◇

娘たちの主催で折々學藝會といふものが催される。二三日前にもそれが開かれた。

先づ二人の姉妹に女中も加はつて大がかりの歌劇があつた。

兄はハーモニカの吹奏と英語の朗讀とをやつた。弟は唱歌をうたうた。責められて父と母とは伊那節と木曾節との合唱をやつた。

七夕のまつりをした。

父は祕藏の布袋竹を一本伐つて娘たちに寄贈した。彼女等二人はそれにいろ〳〵のことを書いたいろ紙を結びつけ、父にも母にもさうせよといふ。その通りにした。そしてうち立てられたその青竹のそよぐ緣側に出て家族みなお祝ひの夕餉をとつた。

小說

一　家

友人と共に夕食後の散歩から歸つて來たのは丁度七時前であつた。夏の初めにありがちのいやに蒸し暑い風の無い重々しい氣の耐へがたいまで身に迫つて來る日で、室に入つて洋燈を點けるのも懶いので、暫くは戯談口などきき合ひながら、黄昏の微光の漂つて居る室の中に、長々と寢轉んでゐた。

しばらくして友が先づ起き上つて灯を點けた。その明るさが室の内を照らし出すと、幾分頭腦も明瞭したやうで先刻途中で買つて來た菓子の袋を袂から取り出して茶道具を引寄せた。そして自分は湯を貰ひに二階から勝手に降りた。折悪しくすつかり冷え切つてゐますので沸かして持つて參ります、と宿の主婦は周章へて炭を火鉢につぐ。宿といつても此家は普通の下宿ではない、ただ二階の二間を友人と共に借切つて賄をつけて貰つてるといふ所謂素人下宿の一つである。自分等の引越して來たのはつひ三ヶ月ほど以前であつた。

序でに便所に入つて、二階の室に歸つて行くと、待ち兼ねてゐたらしい友は自分の素手なのを見て

「又か？」

と、眉をひそめて、苦笑を浮べる。

無言に點頭いて、自分は坐つてまた横になつて、先づ菓子を頰張つた。渴き切つた咽喉を通つて行くその不味加減と云つたら無い。思はずも顔をしかめざるを得なかつた。

自身にもこの經驗をやつたらしい友は、微笑みながら自分のこのさまを見守つてゐたが、

「どうも困るね、此家の細君にも。」

と低聲で言つて、

「何時行つてみても火鉢に火の氣のあつたことは無い。」

と、あとは大眞面目に不足極まるといふ顔をする。

「まつたくだ。今に見給へ、また例の泥臭い生溫の湯を持つて來るぜ。今大周章で井戸に驅け出して行つたから。」

「水も汲んでないのか、どうもまつたく驚くね。丁度今は夕方ぢやないか。」

「よくあれで世帶が持つて行ける。」

「行けもしないぢやないか、如何だい、昨夜は。」

と言つてたまらぬやうに、ウハ、、、と吹き出した。續いて自分も腹を抱へて笑つた。

昨夜の矢張り今の頃、酒屋の番頭が小僧をつれて、先々月からの御勘定を今日こそはといふので今ま

で幾十度となく主人の口車に乘せられて取り得なかつた金を催促に押しかけて來た。丁度主人は不在だつたので彼等は細君を對手に手酷く談判に及んだ折も折、今度はまた米屋の手代が、これも同じく、もう如何しても待つてはあげられませぬと酒屋が催促して居る眞最中に澁り切つてやつて來た。狹苦しい門口は以上の借金取りで、充滿になつて居るといふ騷ぎ。あれやこれやといろ〳〵押問答がやや久しく續けられてゐたが、終には喧嘩かとも思はるるばかりの烈しい大聲を張り上げるやうになつて來た。殊にいつもこの事に馴れきつて居る酒屋の番頭の金切聲といふものは殆んど近邊三四軒の家までも聞え渡らうかと思はれる位ゐで、現に三四人の子供は面白相に眼を見張り囁き交して門前に群がつて居る。こんな有樣で二階に居る身も氣が氣でない。宛ら自分等があの亂暴な野卑な催促を受けて居るかのやうで二人とも息を殺して身を小さくして縮んでゐたのである。

折よく其處へ主人が歸つて來て、どういふ具合に斷つたものか定めし例の巧みな口前を振つたのであらう、先づ明晩まで待つて呉れといふ哀願を捧げて、辛くも三人を追ひ歸した。

其後ではまた細君を捉へて罵る主人の怒つた聲が忍びやかに聞えてゐた。

斯んなことは決して今に始まつた事でないので、僕等が此家に移つて以來、殆んど數ふるに耐へぬ程起つて居るのである。

「然し……」

と友は笑ふのをやめて、眞面目になつて、

「然し、細君はあれが全然氣にならぬと見えるね。」

「まさか、何ぼ何だつて幾分かは……」

「いや、全然だぜ。あんなに酷い嘲罵を浴びせられても、それは實にすましたもんだよ。出來ないものは幾ら何と言つても出來ないんだからつて具合でな。全くどうも洒々たるもんだ。」

「大悟徹底といふわけなんだらう。」

「さうかも知れない、それでなくてどうして毎日々々のあの債鬼に耐へられるもんか。然し洒々と云つても何も惡氣のある洒々ではないのだよ。だからあの亭主のやうにうまく對手を丸めて歸すとか何とかいふ手段をも一つも執ることが出來ないのだね。見給へ、細君一人の時に取りに來た奴なら何時でもあんな大聲を出すやうになる……」

と言つて、また暫くして

「いや、それが出來ないのではなからう、爲んのだらう。負債も平氣、催促も平氣、嘲罵も近隣の評判も全然平氣なんだからな。少しも氣にかからんのだからな。」

「もうあれが習慣になつたのかも知れない。」

「習慣——幾らかそれもあるだらう。が、此家が斯んなに窮してるのもほんの昨今のことだといふか

ら、鄕里に居た昨年頃までは立派に暮して來たんだらうぢやないか。してみるとさう早くあんなに慣れ切つて仕舞ふわけもない。」

と今は湯の事などは少しも頭にないらしく、いつしか可笑しい位ゐ熱心になつて言つて居る。自分は微笑みながら手近の辭書を枕にしてこの若い友の言ふのを聞いて居る。西の窓を通して大きな柏の木の若葉が風にも搖れず靜まり返つて居る。室にはまだ微光が漂つて居る。

「如何しても天性なんだよ。催促の一事に限らず萬事が君、ああいふ風ぢやないか。僕はいつも他事ながら癪にさはるやうに感ずるのだが、そら君、此家の夕食の膳立を知つてるだらう。あの爺さんばかりはこの貧乏のくせに毎晩四合の酒を缺かさずに、肴の刺身か豚の鍋でも料理へてゐないことはない。それに君如何だ、細君は殆んど僕等の喰ひ餘しの胡蘿蔔牛蒡にもありつかずに平素漬物ばかりを嚙つてる、一片だつて亭主の分前に預つたことはないよ。」

自分は思はず失笑した。

「イヤ事實だよ。それも君、全然彼女は平氣なんだから驚くぢやないか。幾ら士族の家だつたからつて、ああまで專制政治を振り廻されちや叶はん。イヤ、今言つたのは極く些細の例を取つたのだが、萬事がさうだ。どんな事でも皆失策といつたら細君が背負ふんだぜ。そして愚にもつかぬ事を取つ捉へてあの爺さんが無茶苦茶に呶鳴り立てて終には打抛る。然るに矢張り彼女は大平氣さ。何日ぞやは

障子を開けておいたのが悪いとかいつて、突然手近にあつた子供の算盤で細君の横面を思ひきり拋つた。細君の顔はみる〳〵腫れ上つた、眼にも血が浸んで來た。僕はそれを見て可哀相で耐らんので、そのあとで心を籠めて慰めようと、一二言言ひかくると、彼女は曰くサ、否ネ、向うが鐵鎚で此方も鐵鎚なら火も出ませうけれど、此方は眞綿なんですからね、とその腫れた面を平氣で振り立てて、誰からか教はつて來たらしい文句を飽くまでも悟り濟ましたやうに得意然として言つてるぢやないか。僕は一言も返事することが出來なかつた。」

不圖したことから話はいつもよく出る細君の性格研究に移つてしまつた。自分も常に見聞してゐる事實ではあるし、つい惹きこまれて身を入れて聽いて居ると、不意に階下で子供の笑ひ聲が聞えた。續いて現に話の題目に上つて居る細君の笑ふのもきこえる。いつも乍らの力のない面白くも無さ相な調子である。細君といふのは三十五六歳の顔容子も先づ人並の方であらうが、至つて表情に乏しい、乏しいといふより殆んど零に近いほど虚心した風をして居るのである。亭主はそれより十五六歳も年長で兩人の中に女の子供が兩人ある。昨年の秋鄕里の名古屋から上京して來たとかで亭主は目下某官署の腰辨を勤めて居るのである。

いま友人の語つて居るやうに、此家の細君は確かに異つた性質を有つて居る。萬事が消極的で、自ら進んでどう爲ようといふやうな事は假初にもあつた例がない。いや、消極的といふと大いに語弊が

あるので、今より以前の女大學流で育て上げられた日本の女性は大方が消極的であるのであるが、此家のはそれとも違ふ。その一般の婦人といふのは幼い時の教育や永らくの習慣やらで行爲の上には萬事控へ目であつても、負けず嫌ひの虚榮心に富んだ感情的のものであるだけ内心では種々と思ひ耽ることが多い、或は忍ぶ戀路に身を殺すなどといふやうな類もあらうし、或は亭主の甲斐性なしを齒搔ゆく思ふといふのもあらうし、或は物見遊山に出かけたいといふもの、或は麗衣美食を希ふもの、極く小にしては嫉妬とか、愚痴とか種々樣々なものを、無理に内心に包み込んで居るに相違ない。

ところが此家の細君に至つては殆んどそれが皆無に近いらしい。戀の色のといふことは小説本で見たことも無いだらうし、第一當時二十一二歳の者が四十歳近い男と結婚したといふのを見てもよく解らう。現に自分等がここに移つて以來夫婦らしい愛情の表れた事などを見たことがなく、一日中に利き合つて居る夫婦の語數もほんの數へ上げる位るにすぎぬ。家計の不如意で債鬼門に群るをさへ別に氣にかけぬのは前にも言つた。一軒の酒屋からは二月とは續いて持つて來ぬやうに借りて飲む、毎晩四合の酒に對しても細君別に何の述懷も無いらしい、物見遊山の、美衣美食のと夢にさへ見たことがあるかどうか頗る怪しいものだ。曾て自分等が細君を上野の花見かたがた目下開會中の博覽會見物に誘ふたことがある。主人も行くがいいと勸め、我々兩人もたつてと言つたのだが、妾はそれよりも自宅で寢て居る方がいいとか言つて終に行かなかつた。二三ケ月の間に町内の八百屋と肴屋とに出る外

細君の外出姿を自分等は未だ曾て見かけたことがないのである。

であるから、家内に大した風波の起らう筈もないが、家庭らしい溫みも到底見出し得ない。良人に對してはたゞ盲從一方、口答へ一つしたこともなければ意見の一つ言つたこともない。兩人の子供に對してさへ殆んど母親しい愛情を有つて居るとは思へぬ。

曾て姉妹とも同時に流行の痲疹に罹つたことがある。最初は非常の熱で、食事も何も進まなかつた。その當時の或る夜自分は十時頃でもあつたか外出先から歸つて來た。所が、しきりに子供が泣いて居る。それも病體ではあるしよほど久しく泣いてゐたものと見えその聲もすつかり勞れ切つて呻吟くやうになつてゐた。兩人の病人を殘して夫婦とも何處へ行つたのだらうと一度昇りかけた階子段から降りて子供の寢てをる室を窺いて見ると、驚くべし細君はその子供の泣く枕上に坐つてせつせと白河夜舟を漕いで居るのであつた。それのみならず酷く子供の看護を五月蠅がつて仕事が出來ずに困りますと言ひきつてゐた。そのくせ仕事と云つては手内職の編物一つもしてゐないのである。その代りまた斯んな風で烈しく子供を叱るといふこともない。と同時に子供もまた少しも母を重んじない、頭から馬鹿にしてかかつて居る。夜でも競うて父親の懷ろに眠らうと力めて居るといふ有樣、それが實に今年八歳と十歳になる女の子の行爲である。頑是のない子供心にも尙ほ且つこの母の他と異つて居る性質を何となく飽き足らず忌み嫌ふて居るのであるかと思ふと、そぞろにうら寂しい感に撲たれざるを

得ないのである。

それかあらぬか兩人の娘の性質も何となく一種異つた傾向を帶びて行きつつあるかの觀がある。娘共の懷しがつて居る父親といふのも曾ては獄窓の臭い飯をも食つて來たとかいふ程で、根からの惡人ではなさ相だが何となく陰險らしい大酒家、家に居るのは稀なほど外出がちで、いつも凄いやうな眼光で家内中を睨め廻して居る。その胸に包まれたものであつて見れば子に對する愛情といふのも略ぼ推せらるるのである。それに子に取つては先づ第一に親しかるべき母親は以上のやうな有樣、萬事母親讓りに出來て居る姉娘の虛心したのは虛心したままに拗けて行き、それとはまた打つて變つた癇癪持の負嫌ひの意地惡な妹娘は今でさへ見てゐて心を寒うするやうな行爲を年齡と共に漸々積み重ねて行きつつあるのである。で、從つて近所の娘連中からは遠ざけられ家に入れば母親は斯ういふ狀態、自づと彼等の足は步一步と暗黑な沙漠の中に進み入らざるを得ないのである。

露ほどの愛情を有たぬ女性の生涯、その女性を中心とした一家の運命、見る聞くに如何ばかり吾等若い者の胸を凍らしめて居るであらう。

然ればと云つて彼女に常識の缺けて居る所でもあるかといふと、それは全然ちがひで、物ごとのよく解りのいい立派な頭を有つて居るのだ。

友と自分とは更にいろ〳〵と細君の蔭口をきいてゐた。少しも料理法を知らぬといふこと、(これも

實際の事で、八百屋に現はれるその時々の珍しい野菜にさへ氣附かぬ風である。自分等の豚肉などと共に三つ葉とか春菊とかを買つて來ると、初めてそれに氣がついたやうに、それからはまた幾久しく一本調子にその一種の野菜が膳に上る。それも時に料理法でも變へるなどといふことは決してないのである。)食器類その他の不潔だといふこと、何だかだと新しくもないことを言ひ合つてゐたが、それにも倦んで、やがては兩人とも默り込んでしまつた。子供の高い聲と細君の例の調子の笑ひ聲とが、また耳に入つて來た。

「あれを聞くと、僕は一種言ひ難い冷氣を感ずる。」

と、突然友は自分の方に寢返りして言つた。丁度自分もそれを感じてゐたところであつたので、無言に點頭いた。

斯くするうち漸く階子段の音がして、細君は鐵瓶を持つて二階に昇つて來た。そしていつものやうに無言に其處にそれを置いて降りて行くだらうと思つて居ると、火鉢の側に一寸膝を下したまま、襷に手をかけながら、いかにも珍奇な事實を發見したといふ風に微笑を含んで

「不思議なこともあるものですわねえ」

と、さも不思議だといふ風に兩人をゆつくりと見比べる。兩人とも細君の顏を見てそして次の句を待つてゐたが、容易に出ないので、待ちかねて友は訊いた。

「如何かしたのですか。」

「先日、妾は夢を見ましたがね、鄕里で親類中の者が集つて何かして居るところを見ましたがね、何をして居るのやら薩張り解らなかつたのでしたがね……」

と、一寸句を切つて

「そしたら先刻鄕里の弟から葉書を寄越しましたがね、父親が死んだのですつて。」

「エ、お父樣が、誰方の?」

「妾の父親ですがね、十日の夕方に死んだ相ですよ……。それも去年妾共は東京に來た時一度知らしたままでまだ鄕里の方にはこちらに轉居したことを知らしてやらなかつたものですから、以前の所あてに弟が葉書を寄越したものと見えて附箋附きで先刻それが屆きました。

「貴女のお父樣ですか?」

友は自己の耳を疑ふやうに眼を眞丸にして訊き返して居る。

「エ、。」

と、細君は、まだ何か言ふだらうかと云ふ風に友を見詰めて居る。

「さうですか、それはどうも飛んでもない事でしたね、嘸ぞ……」

と自分は起き直つて手短かに弔詞を述べた。

が、斯ういふ具合に述べ立てらるると、世に一人の父親が死んだといふ大きな事實はどうしても頭の中に明らかに映つて來ないので、自然形式的の挨拶しか出て來ない。それでも、其場のつくろひに、まだそれほどのお年でもなかつたでせうに、などと言ふと

「エ、今年で五十七か八か九かでしたよ。ィエもう妾は去年家を出る時にお別れのつもりで居ましたから、どうせ斷念めてはゐました。」

と、例の悟つた風をわざ〳〵しいやうに現して見せる。いよ〳〵こちらでも愁傷げに裝ふことすら出來にくい。友はまた驚き切つたといふ風に一語をも發せずに居る。微かな風が窓から流れてランプの白い灯がこころもち動いて居る。黄昏の靜けさはそぞろに室に充ちて居る。

「それでも……さうですな、さう言へばさうですけれど、……阿父さんの方で會ひたかつたでせう。」

「それはね、少しは何とか思つたでせうけれど、……思つたところで仕樣のないことなのですからねえ。」

と、また微笑まうとする。

「阿母さんはまだお達者なのですか。」

自分は今度は他のことを訊いてみた。

「エ、彼女こそ病身なんですが、まだ何とも音信がありません。」

「お寂しいでせうな、その阿母樣が。」

突然友が口を入れた。

「エ、それはね、誓くは淋しうございませうよ。」

「貴女も寂しうございませう。」

にや〳〵しながら彼は自分の方を見廻してゆるやかに斯う言つた。でも彼女は頗る平氣で

「エ、でもね、どうせ女は家を出る時が別離だと言ひますから……」

「で、お歸國にでもなりますか、貴女は？」

自分は見かねてまた彼女の話の腰を折つた。

「アノ良人では歸れと言ひますけれど、歸つたところでね。……それに十日に死んだとしますと今日はもう十四日ですから……今から歸つたところで仕樣もありませんし……」

「お墓があるではありませんか。それにその病身の阿母さんも待つておるでではありませんか。」

耐りかねたといふ樣子で友は詰るやうに言つた。

「さうですね、それはさうですけれど……」

と、苦もなく言つて、茫然窓越しに向うの空を眺めて居る。暮れの遲い空には尙ほ一抹の微光が一

片二片のありとも見えぬ薄雲のなかに美しう宿つて居る。この女はいま心の中で父親の死んだといふことよりも、夢の合つたのを珍しがつて居るのかも知れない。

階下ではまだ子供が騒いで居る。そして姉の方が妹から追はれたと見えて、きやつ〳〵言ひ乍ら母を呼んで階子段を逃げ登つて來ようとする。

「來るで無い！」

と言ひ乍ら細君は立つて、子供と共に下に降りて行つた。

あとで兩人はやや暫く無言に眼を見合せてゐた。自分は微笑んで、友はさも情無いといふ風で。

「如何だ、實にどうも！」と友。

「ウフ！流石に驚いたね！」と自分。

友はいま細君の降りて行つた階子段の方を見送つてゐたが、

「あれでも矢張り生きて居る……」

と、獨言つやうに言つた。

自分もその薄暗い階子段を眺めてゐて、何となく眼のさきの暗くなるやうな氣持になつて來た。

と、友は

「どうしても普通の人間では無い。不具では……白痴では無論ないけれども確に普通ではない。あ

れで人間としての價値があるだらうか。」

「價値？」

「價値といふと可笑しいが、意味さ、人間として生存する價値が、意味があるだらうか。」

「サア……然し」

と言ひかくると、自身にも解らぬ一種言ひがたい冷たい悲哀の念が霧のやうに胸の底からこみ上がつて來た。

「然し、然し、あれでも子を產んだからな、しかも二個！」

と、口早に言ひ棄てて埒もなくウハヽヽヽと笑ひ倒れた。

倒れると窓越しの大空が廣々と眺めらるる。今は早や凝つた形の雲とては見わけもつかず、一樣に露けく潤んだ皐月の空の朧ろの果てが、言ふやうもなく可懷しい。次いでやや暫くの間、死んだやうな沈默がこの室内に續いてゐた。

附記、この「一家」の一篇は次號を以て完了すべし。然しただ本號のこの一章のみを以て獨立せるものと見做さるるも強ちにさし支へなし。（作者）

蝙蝠傘

いよ／＼さし迫つて一週間あまりも考へに考へぬいて、この上もなく精神を疲勞らせ切つた末に、宛然白痴のやうに虛心となつてから、斷然歸國することに中沼順三郎は意を決した。決意した日は終日蒲團を被つて、戸をも閉め切つて、物をも食べずに寢てゐた。

いよ／＼明後日から出立するといふ日、今まで曾つて經驗のない寂しい果敢ない思ひが身に起つて、何かは知らず人といふものが慕はしくなつて來た。そしてその時不圖思ひ出したは、目下府下八王子町に就職して居る同鄕人の某といふ男のことで、それからは矢も楯も耐らず氣がいらつて、終にその日、十月二十三日、雨のしと／＼と降る午後三時一分大久保停車場發八王子行の汽車に乘り込んだ。

中沼順三郎は岡山市の在の生れで、今年廿五歲、今まで早稻田の師範部歷史地理科に入つてゐた。身長の馬鹿に高い割合に正比例して顏も圖拔けて長ぐ、顏色の蒼白な唇の厚い眼の大きい、そして極めて度の强い鐵緣の近眼鏡をかけて居る。彼は身體の大きいのに反して實にこの上もない小膽者であつた。いかなる些事を爲すに當つても細心翼々非常の心配苦勞を感ぜずには居られなかつた。現に彼

はそれがためこの六月に擧行せられた學校の進級試驗をも受けなかつた。勿論そんな性質であるから學校も出來のい、方ではないが、怠け者の多い私立學校に出てゐて殆んど一時間の遲刻さへせぬ位ゐに勉强してゐるので、何ぼ何でもその試驗に及第の出來ぬ筈はなかつた。が、彼は試驗といふものを殆んど他の想像もつかぬ位ゐに畏懼して、その始まる二ヶ月ほど以前から諄々と準備に着手し、いよ／＼期日の近づくに從つて、今まで殆んど訪問したことのない友人（と云つてもたゞ級友といふにすぎないので、所謂友人といふものは彼には無かつた）の許を歷訪して解り切つたことを繰返して質問し、兎に角準備は整つてゐた。所が案外にもいよ／＼試驗の始まるといふ當日、不意に脚氣だと稱して彼は鄕里に向つて出發して仕舞つた。そのためこの九月にその未濟試驗といふのが擧行せられ、止むなく彼はそれを受けたのであつたが、普通の試驗に對し得點の二割を減ずるのがその未濟試驗の定則なので、彼は遂に落第して仕舞つた。

彼は中沼家の長男で、その下に弟妹が四人ある。彼の母は繼母で、彼はその四人の弟妹とは腹を異にしてゐた。その繼母といふのは世によくある繼母とは違つた女で自分の腹の四人をもこの順三郎をも其間に區別を置かずに育て、來た。が、彼は性來斯んな性質であつたのか妙に陰氣臭い小膽者となつて了つて、家内にゐても一日に利く口數もほんの數ふる程で、笑顏などといふものは餘程の事でなくては人に見せなかつた。從つて誰からも可愛がられず、家の内で彼の唯一の肉身である父親からす

ら却つてうとみ輕んぜられて、いよ〳〵寂しい陰氣な孤獨の境に身を陷らせて行くやうになつてゐた。で、從つて學問の進行も鈍く、父はそれを見てゐて、學資の豐な家ではなし、もう學校を止して、家にゐて農業を輔けよと常に言つてゐた。が、どうしたものかそればかりは酷く嫌つて、何か彼か言ひ乍ら矢張りあまり好きもせぬ學校に執着してゐたのであつたが、試驗を受けずに逃げ歸つたり、また後で受けたそれが落第であつたりしたので、以前よりも手嚴しく、歸鄕して家事に盡せよそのため旅費幾圓をこゝに添へておくとの父の手紙を受取つた。それ以前から烈しく彼の苦痛を感じてゐたことは今年二十二歳になる彼の異母弟が岡山の高等學校を出て、本鄕の帝國大學の政治科に入學したことで、兄思ひの情の厚い活潑なその弟を見ることが彼にとつて實に耐へがたい苦痛であつた。で、一緒に住まう、そしたら貴郎(あなた)の氣分も少しは面白くなつて來るかも知れぬといふ弟に手をついて斷つて、相變らず四年間ほど住み馴れた或る素人下宿の玄關側の三疊半の薄暗いなかにその圖拔けて長い五體を置いてゐるのであつた。

歸らうか歸るまいかと思ひ煩つてゐる最中、或日その弟が學校の歸路に制服制帽で訪問して來て、何もそんなにくよ〳〵するには及ばない、歸鄕するのがそんなにお嫌ひなら僕から鄕里にさう言つて上げる、あんな頑固親爺の言ふことなど一々音なしくきいてゐたらそれこそ飛んだ馬鹿を見ると、例の元氣よく自分から菓子や果物などまでとりよせて兄を慰めたのであつたが、その弟の歸つて行つた

後で、彼は斷然と決意した。そしていよ〳〵歸國することに決めたからと父に向つて手紙を差出し、下宿にもその事を告げ知らせたのであつた。斯うしておいて彼は一日蒲團を被つて、珍しくも心から涙を零して泣いた。それは實に留め度もなく泣いたのであつた。

十月二十三日午後三時、彼は身心殆んど空虛になつたやうに疲勞し果てた五體を大久保停車場から八王子行の汽車に投じた。丁度その日八王子では有名な呑龍上人の御十夜があるので車内は既に滿員であつた。彼は僅に身を群集の間に押し込んで、つまらなさ相に窓に凭つて立つた。十二三日も降り續いた雨は今日も尙ほじめじめと降つて居る粒の極めて細かな殆んど霧とも紛ふべき程で、それがどんよりと薄白く遠近を立ち罩めて居る樣(さま)は誰の眼にも先づ耐へがたく鬱陶しく見える。それにまたその日に限つて今までにない冷氣が加はつて、足の指先や耳朶などは痛いやうに寒い。それで何れも皆泣き出し相な顏をしてゐる幾多の男女を詰め込んで、甲武線の不完全な古列車はその果てもない霧雨を衝き乍ら武藏の平原の畑を越え岡を巡り林に入つて、ごつとり〳〵走つて行く。濛々たる煤烟は風のない空に低く垂れ、客車の窓に添うて遙か背後の方まで流れ殘つて居る。薄紅葉した林の中などでは雨にも濕らぬ秋の鳥の朗らかな啼聲が起つて居るに相違ないのだがむく〳〵と詰め込まれた人々の耳にはそれも聞えず、雨と寒さと烟とを恐れて全ての窓を閉め切つてある車室の中は、たゞ人の吐き出す瓦斯に濁つて、車臺の動搖はともすれば嘔吐を誘ふ媒介となつて居る。その中に例の長軀を置い

て中沼順三郎は生氣なく茫然しながら限りも知らずいろ〳〵の事に思ひ耽つてゐた。如何したものだかその時に限つて彼は彼が今から訪ねて行きつゝある知人のことが可懷しくて叶はぬ。同じ中學に出てゐたのであつたが、彼は既に高等工業を出て現に立派な地位を作つて居る、この春は鄕里に歸つて自分も知つて居るあのお絹さんを細君に迎へて來てゐる相だ、昔は互に村内の腕白者で、あゝもした斯うもした、今日突然斯う訪ねて行つて一二年振りに顏を合せたら彼は實にどんなに驚くだらう、そしてどんなにか喜んで呉れるだらう、自分には全く一人の友人もない、彼にしたところがあんな虛心したやうな性質の男のことで某々君などとは違ひさまで親切らしい言葉さへかけて呉れたことはなく、勿論自分は彼に對して同鄕の者といふ外別に何等の感を惹かなかつた、それが不思議に昨日あたりから深く〳〵胸裡に思ひ出されて、遂に斯うして訪ねて行くやうにまでなつた、つい手近に居る親身の弟には逢ひたいとさへ思はず、今まで殆んど音信もしなかつた彼をわざ〳〵斯うして訪ねて行くことになつたのだ、自分にも何の故だか解らないが、とにかく耐へがたく可懷しい、噫某君！と眞に他愛もなくその可懷しさを繰返して居る。すると散々に亂れ散つてゐた心も一縷のしんみりした情になつて、只管その可懷さを追うてゆく。彼は實に近來覺えのない慰安と滿足とを感じて、白く湯氣のかゝつたガラス窓に陶然として醉へるが如く凭つて立つてゐた。足を揃へて、兩手を組んで、そしてその大きい眼をば夢見る時のやうに優しく瞑ぢて居る。乘車以來未だ一言も發せず斯う隅の方に默り込んでゐるので、誰一人としてこの丈の高い蒼白い男に氣の附いた者はなかつたのだ。

その間に汽車は相も變らず長い蟲でも蠢くやうにして走つた。時に原野の中の寂寞たる小さな停車場で、震へのあるするどい汽笛を霧雨に閉された靜かな四邊の天地に響かせては、またごつとり〳〵走つて行く。中野荻窪吉祥寺境などをば既に通りすぎ今また國分寺を發車した。乘客の八九分通りは八王子の十夜詣りが目的であるらしいので驛々でもさまで變更は無かつた。然し流石に國分寺は川越線の分岐してゐる處だけに多少の昇降もあつて、順三郎の室にも一二人分の空席は出來たのであつた。が、彼は例の知人のことを憶ひ始めてからはかりそめにもその思を紛らさざらむがため毫もその身體を動かすを欲しなかつた。で、相變らず窓際に凭つて立つてゐた。

國分寺驛を過ぎて間もなく、この武藏の平原の奥によく見かける深い森林の中にその汽車は入り込んだ。林に入つて一分も經つか經たぬかのうちに、俄然彼中沼順三郎は裂くるやうな烈しい叫び聲を發して矢庭に其處に打つ仆れた。したゝかに打驚かされた車内の人々は全て總立ちになつて其方を見やつた。驚くべし、今迄一樣に閉め切られてあつた車室側面の扉の一枚、丁度それに凭つて彼が立つてゐた一枚の扉は、フワリと開いて仕舞つて居る。この線路に用ゐる列車は車室の側面が全て扉になつてゐて、その何れからでも出入することの出來るやうに造られてあるのであるが、國分寺驛の驛夫はその一枚だけを閉めることはしめても鍵をかけるを忘れてゐたのであつた。で、扉は中沼の凭せか

けた身體の重みで、自然に開いて仕舞つた。當然中沼はその開いたと共に身體の重心を失つて仆れた。仆れて車外に轉げ出すべきであつた。が、幸にも、實に僥倖にもその扉の下部に他の扉と扉とにさし渡しておいてあつた一本の蝙蝠傘があつたがためそれに支へられて辛くも身體を車内に留めてゐたのである。一瞬の間に微塵となるべきその五體をその一本の傘のために辛くも無事に保ち得てゐたのであつた。

附近の人は一瞬の驚愕の去ると共に遽しく彼を引起した。引起されて彼は車の中央に棒立ちになつて立ち上つた。その顔色は全然既にこの世のものではなかつた。眼は釣り上つて不斷の痙攣が彼の五體に起つて居る。幾度となく發作的に首を上下に動かして、さて容易には言葉が出ぬ。靜まつた滿室の同情の瞳は全て彼のこの一身に集つた。

が、やがてすると滿室はがや〳〵と騷がしくなつて來た。やれ飛んだ危い事であつた、それでもよくまア助かつた事だ、と異口同音にわめき立てたが、然しどうして落ちなかつたのだらうと誰しも先づ其事を不審つた。この時までその開いた扉の直ぐ近くに腰かけて同じく驚愕のあまりに物も言へずにゐた六十歳あまりの田舍の老婆が、漸くに口を出して、それはお前さん斯ういふ譯ですよと、彼の落ちなかつた原因、卽ち例の蝙蝠傘一本のことを口早に仰々しく語り立てた。人々は皆成る程と感心して聽いて居る。そしてその傘は既に彼が人々から引き起された時、何物かに觸れて車外に落ちて、

もう如何なつたやら解らぬことゝ、その傘の所有主は老婆自身であること等を附け加へた。今まで殆んど一言を發せずに立つてゐた順三郎もぢつとそれをきいてゐたのであつたが、矢庭に老婆の前に進み出て、無言に辭儀をして、そして、切れ〴〵に、再生の高恩を誠心から感謝した。感激のあまりか、彼の眼には涙が一杯溜つて居る。情が昂んで殆んど語を續けることが出來ぬ。

人の好い福々相な老婆は、また同情の念に耐へかねて自分にも泣き乍ら、否え〳〵如何して、と彼の度外れて丁寧な言葉を打消して居る。でもまアよく助かつて下さつた、お蔭で妾も若い者一人拾つたやうなもんだ、兎も角もお日出度い事だと、包み切れぬ得意の色をその小さな皺の寄つた顔に溢れるばかり表はして居る。人々はまた何れもそれを道理のことと迎へて、偉大な彼女の德を稱へ、そしてその紀念すべき傘一本を失つたことを氣の毒がると、否エ、と一言のもとにまた打消して仕舞つたが、流石に年老つた女性のことで、二圓幾十錢とかを出して東京の牛込の通寺町に嫁入つてゐる自分の娘が今度新しく買つて呉れたものであつたとの愚痴をば終に隱し了ることは出來なかつた。それもまつたく道理のことで、と人々は同意して、然し何を云つてもそんな大きな若者と取代へたことだから斷念するが可からうと慰める者もあり、この事は要するに帝國鐵道廳の失態であるのだから然るべく損害賠償を要求するのが至當だと論ずる者もあり、暫くはその事のため車内の騷ぎは一通りではなかつた。

丁度その老婆の隣に坐つてゐた中學生らしいのが、立つて順三郎に席を讓つた。彼はただ默々として從順に、よくは禮も言はずその席に着いた。彼の心はいまこの老婆と洋傘とのことで滿されて居る、限りなく極りなき感謝の念は實に溢るゝばかり彼の胸に充ちて居る。そして幾圓でも構はぬ、有る限りの金を老婆に償はうと私かに懷中に手を入れて見たが、ハツとして思ひ附いた。彼は持つてさへ出ねば彼處へ行つても金は費はずに濟むといふ彼の年來實行し來つた主義から今日もほんの汽車賃しか持つて來なかつたのである。流石に顏は熱つて、少なからず當惑したのであつたが、それではとまた思ひ返して、この次の驛で下車して、彼處まで後返つて確にその大恩ある老婆の蝙蝠傘を拾つて來ようと凜々しく決心した。で、そのことを明晰と老婆に告げ、濟みませんが八王子の停車場で一汽車待つてゐて下さいませんかと哀願した。そして老婆のそれには及ばぬと强つて辭むのをば斷然と退けて、固く自ら誓つたのである。その後次の立川驛に着くまで彼はいろ〳〵と老婆と物語つた。その樣子は宛然幼い孫の祖母に對するか、若しくば小學校の生徒が優しい老先生に對するかの態度で、二十五歲の普通以上の敎育を受けて居る男とはなか〳〵に認められない程であつた。老婆もまた從つて、孫か生徒かを扱ふやうにこの中沼順三郎を遇してゐた。

「さう〳〵、書生さんは今年幾歲になるとか云ひなすつたね」

「ハイ、廿五歲」

「廿五歲！ホ、それはまだ〳〵……阿父さんや阿母さんたちもまだ御丈夫ですかい」

「エ、まだ丈夫です」

「それは〳〵、お目出度いこんだ、嘸ぞねえ、今度のことをおきゝだつたらどんなにお喜びでせうよ。妾にも貴郎より二歲若い孫がありますがね、いま兵隊にとられて出てゐますので、一時も心配は絕えませんよ。矢つ張りね、人間つてものは何日何時今日のやうな事がないとも限りませんからねえ」

「ハイ、全く、どうも……」

車內の人々は極めて眞面目に斯んな談話を聽いてゐた。中には哀憐の微笑をその片頰に漂はせて順三郎を見詰めてゐるのもあつたけれど。

やがて汽車は立川驛に着いた。順三郎は今更に胸をときめかせたけれど、直ぐ立ち上つて、繰返して八王子停車場で待つてゐて吳れよと老婆に賴んで、幾度びとなく頭を下げ乍ら車內を出て行つた。老婆を初め車內の人は多く車窓に首を出して帽子をも失くした彼の寒さうな丈高いうしろ姿を見送つた。

實はいよ〳〵降りるといふ間際になつてツィ先刻の彼の雄々しい決心は餘程鈍つてゐた。然し、それを撤回するわけにも行かず悄々として昇降口に立ち出でて、破れ古びた雨傘をさし乍ら今更に今日の出來事の無情なことを身に感じた。その腹立たしさもあり先刻車內で耳に挾んだこともあるので、

彼は改札口に行くや否や、事の一伍一什を語つて、鐵道の無責任を語り、その代りに途中下車驛でない此處で降りてもこの切符を有效ならしめよと迫つた。吝嗇を以て有名なる彼は、斯る場合にも立川八王子間の幾錢の要もなき汽車賃を拂ふのがいかにも心苦しいので、出來るならばそれだけでも無事に通り拔けたいと念うて居るのである。普通ならぬ彼の蒼ざめた顏色や語勢を見て、改札口に立つてゐた少年の驛夫は驚き乍ら驛長室に走つた。

五十歲近くの赭ら額の太つた驛長は頭から冷笑を以てそれを迎へた。そして驛夫をして驛長室に彼を連れ來らしめ、宛ら警察で嫌疑者の罪を檢するが如く傲然として彼に對した。彼は斯うなるともう殆んど一言も滿足には辯解し得ない。證據とか規則とかいふものを故らに誇張して頭から押し附けられて、彼はたゞ無言に、その赤い一片の切符を取り上げられて、群り來つた嘲笑者によつて場外に送り出されて仕舞つた。

秋雨の薄白い原野中の一寒驛を、彼は實に如何なる思ひを懷いて辿つたであらう。停車場を出るや否や、殆んど夢中で十軒あまりも集つて居る粗末な停車場の中央を貫いて居る比較的廣い道路をすたすと當も考へずに歩いた。元來が徒歩する豫定は無かつたので、長裾のまゝ足駄を穿いて、小さな破傘をさし乍ら歩いて行くので、例の降るとも見えぬ霧のやうな雨は忽ちに彼の衣袂をしつとりと濕した。平常ならば酷くそれに氣を揉んで少しでも濡れないやうにと注意する性質であるが今はもう何

ところでなく、腹立たしいやら悲しいやら果敢ないやら、有耶無耶に胸は亂れて、行き合ふ人々の顏さへ目に入らぬまでにとり逆上せて歩いた。

が、少しの間斯うして歩いて居ると、不圖氣が附いて、左樣だ、帽子を拾ひに行かねばならなかつたのだと、ハタと足を停めた。そしてそのまゝ其處に佇んで四邊を見廻すと、幸ひ鐵道線路の方向に向つて、草葉がくれの小さな耕作路らしいのが本道から折れて出來て居る。とにかく線路の方に出て見ようと、裾を端折つて危い足つきをしながらその小路に入り込んだ。急に耐へがたい寒さを感じて幾度びとなく身慄ひが起つて來る。

小路は桑畑の間を少し通じてゐて、直ぐ林に入つて居る。もとより路といふ路でないので、雜木の枝葉は左右からさし冠つて、とても安閑と傘などはさして行かれない。止むを得ずそれを小さく窄めて、丈高い痩せた身體までを狹めるやうにして辛うじて辿つた。林は殆んど果ても無き相に廣々と續いて居る。五本十本ほどづつ赤松の老幹が群り聳えて居る下草には五年生位ゐの楢や櫟がみつしりと立ち込んで、その葉は既に半ばあまり艶のない干乾びた鈍黃色を呈して居る。それらに混つて薄も諸所に叢生し、其白茶けた枯穗には雫がしと〳〵と宿つて居る。吹いて居るとは思はれぬけれど天には矢つ張り幾らかの風があるらしく、時期を作しては松の雫がばら〳〵と落ちて來る。仰いで見るとただ一色に鼠色がかつた大空は雲の往來さへ見分けられず、相も變らぬ小糠雨のみは何處からともなく

斜めに白く四邊の草木にふりかゝつて居る。彼は時々足を停めては聽くともなく耳を立てた。雫の落ちる音にまじつて遠く近く頰白の佗しい聲が通つて來る。世はたゞ寂寞、殆んど全てが生きて居るものとは思はれぬ程だ。彼はその寂しい中に立つて餘程その目的を放棄しようかと思ひ立つた。然し、若しあの傘がなかつたならば、と思ふと、われと自己の身體が見かへられて、恐しい惡事にでも襲はれたやうに、是非拾つて來ねばならぬ、とわれとまた繰返して、とぼ〳〵とその林の中の寂寞を破つて辿つた。

幸にも餘り遠からずして先づ木がくれに電信柱や電線が眼に入り、次いで一段平地より高まつて線路の土堤が見え出した。急いで其處に立ち出でて傘をも充分にさし廣げ、彼は先づ左右に遠く連つた二條の鐵線を見渡した。雨の中にもこれのみはきら〳〵と光つて、さへぎるものもない平地の西と東とに果ても無う相延いて、何れもその端を木立の中に沒して居る。その二條の光つた鐵線を載せて居る礫原には雨の溜れる上にギラ〳〵と車の落して行つた油が浮いて、足駄を入れるさへ心地惡しげに見えて居る。見れば見る程不快の念がこみ上げて、彼は續けさまに唾液を吐いた。事實のことあの一本の蝙蝠傘が無かつたならば今頃の自分は實に如何であつたらう。この汚い上に手は手足は足と散々にぶち碎けて殆んど人間の形をも留めずにたゞ一團の血と肉と骨との塊になつて横はつてゐたに相違ないのであつた。と思ふと現にその線路の上に立つて居る自分が果して生きて居るのだか如何だかも

疑はるゝやうで、戰慄は幾度びとなく續いて起つた。然うだ、自分はその大恩ある傘を拾ひに急がねばならぬのだと、今更のやうに思ひ出して、追はるゝ如く以前よりも急ぎ足にその氣味惡き線路に添うて歩いた。雨はいつのまにやら勢を強めて、切りに傘に音を立てゝ降りまさつた。

凡そ道の十町も歩いたころ、彼は濡れながら線路を繕つて居る二人の工夫に出會つた。反則して線路を歩いて居る氣の弱い順三郎は、思はず失策つたと。舌打ちせざるを得なかつた。でも既う彼等にも認められたし、且つ他に歩くべき場所もないのでおど〳〵しながらも尙ほそのまゝ歩を續けた。胸には早やどき〳〵と浪が打つ。漸々兩方の距離は近づいた。この雨の降るのにこの深い林の中の線路をとぼ〳〵と歩いて居る不思議な一人の男を見て、工夫共も仕事を止めて見守つて居る。順三郎はよ〳〵彼等の傍らに近づいて、心もち頭を下げて無言に傘に隱るゝやうにして通りすぎた。二歩、三歩、五歩、終に一人の工夫は口を切つた。

「オイ、何で線路を通るんだい」

順三郎はそのまゝ立ちすくんだ。でも何とも言ひ得ぬ。

「何で線路を通るんだい」

「アノ、一寸用事があるんですから……一寸いゝでせう」

「不可ん、此處は線路だぜ、用があるなら他處を通れ」

順三郎は、全く自己を棄て、極めて慇懃に目下の事狀を語つて、主人に對して哀憐を請ふやうに只管にこゝを歩かせて呉れよと願つた。併し以前から口を利いて居る一人の工夫は嚴として聽かぬ。是等の種類の下等な人間にありがちな人の弱味につけ込んで快味を貪らうといふ念が獸に近い彼の胸裡には炎々と燃えて居る。重ね〳〵のこれらの出來事に順三郎は最早何事をも施す術が無かつた。その顏色は無限の失望と悲痛と憤怒とのために殆んど既に生色なく、濁り切つた瞳には鈍赤色の血が潮して來た。樹立をわたる雨の聲が一しきりに耳立つ。

「オイ何爲てやがるんだい、不可ねえといつたら不可ねえんだい。」

終に以前の工夫は一歩を順三郎の方に踏み出した。今まで默つて面白相にこの有樣を眺めてゐた今一人の四十歳ほどの工夫は、輕らかに笑ひ出して、

「止せよ、もう止せよ、可哀相に泣いてるぢやねえか。」

と、同僚に言ひ乍ら、同僚の尙ほ仰々しく言ひ立つるのには頓着もせず、更に順三郎に向つて、

「早く通るがいゝや、探し出したら人家の方に出て行きねえ、ぐづ〳〵してるともう上りがやつて來ますぜ、もうぢきだ。」

順三郎は燃ゆるやうな感謝の瞳をひたと彼の方に向けて、頭を下げて、そしていそ〳〵と歩き出した。少し行つて振返らうとすると例の以前の奴の吐鳴聲が聞えたので、そのまゝ見返りもせず、顏を

よくは見なかつた男であつたけれど、心の中では繰返し〳〵彼の工夫の親切を感謝しながら、一生懸命になつて急いだ。やがて線路は暫く林を出て畑の中を貫いて居る。それを通り抜けるとまた林に入つた。雨はいつしか又やゝ小降りになつて居る。

林の中を行くこと少時、彼は思はず聲を上げて叫んだ。彼は今その自己の全身を捧げて探して居る例の蝙蝠傘を發見したのである。それは少しの泥を附けた許りで、極めて無事に線路の片側の枯草の上に黑々と濕つて横はつてゐたのであつた。彼は小走りに走つて狂ほしげにそれを拾ひ上げた。そしてこの生もない些細な一器物を摑んで彼にしては極めて珍しくも殆んど逆上するばかりに心の踊るを覺えたのであつた。

彼が、やがてまた全然がつかりして傘を握んだまゝ、茫然として立つて居る時に、上りの汽車は轟然として彼の前を通り去つた。濃密な湯氣と煤煙とを浴びせられながら、彼はわれ知らぬ間に遮二無二傍らの林の中にわが身體を押し込んでゐたのであつた。

汽車の音響の漸々と遠ざかつて、殆んど耳に殘らぬほどになつたころ、次第に吾に返つた彼は、またのそ〳〵と線路に出て、さて何處から人家に出るべき路を求めむものかと思ひ煩つた。彼にはもう二度と今來た線路を後返る勇氣がないのである。で、どうしても今少し前方へ進まねばなるまいと傘を見出してより一時に疲勞の發して來た彼は、全然自己の身體をもてあましながら、止むなく再び以

前の方向をとつて重い足を運び始めた。そして行く〳〵考へて見ると、今から立川まで歩いてゐてはとても今度の汽車には間に合はぬ、寧ろこのまゝ國分寺まで行つて其處から乘らうと、心に思ひ定めた。それならばさまで急ぐにも及ぶまい。時計も持つてゐないのでよく解らないが、發車度數の少いこの線路のことだから多分大丈夫だらうと思ふと、身も心もがつくりと勞れ果て衰へ果てゝ、幸ひ其處に線路の方にさし出て横倒れに倒れて居る一本の大きな櫟の樹を見出して、もう濡るゝのも構はず其幹に腰かけた。

幸ひその時には雨が殆んど止んでゐて、西の空には片々の蒼穹さへ見出されてゐた。十幾日かを降り續けた雨も最早最終に近づいたらしい。風が少し吹き加はつて、寒さはいとど身に沁みる。彼の腰かけた櫟の木は連日の雨で土地が壞れて、今日か昨日根こぎのまゝ線路の方に倒れて來たものらしく、列車の進行に邪魔の所だけ切り拂つて他はまだそのまゝに打捨てゝある。薄黄色くなつたまゝ葉はまだ茂くその枝に着いて居る。

彼は濡れ濕つた蝙蝠傘を傍らの枝に凭せかけて、意氣地もなく木の幹に腰を下してゐた。何を云つてもこの十日ちかくの間普通(なみ)ならず心身を勞らせてゐた上に今日はまた重ね〳〵不意の出來事に出會して、斯く雨中の路をやゝ暫く歩いて來たので、元來身體の壯健でない彼にとつて斯くなるのも全く無理のない事であつた。

彼は茫然となつた瞳を上げて杳か西の方の空の次第に明るくなつて、雲が斷れて、碧い蒼穹の漸次に廣々と表はるゝのを眺めながら、おもふともなくいつしかまた今日の自分の身に起つて來た事柄を思うてゐた。元來自分は八王子の知人を訪ぬるつもりで宿を出て、汽車に乘つたのであつた。實に途方もない、何で斯んな所を歩かうと思つてゐたであらう、あの忌々しい出來事さへ無かつたならば、もう今頃は夙くに八王子に着いて、あの可懷しい友人夫婦に迎へられて、そしてこの上もない溫かな思ひに滿たされてゐたらうものを、實に何といふ馬鹿らしさ忌々しさを見たものであらう。八王子と云へば今頃はあの親切なこの傘の持主の老婆もほく〳〵して自分を待つてゐやう。實に人の好い親切な老婆であつた。老婆のみならず、あの先刻の一人の工夫はいま如何してゐるだらう。あんな人氣(ひとけ)の絶えた林の中で、自分は實に如何せらるゝことかと思うてゐた。よくも見なかつたけれど鼻の低い醜い顏に溢れてゐた彼の親切は如何しても忘れられぬと、今は早や全くの子供に返つて、他愛もなくいろ〳〵の事を思ひめぐらして、特にこの場合彼は自分にとつて嬉しかつたこと難有かつたことのみに思ひ耽つて、さながら夢見る如くであつた。が、不圖、彼は眼前に迫つて居る自分の歸國を思ひ起した。そしてわれともなくぶる〳〵つと五體を慄はして今までにも覺えのない言ひ難い厭惡の感にうたれたのである。

歸國といふことを思ひ起すと同時に全てのうれしい事可懷しいことは忽ちに跡かたもなく散々に壞

れ去つた。何が故に斯くまで歸國が忌まるゝかは彼自身にも解釋が出來ないのである。が、たゞ譯もなく厭やなので、勿論いろ〳〵厄介な事の多い學校などに出て居るを面白いとも樂しいとも思つてるのでは無いので、東京に留まることに對してもさまで執着心は無いのである。自身の肉身の父に對して、彼は何等可懷しい慕はしいといふやうな情を有つてゐない。寧ろ父といふと何となくそれに反抗して見たく、意地惡く拗ねていぢめて見たいのであるが、露はにはその事も爲し得ないので、たゞ自分一人の胸中に打消しがたく云ひやうのない憎惡の念を宿してゐた。萬事應揚な親切な繼母に對しては父に對するほど複雜な感は抱いてゐなかつたが、矢張りたゞもう嫌ひで、どうしても親しいわが味方の人とは思ひ得なかつた。

捨鉢の氣味で歸國を思ひ決した時にはさまでに覺えなかつた厭惡の情はむら〳〵と果てもなく彼の全身に充ち渡つた。いよ〳〵數日ならずしてあの鄕里に一生を埋むるべく歸らねばならぬ身だと思ふと、一時に全身の血が冷えて行くやうで、齒を嚙みしめて眼を瞑つて、ぶる〳〵と戰慄しながら固くなつてゐた。そして、その反比例に例の知人のこと老婆のこと工夫のことが、解もなく身に沁みて、果ては涙の溢るゝをも覺えずにゐた。

不圖、耳に轟くものがある。疑もなく列車の音響で、彼は矢庭に身を起した。失策つた、遲れたと、忙しく蝙蝠傘を握りながら思はず知らず線路の上に飛び出て見たが、驚くべし、もう直ぐ其處をむく

〳〵と白い黑い濃い煙を上げながら此方をさして走つて來る。彼は眞蒼になつて凝然とそれを見詰めてゐた。そして何を思つたか遽だしくもとの櫟の蔭に身を引いた。顏面の肉は全て緊縮して、殆んど瞳さへ据つてゐたのである。

刻一刻、汽車は近づく、恐ろしい音響はもう其處に來た。線路に添うた四邊の林の大地はゆさ〳〵と搖れ始めた。いよ〳〵といふその時、飜然彼は身を踊らせて、その恐るべき魔物、黑々と煤けて火炎を包んで走つて居る汽關車の前に飛び込んだ。一聲の汽笛は裂くるやうな鋭い響を四邊の平原の上に響かせて列車の進行は停つた。ただ見る、一團の血と肉との散亂、唯だ一本の足の形を人間らしく留めて居る外には顏もなく胴もなく、眼も鼻もなかつた。中沼順三郎は死して、もう永遠にかの蒼白い丈長い身體はこの世に於て見られなくなつたのである。一本の蝙蝠傘も彼と共に微塵になつて横はつてゐた。

雲は次第に東に流れて、水々しい紺碧を表はした西のかた甲州邊の山丘の上には今し秋の夕日が久々に華々しい光を投げた。平原の果て、山麓に近い八王子の町端れなる停車場には、人の好い福々相な一人の老婆が四邊に集つた旅客の讃稱の中に事々しく今日の車内の出來事を繰返して語つてゐた。そして今か〳〵と次回に來るべき列車を待つてゐた。

古い村

自分の故郷は日向國の山奥である。恐しく山岳の重疊した峽間に、紐のやうな細い溪が深く流れて、溪に沿うてほんの僅かばかりの平地がある。その平地の其處此處に二軒三軒とあはれな人家が散在して、木がくれにかすかな煙をあげて居る。自分の生れた家もその中に混つて居るので、白髪ばかりのわが老父母はいまだに健在である。

斯く山深く人煙また極めて疎なるに係らず、わが生れた村の歴史は可なりに古いらしい。矢の根石や曲玉管玉等を採集に來る地方の學者――中學の教師などが旅籠屋の無いまゝによく自分の家に泊つては、そんな話をして聞かせた。平家の殘黨のかくれ棲んだといふ説も或は眞に近い、よく檢べたら必ずその子孫が存在して居るに相違ないとも言つた。斯かる話は斯かる峽間の山村に生れたわが少年の水々しい心を、いやに深く刺戟したものであつた。自分の家は村内一二の舊家を以て自任し、太刀もあり槍もあり、櫃の中には縅の腐れた鎧もある。

自分の八歳九歳のころ、村に一軒の小學校があつた。とある小山の麓に僅かに倒れ殘つた荒屋が卽

ちそれで、茅葺の屋根は剝がれ、壁は壞れて、普通の住宅であつたのを無理に教場らしく間に合せたため、室内には不細工千萬に古柱が幾本も突立つてゐた。先生はこの近くの或る藩士の零落した老人で、自分の父が呼寄せて、郡長の前などをも具合よく繕つて永くその村に勤めさせてゐたものであつた。恐しい酒呑みで頑固屋で、癇癪持ちで、そして極めての好人物であつた。自分は奇妙にこの老人から可愛がられ、淸書がよく出來た本がよく讀めたと云つては、ありもせぬ小道具の中などから子供の好きさうなものを選り出して惜しげもなく自分に呉れてゐた。飲仲間の父に對つてはいつも自分のことを賞めそやして、貴君は少し何だが、御子息はどうして中々のものだ、末恐しい俊童だ、精一杯念入にお育てなさるがいゝ、などと口を極めて煽てるので、人の好い父は全くその氣になつてしまひ、いよいよ甘く自分を育てた。

學校に於ける大立者は常に自分であつた。自身の級の首席なるは勿論のこと、郡長郡視學の來た時などの送迎や挨拶、祝日の祝詞讀みなども上級の者をさしおいて、幼少の矮小の自分が獨りで勤めてゐた。で、自づと其處等に嫉妬猜疑の徒が集り生ぜざるを得ない。そしてその組の長者と推薦せられたのは、矢野初太郎といふ一少年であつた。

初太郎は自分に二歳の年長、級も二級うへであつた。その父は博勞で、博徒で、そして近郷の顔役みたやうなことをも爲てゐた。初太郎はその父とは打つて變つた靜かな順良な少年で、學問も誠によ

く出來た。田舍者に似合はぬ色の白い、一寸見には女の子のやうで身體もあまり强くなかつた。以前は自分もよく彼に馴染んで、無二の親友であつたのだが今云ふ如く自分の反對黨のために推されて、その旗頭の地位に立つに及び小膽者の自分は飜然として彼を忌み憎み、ひそかに罵詈中傷の言辭を送るに忙しかつた。

それやこれやで、初太郎の自分に對する感情も以前の通りであることは出來難くなり、自然自分を白眼視するに至つた。なほそれで止らず、この感情はわが一家と彼の一家との間に關係するに至つた。その頃、博奕で儲けあげて村内屈指の分限であつた初太郎の父は兼ねて自分の父などが、常々「舊家」といふを持出して「なんの博勞風情が！」といふを振廻すのが癪に障つて耐らなかつた所であつたので、この一件が持上るに及び、忽ち本氣になつて力み出した。そして萬事につけ敵愾心を挿むに至つた。小さな村のことではあり、このことは延いて一村内の平和にも關係を及ぼさうかといふ勢になつた。で、當の兩個は全く夢中になつて啀み合はざるを得ない。自分の如きは晝夜戰爭にでも出てゐる氣持で勉强した。殆んどもう何年級などといふことには頓着無く、教科書ばかりでは飽足らず、「少國民」「幼年雜誌」などといふ雜誌をも取寄せて耽讀し、つゆほどの知識をも見逃すまじと備へた。

所が初太郎は突如として、その村の小學校を去つて（彼はその頃、尋常科の補習部にゐた）縣廳所在地の宮崎町の高等小學に轉じた。自分との啀み合ひが無かつたのならば當然彼は土地の尋常科補習

部を卒業したままで、靜かにその山村生活に入るべきであつたのである。

取殘された自分は、さらばといふので舊藩主の城下たる延岡町の高等小學に進んだ。兩個の少年は遠く三十里の平原を距て、尙ほ且つ力み合つてゐたのである。高等小學二年を修業して自分が其土地の中學校へ入つたころは、初太郎は既に中學の二年級であつた。彼の勉强はその地方の評判に上る位ゐになり、勉强狂人と人は評し合つてゐたといふ。勿論自分も勉强した。一時は級の首席をも占領し、可なりに勉强家といふ評判をも取つてゐた。けれどもさういふ時期は極めて短かかつた。中學の二年級の終りの頃からででもあつたらう、嚴格を極めてゐた寄宿舍内の自分の机の抽斗の奥には、歌集「みだれ髪」がかいひそみ、緣の下の乾いた土の中には他人の知らぬ「一葉全集」が埋められてあるやうになつたのは。机に對ふことも極めて少くなり、多くの時間は學校の裏山の木の蔭や、程ちかい海のほとりの砂原で費されるやうになつて了つた。擊劍や野球の稽古に常に小鳥の如く輝いてゐた自分の瞳には日に增し故の無い一種の沈悒を湛へて來た。珍しく机に對つても茫然と考へ込むことが多かつた。

いつの年であつたか、自分は久しく忘れてゐた初太郎の名を新聞で見た。彼が初めから終りまで首席で通して目出たく今回卒業したことを賞讃した報道で、次いで今後直ちに彼は高等學校の醫學部に進むべしと書き添へてあつた。丁度その年のこと、夏になつて自分は休暇で村に歸省した。父母はこ

の一二年前よりの自分の成績の悪くなつたことを口を極めて叱責し、聲をひそめて、初太郎を見ろと言つた。それでもすぐまた續けて、父は微かな冷笑を眼に浮べて、然し、幾ら勉強が出來たところで、あの身體ぢや既う駄目だ、と言ひ足した。母も續いて、それにあゝ廻りがわるくては傳造も息子をば如何することも出來ないだらう、とこれも口の邊で聲を出さずに笑つた。自分は心の中で、初太郎が熊本で高等學校の入學試驗を受けに行つてゐて勉強過度の結果急に血を咯いて、其父の傳造が迎ひに行つてからもう一ヶ月半にもなるといふ話を思ひ起してゐた。なほ聞けば、この一年程以前からあの傳造の賽の目の出が急にわるくなつて、瞬く間に財產の大半をば減つてしまつたとかいふことで、どうせ泡のやうに出來たものだから泡のやうに無くなつて行くのも無理は無からうと、母は父を見遣つて微笑した。その横顏を見てゐて自分は少なからず淺間しく且つ面憎く思はざるを得なかつた。我等自身の家でもその年は血の出るやうな三度目の山賣りを斷行して、辛くも焦眉の急の借財を返した當座では無かつたか。先祖代々が命より大事にして固守し來つた山林田畑を自分等の代になつて賣拂つて、そして「舊家」を誇るといふは少々面の皮が厚過ぎはしないだらうか。斯く思ふと自分はその座の酒さへ耐へがたく不味かつた。

その夏は暮れ、翌年の夏、自分はまた歸村した。初太郎の肺病はやゝ輕くなつてゐて、その頃は折々溪河へ魚釣などにも出て來ることがあつた。或日のこと、自分は我家のすぐ下の瀧のやうになつて

居る長い瀨のほとりの榎の蔭で何か讀書してゐた。日は眞晝、眼前の瀨は日光を受けて銀色に光り、峽間の風は極めて清々しく吹き渡り、細かな榎の枝葉は斷えず靑やかな響を立てゝそよめいてゐた。雲も無い空は峯から峯の輪廓を極めて明瞭に印して、誠に强烈な「夏の靜けさ」に滿ちた日であつた。何を讀んでゐたのであらう、定かには覺えて居らぬ。とにかくしんみりと身も心をも打ち込んで、靜かな感興を放肆にしてゐたに相違ない。所が不圖何ごころなく眼を書物から外すと、すぐ自分の居る對岸に一個の男が佇んで釣竿を動かして居る。注意するまでもなく自分は直ちに彼の初太郎であることを知つた。

なるほど痩せた。特に濡れた白襦袢一枚のぴつたりと身に密着いて、殆んど骨ばかりの人間が岩上に佇んで居るとしか見えない。多く室內にゐて珍しく出かけて來たのであらう、日に炒りつけられた麥藁帽子の蔭の彼の顏は痛々しく蒼白く、微かに紅みが潮してゐるのがなか〳〵に哀れである。彼の特色の大きな黑い瞳ばかりはさして昔に變らず、すが〳〵しく釣竿の一端に注がれてある。重さうに彼は時々兩手でその竿を動かす。竿が動き、糸が動き、糸のさきにつながれて居る囮の鮎まで銀色の水の中から影を表すことがある。いま彼のあはれな全生命は懸つてその竿の一端にあるのだ。暫く見つめて居るうち、一尾の魚が彼の針にかゝつたらしい。彼は忽ち姿勢を頽して、腰から小さな手網を抜きとり、竿を撓ませて身近く魚を引寄せ、終に首尾よく網の中に收めて了つた。そして彼はそれを

靜かに窺き込んで居る。噫、その無心の顏、自分は自分の驗の急に重くなるを感じた。

一尾を釣り得て彼は少なからず安堵したらしく、竿をば石の間に突き立てゝおいて、岩の上に蹲踞んだ。兩手で膀を支へて茫然と光る瀨の水を凝視して居る。自分との間は十間と距つてゐない。けれども榎の根もとの岩蔭の自分は彼の眼には入り難い。餘程起き出でて彼を呼ばうかとも思つたが、彼の姿を見てゐては何とも言へぬ一種の壓迫を感じて急かに聲をも出しがたい。自分は終に默つてゐた。やがて彼はまた立ち上つた。少し所を變へて再び竿を動かしてゐる所へ、その背後の方からまた一人竿を持つて人が來た。傳造である。彼等父子は顏を見合つて莞爾した。そして無言のまゝ竿を並べて瀨に對つた。自分は久しいこと巖蔭の冷たいところへ寢てゐなくてはならなかつた。

その翌年の夏、自分がまた村に歸つた時には初太郎は死んでゐた。或日わざ〳〵前年彼を見た榎の蔭に行つてみた。同じく晴れた日で、風は冴え瀨は光つてゐたけれども、既にその時は如何に力めても、其處の岩上に佇みし彼、曾て自分同樣に此所等に生息してゐた彼、及び現に空冥界を異にしてゐる彼を切實に思ひ浮べることは出來なかつた。彼は死んだ、彼は死んだと徒らに思つたのみで。

不幸は靜かな湖面に石を投げたやうなものであらう、一點から起つて次第に四邊に同じ波紋を擴けて行く。初太郎の死後幾日ならずして彼の父は博奕のことから仲間を傷けて、牢屋に送られたのみならずその入獄の際には彼は烈しい眼病をわづらつてゐたとのことである。これらの話を話す時は、流

石にわが母も笑はなかつた。自分の家でも父の手を出してゐた二三の鑛山事業がいよ〳〵失敗と定まつたので、また近々に大決斷で殘部の山や畑を賣拂はねばならぬことになつてゐたのである。萬事につけ父も母ももう人の惡口を言ふたり笑つたりしてゐる餘裕などはかりそめにも失くなつてゐたのだ。自然無言勝ちになつた父母の顏には汚い白髮が、けば〳〵しく眼に立つて來た。

その翌春、自分は中學を卒業すると同時にひそかに鄕國を逃げ出して東京へ出て、或る私立學校の文學科に入つて了つた。卒業前、父はわざ〳〵村から自分を中學の寄宿舍まで訪ねて來て、いつもに似ず悄然と、何卒この場合精神を堅固にして迷はぬやうに心がけて吳れと寧ろ哀訴するやうに自分に注意した。迷はぬやうにとは、父はかねて自分を直實な醫者にするつもりであり、自分は文學をやると言ひ張つて、久しく言ひ合つてゐたのであつたが、終に自分は內心策をかまへて、表面だけ父の意に從ふやうに曾つて誓つたことがあつたので、何卒その誓ひを完うして吳れといふのである。けれども自分は終にこの老いたる父に反いた。四月六日の夜、細島港を出帆する汽船某丸の甲板に佇んで、離れゆく日向の土地を眺めやつた時、自分は欄を摑んで、父の顏を思ひやつた。

三年目に自分は重い病氣にかゝり父母から招かれて國へ歸つた。二階のお寺のやうな廣い冷たい座敷に寢て居ると、溪を越して小高く圓い丘に眞靑に麻の茂つて居るのが見える。其丘は二三年前まで松や檜の鬱蒼と茂つてゐた所である。その森は父より三代目以前の人とかゞ植ゑ始めたものだと傳へ

られてゐた。森をめぐつて深い溪がある。丁度我家から見れば淵は青く瀨は白く、ずうつと森を取卷いてゐるやうに見えて、その邊一帶が大きな自然のまゝの庭園ともなつて居るし、朝夕斯う見馴れては他の處と違つてどうしても手離しがたい、こればかりはどうとかして賣らずに置きませうと家中皆が話し合つて居たその森もとうとう斯んな青い畑になつて了つた。よく見れば麻畑の隅の方に粟らしいものが作つてある。もうよく實つてゐると見えて、うす黄に色づいたその畑中に男が一人女が二人、眞晝の日光を浴びてせつせとそれを刈つて居る。唄もうたはず、鎌のみが時々ぴか〳〵と光る。

或日のこと、母が幼い子供を抱いて笑ひながら二階に上つて來た。不思議に思つて見て居ると、母は自分の枕もとに坐つて、その子を自分の方に押し向けて、なほ笑つて居る。田舍者の產んだらしくもない可愛らしい男の子だ。

『何處の子です』

と訊くと、

『それ、あの初さんのだよ』

といふ。自分は驚いた。いつの間に初太郎は斯んなのを產へておいたのであらう。聞けば彼の病氣の烈しかつた時一生懸命になつて彼を看護した彼の家の下女が是を產んだのだ相だ。彼女は初めはどうしても誰の子であると言はなかつたさうだが、幾月も經つてからとうとう打明けて了つたといふ。

何故かくしておいたかと訊いたら、肺病人の子と知れたらとても眞人間扱ひはせられないだらうと思つたからだと答へるので、それなら何故ずつと隱し通さなかつたと重ねて訊くと、日が經つに從つて段々死んだ人に似て來るからだと言つた相だ。初太郎は自身の子を見ずに死に、勿論子は永久にその父を知らない。自分は急に逢ひたくなつて用事に來て居るといふその子の母を見に下に降りて行つた。色こそ可なりに白けれ、頰骨の太い眉の太い鼻の小さな唇の厚い、夥しく醜い女である。けれども心はいかにも好いらしく、一寸見たゞけでも自分もこの女を可愛く思つた。今は半分盲目のその子の祖父に仕へて羨しいほど仲睦じく暮して居るといふ。自分はその子を抱いてみた。割合ませた口を利く。なるほど見れば見るほど氣味のわるいまで亡き友に酷似して居る。自分の心の奥にはあり〳〵と故人の寂しい面影が映つてゐた。

自分の病氣は二ヶ月あまりで辛くも快くなつた。それを待つて暇を告げて自分は鄕里を去つた。いよ〳〵明日出立するといふ前の晩、兩人の親と一人の子とは、臺所に近い小座敷で向き合つて他人入らずの酒を酌んだ。そのころ、山の深い所だけにこゝらの天地には既う秋が立つてゐた。言葉數も少く、杯も一向に逸まぬ。座の一方の洋燈には冷やかに風が搖いで居る。此ごろでは少し飲めばすぐに醉ふやうになつてゐる父が、その夜は更に醉はない。

『お前、一體そのお前の學校を卒業すると何になれるのだとか云つたな』

暫く何か考へてゐて彼は斯う問ひかけた。

『左樣ですね、まァ新聞記者とか中學校の敎師とかでせう』

『すると何かい、月給でいふとどの位ゐ貰へるのかい』

自分は窮した。まさかD氏が何新聞で二十二圓、S氏が何中學で二十五圓貰つて居ると、自分の先輩の先例を引くわけにも行かなかつた。自分の默つて居るのをじろ〳〵と見てゐて、

『せめて五十圓も取れるのかい』

『え、まァ確かにとは言へませんがね……それに何です、私はそんな者にならうとは思つてゐませんのですから……』

『そんな者つて……では。一體何になるのや』

『文學……純文學を目下研究してゐますので……』

とは言ひかけたが、是にも窮つた。如何してもこの髮の白い人に向つて、私は詩人になるのです、小說家になるのです、とは言ひ得なかつた。

母も常に不安の眼をおど〳〵させて自分等の話を聽いてゐたが、自分がいよ〳〵答へに困つて來るのを見ると、

『とにかく何かになつて呉れるのだらうね、お前のことだからまさかのこともあるまいと思つて、まァ安心はして待つてゐるよ。家もお前、毎年々々斯んな風になつてゆくのでね、阿父さんも急に老けたし、今まで通りの働きも無くなつたしね、まァほんとにお前、夜も晝も心配の絕えたといふことは無いんだから、たゞもうお前一人が賴みでね……』

母の愚痴は長かつた。常には大の愚痴嫌ひの父もその夜はたゞ母の言ふがまゝに任せた。その間自分はつとめて他のことを心に思ひ浮べてゐたが、それでもいつしかいかにも胸が遣瀨なくなつて、つめたい涙は自然に頰を傳つて來る。膝を兩手で抱いて、身を反して開け放した窓さきの樹木に日光の流れてゐるのを拭ひもせぬ眼で見つめて居ると、母もいつしか語を止めてゐた。

自分の村を出はづれたところに、大きな河が流れて居る。其處を渡舟で渡ると、道はやゝ長いことの上り坂になつて居る。その坂の中ほどで自分は久しぶりに傳造に出會つた。黑い眼鏡をかけて、酷くやつれてゐたけれど、自分にはすぐ解つた。一も二もなく自分は歩み寄つて言葉をかけた。彼はもう誰だか少しも覺えが無い。見えない眼を切りに働かせて見定めようとする。

『僕ですよ、私ですよ、田口の藤太ですよ』

と押しかけて言ふと、初めて合點が行つたらしく、

『ほう左樣ですけねえ』

自分が改めて初太郎のくやみを述べると、それには殆んど返事もせず、何處へおいでなさると訊く。

また東京へ行つて來ますと答へると、へえと言ひながら懷中へ兩手を入れてやがて紙にひねつて、ほんの草鞋錢だが持つて行つて呉れとさし出した。自分はうれしく頂いて袂に入れて、何かまだ話し出さうとすると、彼はすぐ一人でお辭儀をしてとぼ〳〵と坂下の方に降りて行つた。

自分はその次の驛から馬車に乘つた。思ひ出して袂から先刻のひねりを取出して見ると、五十錢銀貨が三枚包んであつた。

裾野

その日の夕方、清二はいつものやうに二階の手術室にこつそり入り込んでゐた。そして金屬製の冷たい椅子に腰を掛けながら、懷中から取り出した書籍を膝の上で開いてみたり、微かな足音をもさせないやうに五歩十歩と歩いてみたり、または長く垂れた白い帷布の裾を僅かにめくりながら拭き込んだ硝子窓に顏を寄せて次第に明るく暮れてゐく裾野の夕日を眺めたりしてゐた。

窓の直ぐ下の廣い庭には、丁度院長の子供たちが三人して林檎の實を落してゐた。もと北國街道の稍重要な宿場であつたこのK町で御本陣といへば附近で誰知らぬ者もなかつた大きな宿屋の建物の其處此處に手を入れて病院の形とした院長は、泉水築山の庭をつぶして一面に柿や林檎や、またはその周圍に籬がはりに落葉松などを植ゑ込んだ。柿は實も葉も薄く色づいてゐるが、粒の小さい肉の硬いこの地方の林檎は熟しても尙ほ青いまゝであつた。この小さな果樹園の一部には鞦韆や遊動圓木やが設けられ、共同椅子も二三ヶ所に置いてあつた。

硝子を通して清二自身の顏も染るほどに窓の正面に當るA――火山の頂上にはいま眞赤な夕燒雲が

懸つてゐた。雲の上には時を置いて噴き出す噴煙が圓々と凝つて同じく夕日に染りながら幾つか續いて昇つてゐた。穩かな傾斜を引いて右に左に流れ出てゐる廣々した裾野には、森林帶にも、それに續いた草原にも、またはずつと下方の田畑の邊にも、靜かに夕日がさしてゐた。

庭の子供の叫び聲や、階下の藥局の笑ひ聲がをり〳〵厚い硝子を通して耳に入つて來るほかには、三方の窓の附いたこの明るい室内に蟋ひとつ鳴いてゐない。椅子、卓子、手術臺、硝子戸越しに光つてゐる戸棚の中の種々な機械、さうした箇々のものからも自づと冷たさを放つてゐるやうで、あれを眺めこれを見廻してゐるうちに、清二は自分の四肢五體の引き締められるやうな寂寥を感ぜずには居られなかつた。

彼はそれが好きであつた。で、嚴しい院長が塵の入るのを厭つて平常は醫員にすら出入を許して居らぬこの二階の手術室にいつもこつそりと忍び込んで、空しい、靜かな時間を過すのを常としてゐた。この病院の副院長を務めてゐる友人を賴つて彼がこの二階の一室に寢起きするやうになつてから既に二月あまり經つてゐた。いつの間にか秋風が立つて柿や落葉松の葉などが次第に散り始めた此頃では別してもこの室内の冷たさ寂しさが可懷しく身に浸みた。かすかに眼や鼻を刺して來る藥品の匂ひすら、何となく親しいものに思はれてならなかつた。

一面には山師だなどといふ評判をとりながらも、田舍には珍しい進取的な、研究好きな此處の院長

はわざ〳〵斯んな室を設けて、をり〳〵腹部切開や手足の切斷など、土地不相應の治療を行ふことはあつたが、それは極めて稀で、普通の小手術をば階下の診療室で行つてゐた。で、殆んどこの室は常に空いたまゝで、毎日のやうに入り込んでゐる清二も、いまだ曾て人に見咎められたことはなかつた。

椅子に凭つて輕く眼を瞑つてゐると、書籍の重みとその上に重ねた双手の重みとの膝に傳はつてゆくのがはつきり解るほど、彼は例によつて氣味の惡い自分の身體の疲勞を意識してゐた。一種の自暴自棄から——何も彼もその時の自分の現在に對する激しい嫌惡の情から、急に持ちくづした不身持のため、今まで新聞雜誌の賣藥の廣告を見てすら眉を顰めてゐた不潔な病毒に冒されて以來彼は打つて變つた陰鬱の性質となつた。そして朝夕顏を合せてゐた友人達に逢ふのも不快で、折角面白くなりかけてゐた新聞社の職業をもうち捨て、總てに隱れて彼は遙々東京からこの田舍の友人の許にやつて來たのであつた。東京に居た時、隱し度い一方から永い間醫者にも診せずにおいたゝめ、病毒はもう餘程深く身體に喰ひ入つてゐた。で、二月餘りも此處の友人の治療を受けながらまだ一向はかゞ〳〵しい效果も見えなかつた。斯うした身體の衰弱と共に彼は自分の心の次第に荒んで行くのをも感じてゐた。益々陰鬱になり、絶望的になつてゆくのが眼に見えて解つてゐた。知る知らぬに拘らず人の顏を見るのが厭で、晝間は多く附近の林や野原に出て時間をつぶし、夜は日が暮れると直ぐ灯を消して床に入つた。この靜かな手術室の好きなのも一つは其處から來てゐた。そして、眼を瞑つて何も思ふまいと

努むる下から、如何しても落ち著かぬ、焦燥した心持が、直ぐ頭を擡げて來るのが常であつた。

その日はそれでも平常より餘程靜かな心持で居ることが出來たので、彼は椅子に凭れたまゝ讀みさしの書物をやゝ興深く讀み續けてゐた。そして、夕燒雲が次第に褪せて、室内の暗くなつたのに氣がついても、尙ほその室を出やうとしなかつた。

不圖彼は何處かで自分の名の呼ばれてゐるのに氣がついた。わざと默つて耳を澄ませてゐると、階下から二階の自分の室へ呼んで廻つて、居ない〳〵と騷いでゐる。餘程このまゝ默つて了はうかと考へたが、何だか何時もと違つた調子のやうにも聞きなされたので、彼は何といふことなく胸を波立たせながら、ひそかに手術室を出た。そして、冷たい暗い階子段を降りて行つた。

彼の姿を見出すや否や、其處に立つてゐた藥局の書生は惶しく呼びかけた。

『アッ、木崎さん、何處にゐました、電話ですよ、東京から長距離です！』

彼は忽ちはつと思つた。東京から長距離、一體如何した事だらうと、其處に立ち止つたまゝ眼を見張つた。

『速くなさい、先刻から探してたんです！』

叱りつけるやうに怒鳴つて、書生は電話室を指さした。

電話室では、また、けたゝましく鈴が鳴り續いた。

呆氣に取られておど〳〵しながら受話器を耳に當てた清二の聲は、初め咽喉につまつて能く言葉を成さなかつた。この町の交換局と東京らしい交換局との間に二三度交換手の問答が取り換はされて、彼は漸く對手の聲を聞いた。太く濁つた、男の聲であつた。

『貴郎は木崎さんですか、木崎さんですか……。』

と繰り返して訊いておいて、一段聲を改めて、

『糸子さん、出ましたよ！』

と叫んだ。

清二は再びぎよつとした。糸子とはこの五六ヶ月間顏をも合はせない彼の情人の名であつた。彼は數多度び唾を呑み込んで一層強く受話器を押し當てた。

『もし〳〵、貴郎は木崎さんで被居つしやいますか、……わたし、誰だか解つて？』

紛ひもない糸子の聲である。

『僕です、僕です、如何したんです、あなたは！』

狼狽へ切つた清二の聲は、まるで眼の前に居る者を叱り飛ばすやうな調子であつた。眞實、何といふことなく彼女の聲を聞くと同時に、彼は狼狽へながらも既に抑へ難い一種の憎惡を覺えてゐたのである。

何十里かの距離を距て、聞えて來る女の聲にも忍び兼ねた憤怒の調子があつた。たび〳〵混線したり、途切れたりして、疳高に澄んだ彼女の聲も完全には通じなかつた。況して清二の聲など、殆んど向うに聞えぬ場合が多かつた。清二はます〳〵焦れて、果ては間々に口を出す交換手をまで叱りつけた。

彼女は何でそんな所へ行つてゐるのかと責め問うた。行くなら行くで何故その事を知らして置かなかつた、行つた先まで隱す必要はあるまいとも責めた。そして、急に話し度い用事が出來たから直ぐ歸京して貰ひ度いと言ひ足した。

清二は言下に歸ることは出來ぬと言ひ切つた。そして一體今になつて何の用事があるのだと反問した。よしまた用事があるにしても手紙で濟みさうなものを何故斯んな仰々しい電話などを懸けてよこすのだ。第一いま何處に居るのですと責め問うた。女はそれには答へないで、歸られぬなら歸られぬでいゝから今夜にも此方を立つて妾が訪ねて行く、停車場に出てゐて呉れ、と言ひ切るなり直ぐ電話を切つてしまつた。惶てゝ清二は把手を廻したが、既う甲斐が無かつた。

ほんとに何處の家から懸けてよこしたのだらうと思ひながら、ぼんやり電話室を出やうとすると額も背も汗びつしよりになつてゐることに氣がついた。と同時に再びかつと顏のほてるのを覺えた。

額や顏を撫で廻しながら廊下に出ると、果して其處には友人の醫者と二人の看護婦が笑ひながら此方を見詰めて立つてゐた。

友人は直ぐ聲をかけた。

『如何したのです、誰です？』

『うゝん、つまらぬ事です！』

僅かに斯う答へてさらぬげに其處に立ち止つたが、汗は更に滲みやまなかつた。

まさかとは思つたが、昨夜のはつきりした口調といひ、あれから九時か十時に東京の停車場を立つ夜行でこちらに朝の六時に著く汽車のあることをも思ひ出したので、兎も角もと清二は頃を計つて停車場へ出かけて行つた。公然と待合所には入らないで、改札口から五六間離れて石炭屑や材木の山積してある蔭に佇みながら汽車の著くのを待つた。

うすら寒い朝で、附近に遊んでゐる子守どもは、各自の息の白くなつて出るのを珍しがつてゐた。鐵道線路を越えて向うの城址の松木立に混つた何やらの木が眞黃に黃葉してゐるのなども、今朝は何やら眼立つて眺められた。

程なく薄霧の殘つてゐる廣い野原の向うから煙をむく〳〵吐き立てゝ汽車が走つて來た。そしてつい清二の眼の前に來て停るや否や、それ〴〵の扉をあけていろ〳〵の旅客が降り立つた。波立つ心を抑へて清二はそれらの人々に油斷なく注目してゐたが、總てが改札口を出終つて了ふまで、終にそれ

らしい人は發見されなかつた。そのうち、汽車はまた笛を鳴らして動き出した。

『やつぱり來なかつたな！』

底の拔けたやうな苦笑を覺えながら、斯う思ひ諦めて清二は材木の蔭から歩き出した。まだ朝飯も喰つてゐないのだが、何だか直ぐ病院に歸り度くなかつたので、彼は懷中(ふところで)手をしたまゝぶら〳〵其處の踏切を越えて、城址の林の中に歩み入つた。

其處は公園といふわけになつてゐるのだが、殆んど平常手を入れてないので、大きな松や樺や山櫻やその下に生ひ茂つた雜草など、まるで荒い自然のまゝの林であつた。徑には種々の樹木の落葉がいつぱいに散り布いて、雨の後のやうに濡れてゐた。樫鳥がけたゝましい聲で啼き立てながら、同じく濡れたやうな大きな梢から梢の間を飛んでゐた。

清二は林の奥の神社や茶店などの建つてゐる方には行かないで、大きな古石垣の蔭に沿うて、一面に落葉松の植ゑ込んである川岸の方へ歩いて行つた。足も下駄も衣服の裾も直ぐ草の露でびつしよりになつたが、馴れてゐるので氣にもかけず、幾らか歩調を速めて行くと、五六分間もかゝらぬうち、いつも來馴れた、靜かな林の中に入ることが出來た。

幾年間か散り積つた柔かな落葉の上に立つと、いつものやうに可懷しい川瀨の音が忽ち清二の身を包んだ。濃く植ゑ込まれた林の直ぐ傍は切り落したやうな斷崖となつてゐて、その下をC——河が青

々と流れてゐるのである。遙か上の方から白々と大きな瀨になつて泡立ちながら流れて來たC——河は丁度この落葉松林の下に來て、其處の斷崖に突き當ると共に深い淵となつて折れ曲つてゐるのである。清二が好んで腰を下す木蔭からはこの長い瀨も青い淵も共によく細かな木立を透して見下された。この瀨も淵も木立も、この頃の清二にとつては殆んど毎日見ずに過すことの出來ない程親しいものとなつてゐた。

彼は漸く自分の來べき所へ來たやうな豐かな氣になつて、其處につき坐つた。そして急いで煙草を取り出して火を點けたが、朝早いせゐか、四邊に滿ちた瀨の音が今日は常よりも荒いやうに聞きなされて、ぢいつと其處らが見廻はされた。

『それにしても何故今頃になつてあんな事を云つてよこしたのだらう。』

心がやゝ落ち著くとまた昨夜來の疑問が彼の胸に繰返された。用事と云つても、別にこれといつて思ひ當ることはなかつた。別れよう、別れませうとお互に本氣になつて言ひ合つてから確かに六ヶ月は經つてゐる、その間それこそ葉書一枚やりとりしなかつた。それが今になつて突然あゝいふことを、しかも斯んな離れた所へまでも云つて來やうとは眞實(まつたく)意外である。彼は正直この永い間忘るゝともなく、彼女のことをば忘れてゐた。寧ろ醜い恐しいものででもあるやうに自分の心が彼女に觸れて行くことを忌み厭つてゐた。そして當然彼女自身もまたさうであらうとばかり思つてゐた。

『それが今になつて……。』

幾ら考へても解らなかつた。

『そのくせ、來ると云つといて來もしないぢァないか！』

彼は何けなく顔をくづして微笑した。

が、突然何かに烈しく突き當られたかの樣に彼はぎょつとした。

『若しや？』

でも、まさかそれほどまでに彼女が大膽に、惡辣になつて居やうとは、清二には信ぜられなかつた。

然し、昨日の電話で最初自分を呼び出しておいて糸子を招いたのは確かに大野の聲であつた。最初は解らなかつたが、どうしてこの病院に自分の居ることが、また病院に長距離電話の懸つてゐることが解つたらうと思ひ訝つてゐるうちに思ひ出したのは大野のことであつた。それと同時に最初の電話の聲が思ひ合はされたのであつた。

すると、いよ〳〵糸子は今は大野と一緒になつて自分を愚弄してゐるのだらうかと思つた時、清二は見る〳〵眼の前の昏くなつてゆくのを感じた。そして全身の力を集めてそれに耐へようとした。

永い間、痙攣られたやうに彼は自分の兩眼を見開くことが出來なかつた、眼前には大野の顔が見え糸子が見えた。否、何といふことなく一團となつたものが彼の面前に渦を卷いて起つてゐた。彼はひ

つしと五體を縮めて、その渦を打ち壞すかの樣に、そのまゝ其處に倒れてしまつた。

立ち並んだ木の間に斜めに射し入る秋の朝日が其處に犬の死骸のやうに轉つた清二の身體を包んで朗らかに照つてゐた。黄葉した落葉松の細かな葉は斷間なく散り續いて、風もない靜かな日なのに、瀨の音は遠くなり近くなりして斷えず清二の耳に通つてゐた。二十分か三十分間も經つたころ、彼は漸く半身を起した。そして硬張つたやうな自分の顔を數多度び撫で摩りながら、故らのやうに大きな口を開いて欠伸をした。

どうでも可い。如何なつたところで現在の俺に何の交渉があるものか。何のために俺はいまあんなに昂奮したのだらうと思ひ出した時は、彼は懶い、寧ろ快いやうな疲勞を覺えてゐた。

『事は既に過ぎ去つてゐるのだ。何もそれに對して俺が責任を負はねばならぬ義理はない。無論資格も無い。早い話が何の未練も糸瓜も俺はもう持つてゐないぢァないか。』

ともすれば此頃の彼に起りがちな捨鉢な氣分はいつともなく彼を襲うて來てゐるのであつた。そしてそれが彼の胸を輕くした。何か度外れた大きな聲でも出して見たいやうな氣のするのを抑へて、彼は再び其處にごろりと横になつた。そして伸び〳〵と仰向けになりながら、明るい日光のなかにほろ〳〵と散つてゐるこまかい木の葉を眺めてゐた。點けたまゝで吸はうともせぬ煙草はやゝ暫くの間彼

の指さきに細い煙を立てゝゐた。

さうしてゐるうちに彼は耐へ難いほど睡くなつて來た。昨夜も電話のことでよく睡らなかつた上、いまの激しい昂奮の後の疲勞から、ともすれば他愛なく瞼は合はうとするのであつたが、流石にうすら寒いその日の溫度と、病氣であるといふ考へとは容易に安心して彼を睡らせなかつた。そして、さう斯うしながらうと〳〵としてゐる間に彼の頭にはいつの間にやらまた薄すらと彼女の影が來て宿つてゐた。今はもう昨日の電話の事とは全く關係の無い、すべての現在とも切り離された二三年前の、或は一二年前の美しい彼女であつた。

三年前の夏季休暇を清二は東京から五六時間の汽船と二三時間の馬車とで行ける或る海岸で過した事があつた。そして始め二三日のうち、珍しいに任せて朝も夕も殆んど浪に浸り續けになつて泳いでゐたが、彼の泳いでゐるのを見附けるとツィ濱續きの家から飛び出して來て一緒になつて泳ぐ十四五歳の少年がゐた。あまり交通の便利でない邊鄙なその海岸へは、夏になつても避暑などに出かけてゆく人が極めて稀なので、一目見ても東京者だと解るこの少年を彼は親しいものに眺めてゐた。少年の方でも亦さうであつた。そしてすぐ口をきゝ合ふ仲になつた。その間に清二はこの少年が東京の或る中學の生徒であること病氣で永い間此處に轉地して來てゐる姉の許にいま泳ぎに來てゐることなどを聞き知つた。そして、或日泳ぎの歸りに少年に引つ張られて彼の宿に寄つたが初めてその時自分と同年

位ゐのその姉を見たのであつた。そして、その美しいのに驚いた。

永い間海岸に轉地して來てゐるといふだけでも推せられたが、清二は一目見て、その人の病氣の種類を知つた。如何にもその病氣特有の血色の好い、瘦せてすらりとした女であつた。どうかした拍子には險があるとも言ひ度い位ゐ明るいぱつちりした瞳と云ひ、締つた脣元といひ、暫く話してゐる間にも直ぐ解るほど、氣性の勝つた女であることをも思つた。

この日を初めに三度に一度、五度に一度は泳ぎの往復に彼等姉弟の部屋を訪ねたが、然し清二は殆んど極端にその病氣を恐れてゐた。叔父が最初で、三人の從兄弟が將棊倒しにばた〳〵と死んで行つたのもその病氣であつた。親しい友人がそのために藻掻きに藻掻いて倒れたのをも見てゐた。で、訪ねて寄るには寄つても上へは上らず、漁師の家の狹い緣側に腰を掛けて十分か十五分話してゆくだけに留めて置いた。姉は直ぐ清二の心を覺つて、これは宿のを借りたのですから大丈夫ですよと言ひながら唯つた一つだけ眞黑な、大きな茶呑茶碗を奥から持つて來たりした。さうした、まるでずつと年下の者に對するやうな態度まで清二には苦々しく思はれたのであつたが、その頃折々雜誌などに發表してゐた彼自身の作品——多くは短い詩歌であつた——を彼女が讀んでゐたことなどが解つてから、次第に談話が親しくなつた、別に作るといふではないが永い間の病氣の徒然から彼女はさうした文學物や雜誌類を貪り讀んでゐたので、清二がどんな學校に居ることも、その關係してゐる雜誌の事など

もほゞ知つてゐたのだ。さうして一週間か十日かも經つころには、やゝ濱から離れた山際の寺の一室に彼女自身清二を訪ねて來るやうになつた。青い苔の著いた四五本の老松の蔭を歸つてゆく浴衣がけのうしろ姿を、つくゞ〳〵美しいと見送ることはあつたが、それ以上には露ほども清二の心は動かなかつた。第一、矢張り病氣が恐かつた。彼女の去つた後の室の障子をば特に悉く開け放つたりすることもあつた。彼女はまた彼女で、清二を訪ぬるごとに自分自身の綺麗な茶呑茶碗を袂に入れて來てゐた。揶揄ふやうな媚びるやうな科をして其小さな茶碗を取り出す彼女を見る毎に美しいとも思ひ、面憎いとも思つた。

……。清二はさうした追懷を繰返す毎に、當時の彼女の美しかつたことを思ひ浮べると同時に、當時の自身の如何ばかり幼い清い心を持つた青年であつたかに常に思ひ當つた。そして、錐で刺されるやうな苦痛を感じた。

そのうちにその漁村の子供や女どもの間に彼等兩人の間にさも〳〵事ありげな評判が立てられた。清二は唯だ苦笑したゞけで別に氣にも懸けなかつたが、それでも可なり五月蠅くもあり、腹も立つた。で、泳ぎにも飽いてゐたし、よし行くにしても道を變へて濱へ出たりした。女の訪ねて來るのも自然稀になつた。休暇が終りかけると、清二は豫定よりも早くその海岸から引き上げた。それから間も無くであつた。清二と彼女との間にしげ〳〵と手紙のやりとりせられるやうになつたのは。

眞實清二は面と向つて話してゐる彼女よりも、細々と書いた彼女の手紙の爲に餘計心を動かされた。彼女の父は夙くに亡くなつて、殘つてゐる母は繼母であつた。肉親の兄が或る小さな銀行に務めてゐること、いつぞやの弟は腹違ひであること、如何したものか幼い時から兄とは敵同志のやうに氣が合はないで唯だ一人自分に仲好くして呉れるのは彼の幼い弟だけであることなどを清二は彼女の手紙によつて知つた、自然自宅にゐても面白くないので、一時激しかつた病氣をいゝことに自分から好んで斯んなところに來てはゐるが、貴郎の思つて居るほど自分の病氣は重くはないとも書いてあつた。母や兄は私の斯うしてゐるのを結句いゝことにして、一向構ひつけて呉れないとも書いてあつた。此處に移つて二年にもなるがこの夏初めて此處に居た幸福を感じたとも書いてあつた。今までは如何なりとなる儘になれと捨てゝおいた自分の身體であつたが此頃になつて急に自分ながら可愛くなつた。是非もう一度普通の身體に返らねばならぬと思ひ立つてゐるとも書いてあつた。何時の間にやら私は齡を取つてゐた。それを思ふと口惜しくて涙が留度もなく流れる。それでも私はまだ全然の娘でゐるのだとも書いてあつた。私の態度の粗々しいのは全く境遇と病氣のためである。若しこれが貴郎の眼に著いてゐたらば見逃して呉れ、私はいつでもこれを改めることが出來るのだとも書いてあつた。

學校から歸つて來ると殆んど毎日のやうに斯うした手紙が机の上に清二を待つてゐた。それを見るごとに、痛いものにでも觸るやうに清二は初めは容易に封をもよう切らなかつた。臆病な、そして口

でこそ彼此言つてゐるもの、曾つて女と云ふもの、眞性に接したことのない彼にとつては、斯うした強い調子の手紙は却つて打ち解け難い恐怖を伴つて感ぜられた。で、夫等に對する清二の返事は如何にもおど〳〵した、煮え切らぬものばかりであつた。

が、さういふうちにも清二の心は次第に彼女に捉へられて行つた。秋が過ぎ冬になつた。冬期休暇が近づいて來ると、彼女の手紙には必ずもう一度この海岸の冬を見に來るやうにと種々の勸誘の言葉が繰返し認めてあつた。行くともつかず、行かぬとも定らぬうちに十二月の或る朝、清二はT――港行きの汽船に乘つてゐたのである。

暖い海岸にはまだ春も立たないのに椿が咲き、梅が咲き、黄な菜の花も咲いてゐた。或る日の午後兩人(ふたり)は村端れの松林まで散歩に行かうと連れ立つて寺を出た。そしてぶら〳〵砂深い道路を歩いてゐると、路傍の小料理屋に土地の小學校の教員たちが忘年會とでも云ふのであらう、五六人寄つて飲んでゐたが、その前を通りかゝつた兩人を見るや否や、一度にどつと聲を上げて笑ひ出した。中には露骨な言葉で、かさに懸つて嘲罵する者などもゐた。臆病で、癇性な清二はそれを聞くと既うかつとなつて眼さきが眩みさうであつたが、それでも默つて、振り向きもせずに其處を通り過ぎた。彼女も何とも言はなかつた。そして、曾て來たことのある松林の奥の浪打際に行くまで、兩人とも終(つひ)に一言をも發しなかつた。

其處まで行くと清二は立ち止つたが、まだ昂奮し切つた顔をして默つてゐた。彼女は清二の側に近づくと、伏目に彼の顔を見上げて、おど〳〵しながら口を切つた。

『……、どんなにかお腹が立つたでせう？』

清二は言下に答へた。

『い、え、ちつとも！』

と言つておいて直ぐ附け加へた。

『却つて非常に快い氣持でした！』

『まア！』

彼女は眞紅な顔を擧げた。

『眞實(ほんと)ですか？』

『眞實ですとも、……貴女(あなた)は？』

『まア！』

と再び繰返した時には彼女はその身體を投げるやうにして清二に縋り附いた。清二はそれをしつかと抱き留めると共に彼女の豐かな鬢の中にその熱い顔を埋めた。

『……、あの時初めて俺は彼の女の身體に手が觸れたのであつた。』と清二は醉つた者のやうに半

身を起して其處の落葉松の幹に身を寄せた。

あれは一月の十三日であつた。夙うに休暇は切れたのでその日の午後いよいよ彼はその漁村を去ることにした。するとその日になつて突然彼女も歸ると言ひ出した。驚いて押し留めたが、なか〳〵に聞かないので、怪しく騷ぎ立つ心を強ひて抑へながら清二は彼女と共にT――港まで馬車に乘つた。その夜の夜航で東京へ立つ積りであつたのだ。松原の事があつて以來、打ち解けたやうで却つてその間に深い距りの出來たのを彼等は感じてゐた。そして、其後二日ほどは顏をも合はせずにゐたし、逢つても妙に話が彈まなかつた。特に清二はさうであつた。さうした素振の自分を時々ぢいつと見詰むる女の瞳を思ふと彼は何とも云へぬ苦しい思ひに身を責めてゐた。

數限りなく漁火の浮いたT――港の海はその夜とりわけても春らしく凪いでゐた。それを宿屋の二階から默つて眺めながら、互ひに心を推し合つてゐたのであつたが、終に彼等はその夜の夜航に乘らなかつた。そして、その夜初めて清二は彼女が燃え立つやうな派手な長襦袢一枚になつて直ぐ自分に隣つた床に入るのを見たのであつた。續いて二日、三日、彼等はその二階から惱ましい早春の海を眺め暮したのである。

東京での密會はなか〳〵容易でなかつた。特に母や兄や弟の眼を盜まねばならぬ彼女の苦勞は尙ほ一層であつた。

……、あの日の事、彼處の事、とひとつ〳〵まじ〳〵と思ひ起して來ると、清二はもうぢつとしてゐることが出來なかつた。ふら〳〵と落葉松の幹を離れて立ち上ると、脫いだ下駄をも履かないで木から木の間を縫つて音をも立てないやうに歩き出した。

『が、……。』

彼は思つた。

若し自分等の戀の間に幸福といふものがあるとしたら、然うして苦しんで逢引をしてゐたあの二三ケ月間に過ぎない、と。

實際、T――港の夜以來、清二もすつかり度胸をきめてしまつた。といふより、生れて初めてさうした心持を知り、女といふものを知つたのである。無論もうさうなれば病氣も何も眼中には無かつた。彼女は卽ち自分、自分は彼女、而してこの戀を成就するためには如何なる努力、如何なる犧牲をも捧げねばならないと一途に思ひ昂つた心の裡には微塵の曇りも無かつたのである。彼女だとて亦た然うであつた。斯うした兩人の出會つた時、其處には唯だいつしんに燃え入つた歡喜の焰があるばかりであつたのである。

斯うした間に彼女の健康はめき〳〵と恢復して來た。そして、それと共に突然頭を擡げたのは夙うから起りかけてゐた彼女の結婚問題であつた。

その話を彼女の手紙で知ると同時に彼は嗤嗟の思ひ附きから直ぐ一通の手紙を認め、書留郵便にして彼女の兄に宛てゝ送り出した。先づ彼女と自分との間を打ち明け、さうした不始末を詫び、自分の地位や性質をも明らさまに告げた後、兩人に結婚を許して欲しいことを書いた。尙ほこれは相當の地位ある人を介して申込むが普通であるが、それはたゞ形式に過ぎないし、今の場合心も急くのであとへず不躾にも斯う直接にお願ひすると書き加へた。

返事の無いまゝに今にも頭の上に落ちかゝりさうな不安に耐へかねて彼は追ひかけて二度三度と同じ手紙を送つた。そして、待ちに待つたその返事の代りに彼は走り書きの彼女自身からの手紙を受取つた。ああいふ亂暴なことをなさるから母や兄の怒りは曾つて見ぬほど激しく、そのため私は多分明日午後何時かの汽車で母に送られて鄕里――彼女の鄕里は中國の端れであつた――の伯父の許へ返されることになつたと、同じく怒りや絕望に震へたやうな走り書きに認めてあつた。

暫く茫然となつてゐたが、彼はやがて覺悟を決めて立ち上つた。そして一本の手紙を書いて懷中すると直ぐ其處の小使に電話をかけて時間を問合せた後××中學の門前に駈附けた。そして其處から出て來た多勢の生徒の中から彼女の弟を見出して拜むやうにしてその手紙を托した。

その翌日は大雨が降つてゐた。時間を計つて或る停車場で淸二の乘つた電車は折から滿員で、彼は正面のガラス扉を開けて辛うじて身體を捩ぢ入れながら扉を締めるとその把手を握つて正面に向き直

つて立つてゐた。そして濡れた扉の向うに立つてゐる黑い雨合羽の運轉手の背を見るともなく見てゐると彼は不圖自分の前の扉のガラスに自分の顏の寫つてゐるのを見出した。よく見るとその顏の兩眼には涙がいつぱいに溜つてゐた。それを見ると今まで耐へてゐた心が一時に破れて、涙は頰を傳つて流れ落ちた。誘はれたやうに後から後からと愈々烈しく落ちて來たのであつた。

『……、さうした、人中で聲をあげても泣き兼ねないやうな一途な心持になり得たのも實にその時が俺の一生の最後であつた。』

さう思ふと、淸二は急に自分の瞼が熱くなるのを感じた。口惜しいともなく可懷しいともなく、當時そのまゝの昂奮した涙ともなく、熱い涙がはら〳〵と零れて來た。

『居た、居た！』

急に身近に斯ういふ聲を聞いて振り返ると眞白な診察衣を着けたまゝ、友人の醫者が笑ひながら石垣の蔭から歩み寄つて來たのであつた。

淸二はそれを見るとふら〳〵と歩み寄つて片手をさし出した。眼から頰にかけて、涙はそのまゝ流れてゐた。

呆氣に取られた若い醫者は惶てゝ吸ひさしの煙草を投げ捨てながら自分も手を延べて不氣味さうに

清二の手を握つた。

『どうしました、……、飯も喰はないで出かけたと聞いたものだから、……、多分此處だらうとは思つてゐたのだが……。』

この、人の善い笑ひ顔を見てゐると、清二はその前に何も彼も打ち明けて了ひ度くなつた。そして昨夜の電話の事から、糸子の事、お互ひの現在の事まですつかり喋舌つてしまつた。

……、その日の電車で〇〇停車場まで行つて兼て手紙で打ち合せておいた通りに首尾よく女を盗みとつて或る所へ隱してしまつた。間もなく彼は警察へ呼出された。二度も三度も呼出された。それを見兼ねて女は一度自分から實家の方へ歸つて行つたが、結局また彼の許へ逃げて來た。折惡しくその前後が彼の學校の卒業試驗に當つてゐたが、彼はその試驗所へ顔出しもしなかつた。間もなく斯うした女と同棲してゐることが知れると口やかましい同鄕人の忠告となり、彼と鄕里の親との絶交となつた。

『……、其頃僕の親達は勝手に自分の嫁を決めて田舍で伜の卒業を待つてゐたのです。それをさう無理とも思ひませんでしたが、何しろその時の僕は自分から進んで親を捨て度いやうな氣持がしてならなかつたのです。』

清二は笑ひながら話の途中で言ひ足した。

さうして罪人のやうにして兩人が縮み屈んでゐる上へ襲つて來たのは貧乏であつた。その日から自分で食はねばならぬ事であつた。無論其の時の清二の頭には學校など失くなつてゐた。そして一生懸命になつて職業の口を探してゐた。其處へまた迫つて來たのが彼女の病氣であつた。次いで彼女の兄の發病であつた。

『……、同じ病氣になつたことが妹に對する兄の心を和らげまた同じく妹の心をも和らげたのです。そしていま考へれば可笑しいが、さうして今までの兄と仲直りをしようとする女の態度が當時の僕には憎くて〳〵なりませんでした。で、隨分思ひ切つて意地惡く苛めました。何處に自分に斯んな殘忍性が潜んでゐるのかと自分ながら折々は不思議にも思ひましたよ。』

それでも、半年ほど兩人の同棲は續いてゐたが、彼女は次第に清二を疎んで自身の兄や母を慕ふやうになつた。清二の眼を盗んでは兄の入つてゐる病院や母の許を訪ねてゐた。清二もそれを知つてはゐたが、倦み易い彼は、――馴れない激しい勞働に勞れ果て、すつかり意氣地を失くしてゐた彼は、もうそれほど執念深く彼女を苛むことをしなかつた。いや、もつと深く立ち入つて考へれば、清二はもうその時、戀といふもの、女といふものゝ重苦しさに耐へられなくなつてゐたのかも知れなかつた。

さうした彼の狀態は怜悧な彼女の眼によく映つてゐた。それが時々彼に對する憐憫の心となることもあつたが、多くは抑へ難い侮辱や反抗の念となつた。そして、急に飛び込んだ斯うした實生活の激

しさが、發作的に彼女を放縱にしたやうにも見えた。病氣が募つて幾日も床に著くやうになると、清二は先づ醫療の費に差し支へた。それを彼女は口汚く罵りながら、兼てから自分の兄弟のやうに親しくしてゐる醫者があるからそれに賴まうと云つて自分で呼寄せたのが大野といふ若い醫學士であつた。清二は程なく彼が彼女の兄の入つてゐる病院に務めてゐることを知つた。そしてまた偶然にも清二の親友の一人と同鄕人で所謂文學愛好者の一人である事を知つた。

そのうち、終に兩人はさうしたお互ひの狀態に耐へられなくなつて、誰からともなく別れ話を持ち出したのであつた。そして綺麗に手を切つてしまつた。

『それからでサ、……、さうなつて了ふと今までの總ての事が何だか埒もなく馬鹿々々しく見えて來て、丁度その反動でもあるかのやうに僕は急に今まで知らなかつた自由な世界に飛び込みました。その結果がつまりこれでサ、ヒッヒ！』

泣く樣な聲で笑ひながら彼は手を擧げて自分の頭の毛を搔つた。浸み入つた病毒のために、まだ拔け止らない髮は容易く彼の指さきに黑々と搔られて來た。

午後の四時頃、傾いた夕日を受けて清二はまた朝と同じ樣に停車場の材木の蔭に佇んでゐた。何かの都合で昨夜の十時のに乘り遲れて今朝六時に立つ汽車に乘らないとも限らぬと思ふ懸念があつたか

らである。彼是とは疑ふものゝ、清二はまだ糸子が何の要もないのに自分を愚弄するほど阿婆擦れてゐるとは思へなかつた。

汽車は着いた。大半の旅客は改札口を出終つたが彼女は見えなかつた。われ知らず材木の蔭から出て改札口に近づいてゐた清二は、ずつとその一群の終りの方に、寧ろ意外な、すらりとしたその姿を見出した。そして、商家の丁稚らしい男に首を傾げて何かものを訊きながら改札口を出て來る彼女の姿や横顏を見詰めて、相變らぬその美しさに何とはなく清二は胸を躍らせた。

ツイ眼の前に懷中手をして突立つてゐる清二に氣の附いた時、彼女は喫驚した顏をくづして笑つた。清二も笑つた。

『まア！』

と言つたまゝ、澄んだ大きな眼を見張つたが、すぐ傍に不審相に立つてゐる先刻の男を振返つて、

『難有うございました。迎ひに出てゐてくれましたから……。』

と丁寧に首を下げた。

清二は默つて先に立ちながら、兼て考へてゐた樣に取りあへず停車場前の宿屋に入つて行つた。

座敷に入ると直ぐ清二はまだ坐りもせずに彼女を顧みた。

『如何したのです！』

彼女は急に返事をしなかつた。コートを脱いで衣桁に懸けて、一度欄干のついた廊下に出て丁寧に著物の袖や裾をはたきながら座敷に入つて來るとまだ其儘清二が突立つてゐたので、眼と眼と合ふと急に眩しいやうにそれを外らして其處に坐つて了つた。

女中が眞赤に熾つた炭火を持つて來た。

清二も所在なく座についたが、俯向いたまゝ、執念く口を噤んでゐる女を見ると、既う持前のいらいらしさが込みあげて來た。

何か烈しい皮肉でも言つてやらうかと顔を擧げると、女は袂を顔に當てゝ泣き出した。

『如何したといふのです、何か起つたのですか。』

階子段を上つて來る女中の足音を聞くと彼女は急に顔から袂を離したが、茶や搔卷を置いて出て行くのを見送ると、

『隨分ネ、貴郎は！』

咎めるやうに低聲で斯う言ひながら、まだ涙の干ぬ眼を眞正面に清二を見詰めた。

『何故です。』

『斯んな所まで逃げなくつたつて可いぢァありませんか！』

『逃げはしません。唯だ來たかつたから來たのです。』

『妾に隱さなくつたつていゝでせう。』

『何を言つてゐるのです、……隱すも隱さないも、もうそんな必要は無い筈です。』

彼女はまた默つて下脣を嚙み締めた。これは心の焦立つ時の彼女の癖で、よく血を出した事があつた。やがて、俯向いてゐる彼女の長い睫から涙が落ちて來た。

清二はまた暫く石像のやうな女の睫から落ちる涙を默つて見詰めて居ねばならなかつた。一頃より目立つて窶れた横顔や肩のあたりを眺めてゐると、耐へられない憐れさを覺ゆるのだが、それと共にまた自分にも解らぬ憎惡の念も湧いて來た。が、餘りにそれが永く續くので、終に彼も我を折つた。

『まァ、話は後にしませう、……如何です、風呂にしませんか、疲れたでせう、身體は何ともありませんか。』

『どうぞお先に。』

聞ゆるか聞えぬ位ゐの女の聲を聞き流して彼は搔卷を持ちながら部屋を出て行つた。そして、障子を締めやうとして、不圖振返ると惶しく袂を顔に押し當てゝ、其處に突き伏す女の樣子が眼に入つた。

其夜の食膳に清二は二月あまり斷つてゐた酒を取り寄せた。久しぶりの酒は直ぐ彼を醉はせてしまつた。

風呂から出ては清二はもう何も彼女に訊ねなかつた。唯だ彼女自身、または兄の病氣の話、續いて大野の話などが出た。大野、と言つた時、清二はそれとなく瞳を動かして彼女を見たが、彼女も微笑して清二を見返した。大野の話の出るごとに清二が險しい顏をするのが常だからであつた。が、如何考へても彼の疑つたやうなことのありさうな風もなく、唯だ案の定彼女は大野に逢つて初めて清二の所在を知つたのであつた。大野はその同鄕人の伊賀から偶然この事を聞いてゐた。他には一切祕してゐたが唯だ親友の伊賀にだけは他に必要もあつて清二も居所を知らせてあつたのである。

汽車の疲勞が出たものか、一緒に酒にでも醉つたやうに彼女もうつとりとしてゐた。顏の血色もよくなり、身をくづした肩にも手にも足にも軟かさが滿ちてゐた。

容易に盃を擱かぬ清二をちよい〳〵と眺めながら溜息のやうにして彼女は言ひ出した。

『駄目ネ、……、種々話し度いことがあつて來たのだけれど、斯うして逢ふと何も旣うよう言へない。』

直ぐには清二は何ともよう答へなかつた。

『然し、理由は何だか知らないが、よう來ましたネ、何だか僕もたいへん嬉しくなつた。この町は駄目だが、明日は日――といふ溫泉に行きませう。此處から一里ほど山を登るのですが、なァに、山と云つても平らな野みたいなものです。其邊一帶に白樺や落葉松の林があつて其處の溫泉宿からはこの

廣い裾野が一面に見えます。盛りは過ぎたが、まだ秋草が一面でせうよ。折々あなたの事を空想しながら其處を歩いたものだつたが、たうとうそれが實現されてしまつた。アハハ……。』

見ると、女はまた泣いてゐた。

『駄目、妾はまた明日歸らなきァならない！』

『え？』

清二は驚いた。

『嘘でせう！』

『い、え、眞實！』

『何故です？』

『何故でも、……、もう何も訊かないで下さい、理由は無いのですから……、兄に隱れて來たのですから……。』

女の聲はよく聞えなかつた。

清二は、然し、女の歸るといふのを信じなかつた。いつものやうに唯だ拗ねて見るのだと思つた。そして却つて久しぶりに眞實の彼女を見るやうな氣がして可憐しかつた。後は兎もあれ、此處に來てゐる間だけでも出來るだけ慰め撈つてやりたいものだと思ひ込んだ。

膳を下げると清二は一應病院の友人に逢つて來る必要があつた。女の來たことだけは電話で一寸言つて置いたが、其時清二は手許に一錢の小遣も持つてゐなかつたのだ。

三十分ほどしてそゝくさと病院から歸つて來ると、座敷にはもう一つの床が敷かれて、寢衣に著換へた女はその枕許で小さな化粧道具を前に向うむきになつて顏を直してゐた。清二が入つて來ても、お歸りなさいと細く言つたまゝ振り向かうとしなかつた。

それを見ると清二は竦んだやうに敷居際に立ち止つた。そして我ともなく惶しく手を拍つた。驚いた彼女は狼狽へて振り返つたが、すぐまた向うむいて、立ち上つた。そして、手速く化粧道具を押し隱してから、

『どうしたの？』

と身近く寄つて首を傾げながら訝つた。白粉の匂つてゐるその顏を清二は見ることが出來なかつた。女中が來ると清二は、床をもう一つ敷けと言ひつけた。

床が敷かれると、同じく其處にぼんやりと立つてゐる女を僅かに見やつて、低い聲で言つた。

『糸子さん、僕はいま……、わるい身體になつてゐます。わるい病氣です！』

それを聞くと女は、つと身を交はして障子をあけて廊下へ出た。

清二も氣の拔けた樣に、やがてその後に從つた。

戸外は冷たい月夜であつた。

女は欄干に兩手をかけて、それに顏を押し當てたまゝ、固くなつて蹲踞んでしまつた。

清二も何ともよう言はなかつた。寒さうな彼女の肩に手を置くことすらよう爲なかつた。

明らかな月夜の天にはA――火山の噴煙が眞直ぐに黑々と昇つてゐた。

それから五日か六日目であつた。清二は一通の手紙を受取つた。それは思ひも寄らぬ彼女の兄から送られたものであつた。いまだ曾つて斯ういふことの無かつた人からなので、清二は驚いて封を切つた。そして更にその文面に驚いた。五六日前から妹の行方が解らなくなつたが、貴下の方に行つてはゐまいか、よし行つてゐなくとも彼女の事に就いて篤と御相談したいことがあるから、出來るなら歸京して貰へまいかと、極く簡單ではあるが、案外にも打ち解けた口調で認めてあつた。

清二はそれを握つたまゝ、暫くは呆然として果してこれが眞實であらうか、眞實この人から出たものであらうかとさへ怪しまれた。あの翌朝、殆んど喧嘩の樣にして振り切つて歸つて行つた女がまだ家に歸らない……、とすると一體彼女は如何なつたのであらう。何處へ行つたのであらう。

何の要領も與へずに唯だ遙々一夜來て泊つただけで歸つて行つた女の事が、また新しく清二の不審を喚び起した。平常と全然違つてゐた彼女の擧動、初めから終りまで殆んど泣き續けてゐた樣子など

も續いて思ひ起された。どんな場合でも、他人の前で泣顔ひとつ見せたことの無かつた彼女が、殆んど正體なく泣きくづれてゐた汽車の窓の顔さへ眼に見えて來た。そして、さう思ふ清二の面前にはありありとして大きな凶事が浮んで來た。清二は咄嗟の間に立ち上つて歸京する決心をした。

汽車中段々と不安の念に驅られてゐた清二は、東京の停車場に著くと直ぐ○○病院の彼女の兄に電話をかけた。そして、その返事を聞くと直ぐ其處に赴いた。

初めて見る白い臥床(ベッド)の上の彼女の兄は、想つてゐたより一層窶れてゐた。目鼻立に似た所はあるが顔も身體も妹より小さい樣に見えて、齡(とし)よりずつと老(ふ)けてゐた。この人を永い間苦しめてゐたのだと思ふと、いろ〳〵言ふべきことを考へて來たのであつたが、清二もはき〳〵とは口が利けずに、たゞ頸が下げられた。

過去の事に就いては彼は何とも言はなかつた。清二の詫を言ひ出すのをも手を振つて制した。そして細い、はつきりした聲で言つた。

『妹が參つたでせう。』

『え、見えました。そして一晩だけ泊つて、その翌日、早くこちらに歸られた筈です。』

彼はそれを聞くと、默つて眼を瞑ぢた。それが清二の言ふ事をば一々承知してゐる樣子に見えた。

清二はまご〳〵しながら訊ねた。

『そして此方へはまだ歸らないんですか、あのまゝずつと歸れば××日の夕方には著かれる筈です。』

兄は尙ほ默つてゐた。苦痛を忍ぶ樣子があり〳〵とその干乾(ひから)びた顔に見えてゐた。氣を焦(らい)ちながら清二は空しくそれを眺めてゐるよりほか無かつた。

やゝ暫くして、

『實は貴下に種々御相談したいことがあるのですが、生憎く今日母が來てゐませんので、……濟みませんが二三日中にもう一度來て頂けないでせうか。』

『え、承知しました。私は當分此處に居ますから……。』

と友人の伊賀の番地を認めて置いて、清二はその室を出た。そして、二階を降りると直ぐ通りがかりの看護婦を賴んで大野に面會を求めた。

さう思つて見れば如何にも好人物らしい大男の大野は、清二を見るなり、

『如何でした、K――町は？……行つたでせう！』

と笑つた。そして直ぐ、妙な事から電話の事が露(は)れて、ツィ貴下の事を兄さんに打ち明けましたよ、

と笑ひながら眉を寄せた。

『ところが……。』

とまた續けて、

『用心しないといけませんよ、出來たらしい、新しいのが！』

清二は苦笑しながら、強ひて心を落ち著けて、その所謂「新しいの」に心當りは無いかと訊いた。

大野もそれをば知らなかつた。上では何か心當りがあるらしいが、……何しろ氣の毒なのは彼處だ、とてももう永いことはあるまいに、と言ひながら二階を指さした。

伊賀の宅に行くと突然だつたので彼等夫婦は驚いて清二を見たが清二はまた更に驚いた。彼等は糸子がK――町に清二を訪ねて行つたことを知つてゐた。そして今まで清二と一緒に居るものだとのみ思つてゐた。

『何の氣なしに大野に君の事を喋舌つたのだ。すると間もなく糸子さんがやつて來てK――町に君の居るといふのは眞實かと訊くから、知られた上なら仕方がないと思つて、眞實だと言つてやつた。そしたら、是非至急に遇つて置きたいことがあるからこれから其處まで訪ねて行く。それで衣服を著換へて出ては宅で怪しまれるから僕の細君のを一寸貸して呉れと言つて、此處で著換へて行つたよ。』

聞くごとに清二は驚いた。彼女は衣服の事は勿論、伊賀の名をすら殆んど口にしなかつた。

急には返事も出來なかつたが、其夜酒が出てから清二は一伍一什を、ことに今日病院で見聞した一切を友人夫婦の前に打ち明けてしまつた。夫婦も驚いて顔を見合せるよりほかは無かつた。

夜遲く枕についても清二はなか〳〵睡れなかつた。そして襖越しに聲をかけて見た。

『ねえ君、一體何と思つてそんな場合に僕を訪ねて來たのだらう。』

『さァ……。』

友人も眼を覺してゐた。

『逢つたところで、それこそ用談らしいことは一口も言はなかつたのだからねえ。』

『さァ、……昔の事でも懷ひ出したのぢァ無いか。……、現在にやつてゐる事と昔の事とが自然に思ひ較べられて、そしてふら〳〵出懸けて行つたのぢァ無いか。まァ謂はゞ自分の初戀に別離を告げに行つたやうなものかも知れぬよ。』

或はさうかも知れぬと清二も思つてゐたのであつた。そして、衣服を借りに行く位ゐだから、姿を隱すやうになつたのはほんの其場の思ひ立ちで、ことに自分が意外な病氣に罹つてゐた事などが、反動的にさうさせたのであつたかも知れぬと當夜の事を心の裡に思ひ出した。それにしても伊賀の事位ゐは話し出す機會があつたらうにとも訝かられた。衣服の事があるから、と例の鼻柱の強い見榮坊をも思ひ浮べた。

相談したいことがある、といふ衰へ果てた彼女の兄の打ち解けた言葉が不思議な位ゐに強く清二の心を捉へてゐた。若しや改めて結婚して呉れといふのではあるまいか。若しさうであつたならば自分

は如何なる處置を執る可きであらう。たとへ何と云つても彼女を斯うした境地に伴つた同伴者は確かに自分である、と清二は胸の鼓動の高まるのを覺えながら眼を見開いて天井を見詰めてゐた。

『結婚、結婚……。』

清二は寢がへりをしながら、今度は自分自身の事を考へ始めた。過去のこと、現在のこと、更に未來のこと、殊に彼は自身の頽廢し、衰弱した現在をよくよく耐へ難いものに思つてゐた。とても此儘ではゐられない、サテ此處から脱け出すとすると、取りあへず先づ世間並の生活が彼の眼に映る。世間並の生活、靜かな、疲れた樣な生活……。

『結婚、なるほどそれも此際いゝかも知れない……。』

而して夫婦になつた後の糸子のまぼろしがほんのりと彼の心に來て宿つた。空想がちの彼は、或る宗教家たちの傳記などにでもありさうな、悔い改めた、新しい寂しい生活がかすかに思ひ浮べられもした。

『が、……。』

彼は自身でも驚く位ゐ一種の衝動を感じて、息を呑んだ。斯うした感傷的の心持に次第に沈んでゆきつゝあつた時に、不圖眼の前に描き出されたのは、現在の、今夜いま頃の彼女の面影である。何處か自分の知らぬ所に、知らぬ男と隱れ忍んでゐる彼女の姿である。さういふ場合、男に接してゐる彼

女の擧動は生々しい經驗から、清二には鮮か過ぎる程十分に想像し得らるゝのであつた。

點けすてた電燈が友人夫婦の貧しい生活を露骨に照らし出してあか〳〵と壁際に點つてゐる。

『矢つ張り駄目だ、俺の飛び出す場合ぢァ無かつた。今になつて人情の、義理のと云ふのも恥しい位ゐのものだ。終つたものは要するに終つたまゝに任せて置けばいゝのだ。一體どんな氣で俺は斯んなところへ飛び出して來たのだらう！』

彼はすゝり上ぐる樣な氣持で自身を冷笑しながらともすれば湧き立つて來る自分の心を力めて抑へつけようとした。そしてその方便ででもあるかの如く今朝立つて來た裾野の古驛を心に描いた。其處の暗い、冷たい病院を思ひ浮べた。窓から見ゆる火山の煙を想像した。

『彼處がいゝ！　寢られるだけおとなしく彼處に寢て居ればいゝのだ。何も强ひて灰の中を搔き廻して燃えさしの煙を見る必要はないのだ。さうだ、早速また明朝彼處へ歸つて行かう！』

まじ〳〵と彼は天井を見詰めながら、サテ其處までの汽車賃をどうして作つたものだらうと考へ始めた。

燈臺守

『近藤さん、米一斗五升、同じく炭一俵、同じく燐寸一包……』
『よし、よし、よし、……』
『富田さん、玉葱一包。』
『よし。』
船頭たちは一々帳面と照し合せて種々雜多な荷物を船に積み込んで居る。
『一木さん、酒三升。』
と讀み上げると同時にその帳面を持つた老爺は、
『また大將飲み始めたな。』
と細い聲で呟いた。
『なアに、今度はお客樣だ。
積み込んでゐた一人の若い船頭がひよいと頭をあげて、其側でこの風變りの荷積を興深く眺めてゐた私を顧みて笑つた。

私も笑つたが、それと共に昨夜買ひ込んで來た數本の酒の壜の事を思ひ出してその在處を見廻すとそれはまだ船には積まれずに其他の私の荷物と一緒に濡れた砂の上に他の荷とはやゝ離して置かれてあつた。その上の一束のダリアの花が今朝は別して燃え立つ樣に眼についた。これは私の妻から友人の妻への贈物で、わざ〳〵東京から持つて來たものであつた。
荷積の終ると同時に私も船に移つた。普通の漁船より餘程大形の船で、やがてする〳〵と砂から海の上へ押し下された。
港を圍んでゐる山々の其處此處に青みがかつた朝日がさして、暴風雨あとの鹽臭い風が急に際立つて感ぜられた。港の隅の方に集つてゐる數多の碇泊船はありたけの帆を張つて久しぶりの日光に乾してゐる。その帆を卷き上ぐる小さな車の音がコロ〳〵コロ〳〵とまるで蛙の鳴くやうに四邊に起つてゐた。荷物の間に船頭が作つて呉れた座席に私は小さくマントにくるまつて坐りながら珍しい今日の航海に斷間なく胸を躍らせてゐた。
中に幾つかの小島などあつて、下田の港は隨分廣い。その港口の方には外洋からうねり寄る浪が高々と打ち上げて、その向ふには黑色に輝いた海が見えてゐる。その方角へ一直線に進むものと樂しんでゐると船は次第に別の方向へ漕がれた。

二十分も經つたかと思ふころ、船はとある山蔭の大きな岩と岩との間に漕ぎ入れられ五人の船頭は等しく尻を捲くつて波の中に飛び降りた。そして船をば其處の岩にしつかと繫ぎ留めておいて、初めから船に積まれてあつた十個あまりの大きな空樽をどん〳〵岩の上へ運び上げた。岩から更に其處の灌木林の中に擔ぎ込んだと見てゐると、やがて二人の船頭は重さうにその樽の一つを擔いで出て來た。そのあと、そのあとと續くので漸く私にも彼等の爲てゐる事柄が解つて來た。そして立ち上つてその林の方を見ると、果してその蔭からちよろ〳〵と小さな溪が岩の上に流れ落ちてゐた。

清水で滿たされた樽が再び擔ぎ込まれると船は岩から解かれて、今度は眞直ぐに港口の方に漕がれた。港口に近づくにつれて浪は次第に高まつて來たが、やがて削り立つたやうな斷崖の下を漕ぐころは全く狂瀾怒濤の眞只中に在つた。程なくその眞白に泡立つた中を漕ぎ拔けると五人の船頭は船いつぱいになつて叫び合ひながら大小二枚の帆を張つた。

船はそれから只一直線に蒼黑い大きなうねりの中を上りつ下りつ常に斜めになつたまゝ驀地に走つた。遠く近く赤い岩礁の上に飛び散つてゐるその岬端の海は其處等中がゆさ〳〵と搖れ動いてまるで大きな渦卷のやうにも見えた。時には帆柱よりも高くうねりの峰を仰ぐことがあり、時にはそのうねりとうねりの間に挾まれて吸ひつけられたやうに船の動かぬこともあつた。時にはまた頭の上から瀧のやうな飛沫が落ちても來た。船の中のものは勿論、大きな方の帆すらじと〳〵に濡れ終つて、それ

がばた〳〵とはためく毎に雫は雨の樣にそこらに飛び散つた。一體私が東京から下田に著いて以來、海は毎日荒れて、實は一昨日出るべきであつたこの神子元島燈臺行の船も漸く今朝出帆したのであつた。

岬から遠ざかるにつれて海は却つて穩かになつて、張り切つてゐた二つの帆もをり〳〵だらりと帆柱に纏ひ著くやうな事が多くなつた。私は元來船には强い方で、現に二三日前東京から下田までの汽船でも乘合三四十人のうち醉はぬ者はたゞ二人きり無かつた中の一人であつたのだが、今日の航海には身體も精神も大分疲れて來た。そしてその疲勞と共に何とも知れぬ哀愁が身體を浸して來るのを感じた。

今にも浪に飛び込むことかと斷えず固くなつてゐた四肢五體が海の穩かになるとゝもにぐつたりとくづれて、漸く船頭たちとも言葉を交し得るやうになつた。

『旦那も矢つ張り燈臺の方の人かね。』

彼等の一人が私に訊いた。

『いゝや、唯だ一木君と舊い友達でネ、遙々東京から訪ねて來たんだが……、一木君は相變らず酒を飲むと見えるね。』

『一頃は月給がみな酒になりよつたが、お内儀さんが來さしてからぴつたり止めさした、なア。』

と仲間を顧みた。

『うん。』

丁度帆を直しに立ち上つたその男は、沖の方を望みながら、

『ホ、今日は速え、もう見え出した。』

と言つてそれとなく私を見下した。

私も直ぐ立ち上つたが、なるほど舳の方に當つて一つの大きな岩の島が浮かんでゐる。

『あれだネ、神子元島は。』

『うん、もう直き燈臺も見ゆるよ。』

さう聞くと一時忘れてゐた友のことがまた私の心にいつぱいになつて浮かんで來た。三四年逢はずにゐるうちに燈臺守などになつて一體どういふ風に變つてゐるか、非常に平靜にはなつてゐるらしいが果して一生燈臺守で暮すつもりか、細君はどんな女か、今日はどんなに自分を待つてゐるだらうなどと、私の心は先きから先きへと動いて行つた。

程なく燈臺は見え出した。黑いと見えた岩の赭い肌も解るやうになつた。兼ねてから樹木一本無い赭岩の島だと聞いてゐたが、眞白な丈高い燈臺はたゞ寂然としてその岩の端に突き立つてゐるのである。

やがて最も高く聳えてゐる岩の頭に一二の人の立つてゐるのが眼に入つた。それが何やらせつせと

振つてゐるのも見え出した。

島に近づくに從つて海はまた泡立つて來た。

『危ねえ！』

と船頭に叱られながら私はいち早く船から岩に飛び移つた。

驚くほど老けて見ゆる友と向ひ合つて立つた時、私は彼の眼が涙で一杯になつてゐるのを見た。やがて險しい岩の上を並んで歩き出さうとすると、彼はそそくさと自身の履いてゐた草履を脱いで私の前に揃へて呉れた。そして私の履いてゐた下駄を自身に履いた。

私は荷物の中からダリアの花だけを取つて携へながら斷崖の横に岩を掘つて造つてある細い徑を友のうしろから喘ぎ〳〵登つて行つた。二三丁も登つたと思ふと、この島の頂上らしい所に出た。其處の五六坪ほど岩を均して平地にしてある所には二三人の女と、四五人の子供とが集つて私たちの登つて來るのをさも珍しさうに眺めてゐた。私たちが其處に登り着くと一人の若い女が突然其中から離れてその平地の隅に岩をくり拔いて造つてある洋風の家屋の中へ駈け込んだ。私たちも續いてそのあとから入つて行つた。

友の部屋は殆んど眞四角らしく感ぜらるゝ六疊敷位ゐの部屋で、私は直ぐこの家屋の石造りである

事を知つた。唯一つ附いてゐる長方形の小さな窓の所で見ればその壁の石の厚さは二尺位ゐあつた。

『大暴風雨の時に浪が打ち上げて來ても壞れぬ樣に造つてあるのだが、どうも野蠻な建築さネ、……浪がかい、來るとも、さうなれば宛然海嘯と同じだからな。』

友は笑ひながら、其處のガラス戸を押し開けた。窓の中程まで例の赤味がかつた岩の頭が直ぐくつ著いてさし出てゐて、その上に極めて濃い紺青の秋の空がくつきりと見えてゐる。私は初め入つて來た時からこの窓の空を非常に寂しく感じてゐた。

其處へ先刻の若い女——初めて逢つた友の妻は私の持つて來たダリアを何やら大きな壺に投げ挿しにして持つて來て窓に載せた。美人ではないが、うひ〳〵しいまだほんの娘らしい人である。

『田舍者でネ、可笑しい事ばかりだよ、先刻君が見た通りで、あんなに待つてゐた君に逢つても物ひとつよう言はんのだからな。』

窓の石の上にその壺を置くと直ぐ羞しさうに室から出て行くあとを見送つて友は言つた。友の鄕里の遠い親類に當る家から呼んだことをば前から手紙で聞いてゐたのであつた。

ダリアは花屋の骨折で幸ひに枯れなかつた。そして蕾の樣なのを選んで來たのだが、途中ですつかり滿開になつてゐた。いろ〳〵の背景がい、せゐか、此處では一段と見勝りがせられて、そゞろに私は妻の土産の思ひつきのよかつたことを喜んだ。

『何年ぶりに斯んな花を見るのだらう。』

と言ひながら友は立つて行つて眞黑く痩せた顏をその花の亂れた中へさし入れたりした。

餘り久しぶりに逢つた、めか、どうも二人とも思つたほどに心が打ち解けなかつた。そしてお互ひに互の心を讀まうとする樣な風も見えた。斯んな事は曾ての彼には全然無いことであつたが、などと私はそれにも心が配られた。

どや〳〵と入口の方が騷がしくなつて、先刻の船頭共が荷物を運んで來た。友は直ぐ飛び出して自分だけのものを室內に運んで來た。

『これはお土產か。』

と私の持つて來た酒の壜の束ねたのを提げながら、

『オイ、此方から先にしろ。』

と細君に言ひつけた。

解いてゐる友の荷物は多く食料品であつた。中には私のために特に取つたらしい西洋手拭や枕などもあつた。そして最後に幾通かの手紙や新聞を取り出して、早速開封して讀みかけたが突然彼は立ち上つた。

『オイ、久留米の叔父が俺に百圓呉れた、百圓！』

と頓狂な聲で細君を呼んだ。細君も濡れた手のまゝで入つて來て眼を見張りながら手紙を引つ張り合つて讀んでゐたが、

『まァ嬉しい！』

と言つて、身體に嬌態をしながら踊るやうにして出て行つた。勝手元は共同で、彼の部屋の筋向うに當つてゐたが、今の友の聲が聞えたと見えて其處でも他の細君連との間に百圓々々といふ話が始つた。

『何だネ。』

私は少し手持無沙汰の氣味で其處に落ちてゐる爲替劵を眺めながら訊いた。

『イヤ、僕の叔父がネ、還曆の祝ひの代りに送つて呉れたのだよ、貧生少し浮めるわけよ。』

と言つて酎へてゐたやうに笑つた。

やがて酒が始つた。以前は二人とも一升二升を平氣で平げたものだが、昨今私はめつきり身體を傷めて一向に飲めなかつた。友はまた私にも增して弱くなつてゐた。それでも酒が次第に身體に廻るやうになると段々昔の氣持がお互ひに萠して來た。

『それで如何だ、もうすつかり落ち著いた樣なのか。』

先刻から訊かうと思つてゐたことを漸く私は打ち出した。

『うん、もうすつかり落ち著いた、もう以前の樣な馬鹿な眞似はせん、一生おとなしく燈臺守で暮して行くよ、のんきだからなア、第一食ふに困らん。』

幾らか反語の樣に聞えぬでもないが、矢張り眞實さう思ひ込んでゐるらしいと私は思つた。

『君の覺悟ぢァ當にァならん。』

『うゝん、馬鹿な、今度こそは確かだ、それに斯んなものが出來て來るともう動きが取れんがナ。』

彼は側に來た細君を顧みながら、ふと思ひついた樣に、

『君とこの子供は如何だ、達者か、どうも僕の身體には子の種がありさうにないのでこればかりは悲觀してるよ。』

過去を思ひ出したか、首を縮めて苦笑した。

『どうだ、僕のを遣らうか、ハ、、、、』

話はやがて吉原の事になつたり、品川の事になつたり、當時の遊び友達の事になつたり、他愛もない高笑ひが酒と共に次第に烈しく續いて行つた。

其處へ先刻の船頭がもうすつかり例の樽の水をもそれ〴〵運び上げたと見えて、そろ〳〵歸らうと思ふからと云つて次回の註文品を訊きに來た。

それを聞くと私は發作的に膝を直した。